
My Dentist - 先生。 -

ジェレミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

My Dentist - 先生。 -

【Nコード】

N1845G

【作者名】

ジェレミー

【あらすじ】

高校3年生の水嶋きいは、まだ男の人と交際した経験がないちょっとダサめな女の子。そんなきいが、優しい歯科医師と出会い・・・

優しい先生。

「きい！帰ろう」

ホームルームが終わって、せんちゃんが声を掛けてきた。

「あーごめん、せんちゃん、今日は一緒に帰れないの」

鞆に教科書を入れながら謝る。

「え？なんで？」

「今日、これから歯医者さんなんだ」

「歯医者あゝ？どつか痛いのか？」

「んゝ、先週ぐらいから急に。右上の奥歯が痛み出して」

右の頬を擦りながら答える。

「そつかあ。帰りに一緒にパフェ食べに行こうって思ってたけど、歯が痛いんじゃない？無理ね。」

鞆を両手で持ちながら、肩を落とすせんちゃん。

「ごめんね。パフェはまた今度付き合おうよ。」

「わかってる。それはいいけど、予約とか入れてあるの？」

「うん。１７時に」

二人同時に教室の時計に目をやる。

まだ１６時だ。

「どこの歯医者？」

「駅前の、ここ最近できた、新しいところ」

「ああゝ、２２時ぐらいまでやってるところでしょ？」

「うん、そう。先週痛くなって、すぐ電話したんだけど、一週間先まで予約はいっぱいだって言われて、今日になったの。駅前だから、夕方は特に混むみたい」

「あそこなら１５分くらいで着くじゃない」

「うん」

「一緒に、時間潰してあげようか？」

せんちゃんが携帯を開きながら言う。

「いいの？」

「いいよ。今日は何の予定もないし」

せんちゃんはそう言っていると、私の前の席の椅子に、私と向かい合うように後ろ向きに座った。

「ありがとう。ごめんね」

「ってかさ、歯医者とか怖くないの？」

視線は携帯に向けたまま、眉間にしわを寄せている。

「んー・・・、実は歯医者さんに行くのは小学校以来で、内心ちよつと怖い」

肩を窄めて苦笑い。

「やっぱりねー。私も歯医者は怖くてやだな。」

「でも、痛むの放っておくのも怖いし・・・」

「あの音がねえ。削る時のあのキーンっていう・・・」

「あああー言わないでよー」

思わず耳を押さえてしまう。

「それより、きい、あんた進路決定した？」

指の代わりに、開いた携帯で私を指す。

「進路・・・まだ。」

にやける様に言っていると、せんちゃんは呆れ顔。

「もう時間ないわよお？」

「わかってるけど・・・大学に行くか、専門学校に行くか迷ってて。せんちゃんは短大で決まりでしょ？」

「うん、私は親の希望もあるし、短大でゆっくり就職決める。」

「もう9月だもんね。いい加減に決定しないとなー・・・。この前担任にも言われたし」

「まあ、うちはよその進学校と違ってのんびりしてるし。これである程度将来も決まってくるしね。きいみたいにちゃんと悩んで決めた方が、後々困らないよきつと。」

「んー・・・」

そうなんだよなあ・・・。

将来が決まってくる大事な進路だし、迷っちゃうんだよなー。って
言っても、もうそんなに迷ってる暇はないんだけど。

せんちゃんは楽観的な性格のせいかな、将来への迷いや不安はあまり
ないらしく、進路も初めから短大と、あっさり決めていた。

その反面私は、この前担任に呼び出されたにも関わらず、未だにぐ
ずぐず迷っているという優柔不断。自分には将来どんなことが出来
るのか、まだよくわからない。なりたい職業より、自分に出来る職
業を考えているからかもしれない。

大学に行くなら文系で、専門学校なら医療系に進みたいという、漠
然とした希望はあるものの、志望校はうまく決まらず・・・。

「そろそろ出る？」

せんちゃんに言われて時計を見る。

「あ、そだね」

学校の正門を出て、駅に向かって歩く。

9月の、まだ汗ばむ日差しのせいで、進路に向けての焦りも薄れる。

「きい、あんたさ、高校卒業したら彼氏くらい作りなよ？」

「え？彼氏？」

「そうよ。17歳にもなって、男と付き合ったこともないって、ち
よっと最近では珍しいんじゃない？」

「ー・・・」

そうなのだ。

私は生れてこの方、まだ男の人と付き合ったことがない。

中学の時は、クラスの男の子に片思いなんてのもしたことはあった
が、告白したり、付き合ったりなど考えたこともなかったし、進学

した高校は女子校。

出会いもなければきつかけもない。

ただ平凡に楽しく学校生活を送っていたら、気がつけばもう高3の秋だ。

それに比べてせんちゃんはすごい。

他校の男子と付き合ったり別れたり、今の彼は、私が知ってる限りでは6人目だ。

綺麗な髪のロングヘアーで、明るくて、誰とでも気さくに話せるせんちゃん。

高校に入学してからの最初の体育の授業で、足を捻った私を医務室へ連れて行ってくれたのがせんちゃんだった。

『私、泉 舞子。せんちゃんって呼んで。よろしく』

『あ・・・私は水嶋きい。よろしく・・・』

笑顔で握手を交わしてくれたのを覚えている。

以来、3年間同じクラス。

高校で出来た親友だ。

「きい、あんたそのメガネ！まずその黒縁メガネがダメよ。」

「えっ、だって私メガネがないと・・・」

「ダメい。」

「ええっっ」

「コンタクトにしてみれば？きい、顔立ちは結構いいんだから、モテると思う」

「いや、モテるって・・・今のところ、あんまりそういうの興味ないっていうか」

「んもあゝ、だからあんたは色気がないのよ。男に興味がないからっ」

「だって女子校だし。身近にいい人がいなきゃ、興味も湧かないよ」「だから私がいつも紹介してやるって言ってるのに」

「やだ。そういうのはやなの。ちゃんと自分で見つけたっていう

か、出会いたいっていうか・・・」

「ハイハイ、わかった。いつまでも夢見る少女みたいなこと言っ
てなよ。ついでにそのおさげもダサイ。」

「ぶーっ」

「あ」

せんちゃんが突然立ち止まる。

「あそこでしょ？」

駅の向かいに建つビルの4階を指さす。

「あ、うん、そう。」

「じゃあね。痛いトコ、しっかり削ってもらっておいで〜キーン」

「んも〜やだぁー」

「バイバイ」

「ばいばーい」

手を振りながら駅構内に入って行くせんちゃんを見送ってから、ク
リニックのあるビルへと歩く。

うつ・・・

なんかドキドキしてきた。

痛いのかな・・・

削るのかな・・・

やだよぉー・・・

エレベーターで4階に上がると、目の前にクリニックの扉があった。
恐る恐る扉を開けると、歯医者特有のにおいが鼻を突く。

中に入ると、向って右側に受付があり、そこから声を掛けられた。

「こんにちは」

受付の若い女性だ。

「あ、こんにちは」

「ご予約ですか？」

「はい、水嶋です」

女性はパソコンで予約の確認をする。

「はい、１７時のご予約ですね。本日、保険証はお持ちでしょうか？」

「あ、はい」

財布から保険証を取り出して手渡す。

「はい、お預かりします。今回初診となりますので、問診票の記入をお願いします。」

「はい」

女性から問診票の付いたクリップボードを受け取り、待合室のソファーに座った。

待合室には、私以外に患者さんが３人。

真新しい白い壁に囲まれたそこには、４２型のプラズマテレビが、淡いオレンジのソファーから正面に見られる位置にある。

そしてその横に、曇りガラス張りの診療室へのドアがある。

問診票に必要事項を記入していると、待っていた他の患者さんが次々と呼ばれて診療室へ入って行く。

３人の患者さんが、３人とも違う医師に呼ばれていた。

小学校の頃通っていた歯医者さんは、家の近くにあった小さなところで、医師は一人、他に歯科衛生士が３～４人、診療台も３台くらいしかなかったように思う。

問診票を受付に渡して、再びソファーへ座る。

最近の歯医者さんってすごいなあ・・・。

広いし、キレイだし、先生もいっぱいいるみたいだし、助手とか衛生士の人も合わせたら何人くらいいるんだろ・・・。

すると、テレビの横のドアが開いた。

「水嶋さん」

スラリと背の高い、長い白衣を着た若い男性医師が、私を呼んだ。
青いマスク越しに、笑顔を向けている。

「あ・・・はい」

ずり落ちたメガネを右手で押し上げて、ソファから立ち上がった。

「お待たせしました。どうぞ」

笑顔のまま、診療室へと私を促す。

鞆を持って中に入る。

入った途端、診療室の、予想以上の広さに驚いた。

診療台は確認できるだけで10台、全て壁で仕切られている。
ブースごとに番号が付けてあり、奥にはX線室や個室もある。

うわー・・・すごい。

なんだか歯医者さんっていうより、エステサロンみたい。

って、エステサロンなんて行ったことないけ・・・

ドンッ

えっ

「お？」

先生の声と同時にメガネがずれて、視界がぼやける。

きよろきよろして歩いていたらせいで、前を歩いていた先生が立ち止

まったことに気付かず、思いっきり顔からぶつかってしまった。

「あっ・・・す、すみません」

視界がぼやけて距離感が掴めない

「ハハッ、大丈夫？」

慌ててメガネを戻す

ドキッ・・・

「あ・・・」

思っていた以上に、先生の至近距離に立っていた。
すぐ目の前に、先生の青いマスク。

「すすすみませ・・・」

思わず2〜3歩後ずさり

「ハハハッ、いいよ。大丈夫？」

「は、はい」

うわぁー恥ずかしい

「じゃ、どうぞ、座って」

6番ブースの、診療台のシートだった。

袍を置いて、言われるままにシートに座る。

シートの前には、器具台とパネルモニター、それに繋がるマウスがある。

「高校生？」

先生が、カルテを見ながら言った。

「はい」

「学校帰り？」

スカートを履いている私に、そつと膝掛けを置いてくれる。

「あ、はい・・・」

「そっか」

先生がふつと笑う。

あれ・・・

なんでだろう

先生と少し話したただけなのに、さっきまでの治療に対する不安が消えていた。

先生は、ジャラジャラと治療器具を出し、うがい用の紙コップをセツトした。自動的に、コップに水が注がれていく。

「はい、ちよつと失礼しまーす」

背後から手を回し、青いスタイを胸元に掛けられた。

なんか・・・

こういつのつて緊張するっ

先生は再びカルテを取ると、私の座っているシートの右隣に座った。
「えーと、今日から水嶋さんの治療を担当します、松山です。ヨロシク」

マスクのまま、また笑った。

「あ、よろしく願います・・・」

「んーと、右上の奥歯が痛むのかぁ・・・」

問診票を見ながら、首をコクコクさせている。

「いつから痛い？」

「えっと、先週です」

「どんな痛みかな？」

「え、どんな？」

「うん、例えば、何か沁みるとか、ズキズキするとか」

「あ、冷たいものが沁みるので、虫歯かなって思ってた・・・」

「冷たいものが沁みる・・・ね。うん」

カルテに何か書きこみながら、先生は頷く。

「じゃあ、まず見てみようね」

先生はキャスター付きの椅子に座ったまま、シートの背後に下がった。

背が高いせいか、長い右足が視界に残る。

「シートを倒しまーす」

先生が言くと、ゆっくりとシートが倒れていく。

口にライトを当てられる。

「はい、じゃあ開けてー・・・」

私にしか聞こえないような小声で、マスク越しに囁く。
言われるままに、口を開く。

先生が、ミラートップで口の中を見る。

真剣な、切れ長の目。

高い鼻に交差する、青いマスクのライン。

うわっ近い・・・

男の人を、こんなに近くで見るのは初めてかもしれない。
気がつく、なぜか心臓がドキドキしていた。

なんだろ・・・

ドキドキする・・・

やっぱ、痛いのが怖いからかなあ・・・

もう・・・

ここに来る前にせんちゃんが変なこと言うから、男の人意識しちゃ
うよあ・・・

「ハイ、いいよ。口閉じて」

先生に言われてハッとする。

「うがいをどうぞー」

シートを起こされる。

先生が、隣に戻ってくる。

「水嶋さん、歯の治療コワイ？」

下から覗き込むように、優しい顔つきで尋ねてくる。

「え？」

「今、目をかたく閉じてたから、もしかしてコワイのかなーっと思
って」

え？

私、目閉じてた！？

無意識に！？

「あ、すみませんっ」

「いや、謝らなくていいんだよ。以前の、古いやり方の治療を受け
て、痛い思いをしたことのある患者さんは、治療を怖がるケースが
多いから」

「あ・・・そうですか・・・」

「うん。大丈夫？」

「はい」

「うん」

また笑った

「で、痛むところはね、虫歯じゃなくて、親不知だね。」

「親不知？」

「うん。親不知が生えてきてるところの歯茎が炎症を起こして、
それが痛みの原因になってるんだよね」

「はあ・・・」

「でね、今日は痛むところを消毒して、炎症止めのお薬を出してお
くから、家に帰ってから食後に飲んでね。」

「・・・はい」

「うん。でも・・・、将来的にはその親不知、抜いたほうがいいか
も」

「えっ!？」

思わず焦った声を出してしまう。

「あ、いや、今すぐってわけじゃないけど、炎症を起こすってことは、あまりいい生え方をしてないんだよね。見る限り、ちょっと斜めに生えてきてる。今日は痛みを治せても、多分またいつか痛むと思う。」

「あ・・・、はい」

「うん。いやまあ、それはまた、その時考えよう。とりあえず今日は、消毒をしようねっ」

子供をあやすかのように、優しい口調で先生は言う。
再びシートを倒される。

消毒をされている間、先生の顔ばかり見てしまっていた。

ドキドキ・・・

ドキドキ・・・

なんでだろう・・・

痛む治療はしなくて済んだのに、ドキドキ鳴ってる

私、なんか変だ

ライトが消える。

「ハイ。じゃあ、シートを起こしまーすっ」

シートがゆっくりと起こされる。

先生が背後から手を回し、スタイを外す。

「水嶋さん、3日ぐらいしたら、また来てもらえる?」

「あ、ハイ」

「うん。もうしばらくは痛むと思うけど、徐々に治まってくるからね。もう一度状態を見たいから、予約して帰ってね。」

「はい」

「うん。じゃあ、お大事に。」

「お世話になりました」

鞆を持って、ブースを出ようとする。

「気をつけてね。前見て歩いて」

振り返ると、先生がいたずらな笑顔を向けていた。

「あっ・・・ハイ」

顔が熱くなっていくのが、自分でもわかる

優しい、先生の笑顔

帰りの電車に揺られながら、頭の中は松山先生のことばかりだった。高校に入ってから今まで、学校の先生以外、身近に男の人はいなかった。

だから、珍しく接点を持った歯医者先生の先生に、少し緊張してるだけなんだと思う。

男性だから、つい意識しちゃって。

だから、ドキドキしてるだけ。

きっと、それだけ。

明日には、治まってるはず。

胸のドキドキも。

右の頬の痛みも。

でも

どうしてだろう。

次の予約が

待ち遠しい

優しい先生。（後書き）

第1話を読んでくださりありがとうございます。
表現力が大変乏しく、小説とはとても言えない文章ですが、ストーリーを楽しんでいただけたら嬉しいです。

先生への確信。

「きい」

「・・・」

「きい」

「・・・」

「きいってば！」

「ハッ」

「ちよつと大丈夫う？何ボサーツとしてんのよ。お昼食べよ？」

昼休み、気がつく、せんちゃんが腕を組んで目の前に立っている。

「あれ、ボサーツとしてた？私」

「してたじゃない。何かあつたの？」

「何かつて？」

「だから、ボサーツと考えこんじゃうような何かよ」

「・・・」

「ね、何考えてたの？」

「・・・せんちゃん」

「ん？」

「せんちゃん、2年の時付き合ってた人って、確か年上だったよね？」

「うん。なんで？」

「え？」

「なんで、そんなこと聞くの？」

「いや、あの、別になんでもない。忘れて。ご飯、ご飯」

「なによ、変なの」

昨日から、松山先生のことから頭から離れなくて困ってる。

たった一度、診てもらっただけの先生なのに。

昨日初めて会ったばかりなのに。

先生の顔

先生の声

先生の目

先生の笑顔

『気をつけてね。前見て歩いて』という言葉と共に

何度も何度も頭の中で・・・

右の頬の痛みは治まったのに

胸のドキドキは治まらない

「きい、誰か気になる人でもできた？」

「ゲホッ・・・ゲホゲホ」

口に入れていた物が喉に詰まる。

「ー・・・」

「なっ、なにが！？何言ってるのせんちゃん」

慌ててペットボトルのお茶を飲む。

「昨日、彼氏作れって言ったからさ、早速誰かい人見つけたのかなーと思って」

お弁当のウィンナーを食べながら、せんちゃんは細い疑りの目で私を見ている。

「そんな、言われてすぐ見つかるものじゃないでしょっ」

「年上なの？」

「はっ？」

「顔赤いよあんた」

「くくく」

「あははっわっかりやすい」

せんちゃんは鋭い。

ホントに敵わない。

「べつ別に、いい人とか、そんなの、まだわかんないし」
「誰なの？」

「・・・昨日・・・初めて会ったんだけどね・・・」

「うん」

「はっ・・・」

「は？」

「・・・歯医者・・・先生が・・・その」

「ああ〜！」

せんちゃんがニヤリと笑った。

「・・・」

「そーか、そっちかあ！なるほどね。年上なわけだ。」

「んー・・・あ、でも、まだそんな風に思ってるわけじゃなくて」

「ふうーん？」

「ー・・・」

「気になるんだ？」

「・・・うん。昨日から、頭から離れなくて」

「へええ〜。つい昨日の放課後までは、男に全く興味を示さなかったコが、たった1日で、男のことで頭がいっぱいとはね〜」

「なんだか・・・、気がついたら考えちゃってて」

「一目惚れだね。」

「いや、まだそんなんじゃない」

「頭から離れないんでしょう？その先生のことが」

「そうだけど」

「気になってるってことは、いいなってるってことでしょ？」

「でも、たまたま担当の先生だっただけで、その・・・好きとか考
えるのは、まだ早いかなくて。しかも、すごく大人だし、相手にし
てもらえるわけじゃない」

「そんなことわかんないじゃない。」

「・・・」

せんちゃんはいつも前向き。

何事も諦めないその性格に、いつも勇気づけられてる。

だから、彼氏もすぐに出来ちゃうのかな？

「どんな人？」

「んー・・・背が高くて、髪は短めで、なんか優しくて・・・よく笑
うというか」

「優しいのは患者だから当たり前かもしれないけどねえ」

「うん・・・」

「名前は？」

「松山先生」

「年は？」

「わかんない。若いけど・・・昨日会ったばかりでそんなことまでわ
かんないよ」

「あーまあね」

でも、今の私は彼氏がどうのここの言ってる場合じゃない。
悩むべきは進路だ。

来月は早くも中間テスト・・・。
この前担任に呼び出された時も、中間テストまでに進路を決めてお
けて言われたし・・・。
んー・・・

「きい」

「・・・」

「きい！」

「ん？」

「ちよつとあんたね、今日は特にボサーツとする回数が多いよ？」

「だって、頭の中がパニックで。進路のこともあるし」

「ー・・・あ」

せんちゃんが、何か思いついたような顔をした。

「なに？」

「進路」

「え？」

「歯科系に進むっていうのは？」

「歯科・・・」

「うん。歯科衛生士の専門学校とか」

「ー・・・」

考えたことなかったけど、専門学校なら医療系に進みたいって思っ
ていたし・・・

「次はいつなの？」

「何が？」

「歯医者さん」

「あ・・・あさって」

ああ・・・だめだ。

松山先生の顔がまた蘇ってくる……。・

「ふふふっ、いいなーきい。今すぐドキドキしてるでしょ?」

「ー……。」

「次行った時に、その先生だけじゃなくて、衛生士さんの仕事も見学してくれば?」

「うん……。」

「放課後、図書室行ってみようよ。大学とか専門学校のガイドブックいっぱいあるし。」

「うん、そうだね」

・放課後・

図書室でせんちゃんと進学ガイドを探す。

私の進路のために、親身になってくれるせんちゃん。

せんちゃんと友達になって、本当によかったと思う。

ちよつと……。辛口なところはあるけど。

「医療・・医療医療・・歯科歯科歯科・・歯科衛生士! あつたよ、きい。このページから」

「あ、うん」

せんちゃんに、分厚い進学ガイドを渡される。

「へえ、なになに、歯科衛生士国家試験受験資格取得……。だつてよ? 歯科技工士? とかもあるね」

「うん……。一般入試の科目は国語と……。げっ、数学って書いてあるっ」

「医療系だしねー」

「私、あんまり数学得意じゃない……。」

「知ってる。5教科の中で一番点数取れてないよね」

「うん。数字に弱くて……。」

「でも、まだ入試まで時間あるし、勉強すれば大丈夫よ!」

「うん。」

「じゃあ、その方向で進路決めていく?」

「んー。もう迷ってる時間もないし、今度歯医者さんに行って、親にも相談して決める。」

「ふふん」

「なに?」

「あんた絶対、歯科衛生士に決めると思うよ。」

「どうして?」

「だってえー、資格取れば、その松山センセと一緒に働けちゃったりするの、夢じゃなくなるよん」

「ニヤニヤしながらせんちゃんが言う。」

「別に私は、そんなつもりじゃ・・・」

「ふうーん」

「なによ、もうっ」

「次歯医者行く時、メガネ外して行きなよ。ダサいから」

「もおーっ、うるさい」

せんちゃんが言ってること、正直、全く考えてないわけじゃなかった。

資格取ったら、もしかしたら、今より少しは、先生に近づけるような・・・

え?

これじゃまるで、松山先生のことが本当に好きみたいじゃない! まだ、一度しか会ったことないのに・・・。

「・・・やっぱり、せんちゃんが言うとおり

一目惚れ・・・なのかなあ・・・

初めてクリニックに行った日から3日。

3日なんて、あっという間。

右の頬の痛みはすっかり治まって、クリニックの扉の前に立っていた。

「すう・・・はぁ・・・」

ドキドキ

ドキドキ

だめだぁ。

深呼吸しても、ドキドキが止まらない。

扉を開ければ、松山先生に会えると思うと、胸の音は速くなるばかり。

よしっ・・・行きますっ

扉を開けて、クリニックへ入る。

歯医者さんのおいが、鼻を抜ける。

待合室には誰も座っていない。

「こんにちは」

受付の女性のに声を掛けられるのと同時に、一瞬、診療室のドアへ目が行く。

「こんにちは。予約してます、水嶋です。」

そう言つて、診察券を渡す。

「ハイ。お掛けになつてお待ちください。」

言われるまま待合室のソファに座り、呼吸を整える。

ドキドキを静める。

ドキドキを静め・・・

静まらないっ

あゝドキドキする

どうしよう

こんなんじゃ、絶対緊張してるってわかちゃうよ

「水嶋さん」

診療室のドアを開けて、私を呼んだのは松山先生じゃなかった。

白衣を着た、綺麗な女性。

「あ、はい」

「中へどうぞ」

あれ？

松山先生じゃないのかな

靴を持つて、中に入る。

待合室ではわからなかったが、治療を受けている患者さんは多かった。

あちらこちらで、先生と患者の会話や、治療している音が聞こえる。半歩先を歩く白衣の女性に付いて行く。

今日は8番ブースに案内された。

「こちらへどうぞ」

「はい」

靴を置いて、シートに座る。

「私、上原と言います。松山が只今、他の患者さんの治療に当たっているのです、もうしばらくお待ちくださいね。」

「あ……はい」

そう言うのと、上原先生は丁寧に、私にブルーのスタイを着け、治療の準備を始めた。

その姿を、なんとなく横目で追ってしまふ。

私よりも背が高く、スタイルもいい。

洗練されたメイク。

アップにまとめられた、綺麗な茶色い髪。

そっか。

松山先生の周りには、こんな女性が働いてるんだ。

そりゃあそつだよね。

私の知らない

大人の社会

上原先生を見ていると、さっきまでのドキドキがすぐに静まった。

冷めた……と言った方がいいかもしれない。

私は何をドキドキしてたんだろう。

私みたいな子供が

こんな大人の社会で働く松山先生に

ドキドキしたりして。

なんだか、ばかみたいに思えてきた。

私なんかが立ち入れるわけない。

何を勘違いしてたんだろ。

ホント・・・ばかみたい。

「松山が参りますので、お待ちくださいね。」
笑顔も素敵だ。

「はい・・・」

そう言っと、上原先生はブースを出て行った。

何やってんだろ・・・私

ぼんやり座っていると、足音が近づいて来る。

「おっこんにちはっ、水嶋きいちゃん！」

ドキンッ・・・

振り返ると、白衣の松山先生が、カルテを持ってブースに入ってきた。

「…………へっ？」

水嶋きいちゃん？

「ハハハッ。へって」

そう言いながら、先生は私の右隣に座る。

「あ…………」

「僕の友達にもね、『みずしま』っているんだ。きいちゃんとは、『しま』の字が違っけどね。」

きいちゃん？

「は…………」

「友達は、普通の『島』の方。それで、水嶋さんって呼ぶの、ちょっと違和感があってね。」

だからっていきなり…………

ドキドキドキドキ

しっ心臟に悪い・・・

「だから、水嶋さんじゃなくて、きいちゃんにしようかなと」

笑顔で、淡々と話す先生。

そのテンポに、ついて行けてない私。

「いいかな？」

「あ・・・はい・・・」

「うんっ」

今日はまだ、マスクをしていない。

マスクのない、先生の顔を初めて見た。

凜々しい眉と切れ長の目。

額からのびた高い鼻に、少しアヒルっぽい大きめの唇。

くつきりと形のいい喉仏の下に、ダークグレーのカッターシャツに黒のネクタイ。

カッコいい・・・

「その後、どうだった？」

カルテを見ながら先生が尋ねる。

「え？」

「ん？まだ痛むかな？」

「あ、いえ、あの、大丈夫です、もう・・・」
思わず、ずり落ちたメガネを押し上げる。

うつ・・・

動揺してるのが全面に出ちゃってる・・・

「そう？よかった」

優しく微笑む先生。

「じゃあ、ちよつとだけ。状態を見て、もう一度消毒しようね。」

「・・・はい」

先生が背後に回り、シートを倒す。

マスクを付けて、ライトを当てられる。

「はい、開けてねー・・・」

せつ先生の顔が・・・

近い

近い

近い

近いいつ

せんちゃんの言うとおり、メガネ外しとくべきだったかなっ・・・

うつうつ

助けてえ

「ハイっ」おしまい。口閉じていいよー」

ゆつくりと、シートが起こされる。

先生が、右隣に戻ってくる。

「炎症も治まつてるし、大丈夫みたいだね。」

「はい」

「今、全体を見て思ったけど、きいちゃんは歯がすごくきれいだね。」

「え・・・」

「まあ、親不知に関しては抜いたほうがいいけど、それ以外はごくきれいだと思うよ。」

「そう・・・ですか」

ドキドキドキ

「うん。他に、痛んだり気になるところがなければ、一応これおしまい。」

「あ、はい・・・」

そっか・・・

もう、ここには来なくていいのか・・・

「あ、でもさ、親不知、抜く気になったらいつでも来てねっ」

「う・・・」

先生は、明らかに私をからかう様に笑っている。

「ハハッ、おもしろいね、きいちゃん」

そんなに きいちゃん きちやんて連呼されると・・・

松山先生にスタイを外してもらっていると、ブースの壁をノックする音がした。

コンコン

「失礼します。松山先生？」

振り向きはしなかったが、さっきの上原先生だと声でわかった。

「はい・・・」

松山先生がそれに応える。

小声で、私には何を話しているのかよく聞こえない。

「あーわかりました。じゃあ、こっち頼みます。」

そんな、松山先生の声がしたかと思ったら、先生が、シートに座る私の顔を覗き込んだ。

「じゃあね、きいちゃん。お大事に」

ドキッ・・・

マスク越しに笑って、ブースを出て行った。

！・・・

もう、ドキドキの連続
声も出ない

「きいちゃん？」

そこにいた上原先生が、不思議そうに私に言った。

「あ・・・なんだか、お知り合いに、同じ名字の方がいるそうで・・・

」

「ああ、だから下の名前で呼んだのね。フフ」

鼻で笑ってる。

なんだか・・・

バカにされてるかんじ

帰ろう。

鞆を持って、ブースを出ようとすると、上原先生が私の進行を遮った。

私より、背が高い、

上からの目線。

「ごめんなさいね。松山先生って、誰にでもああの。だから、気にしないで」

「・・・」

なんだろう

「待合室でお待ちください。お大事に。」
うつすら笑って

やっぱり、バカにされてる気がする。

この人見てると、気分が冷めてく。

診療室を出て、待合室のソファーに座った。

プラズマテレビの画面を見ながら、会計を待った。

もう、どこも悪くないし、ここに来る理由もない。

松山先生とも、もう会えないんだ

たったの2回会っただけだし

ドキドキしたり

カッコいいなと思ったらもしたけど

やっぱりこんなの

ちょっとした気の迷いなのかな

『きいちゃん』なんて呼ばれて

ちよつとだけ嬉しかった自分が

恥ずかしい

「水嶋さん」

受付に呼ばれて、会計を済ませる。

「お世話になりました。」

「お大事に。」

受付の女性に会釈して、クリニックを出た。

携帯を開いて、時間を見る。

18時か・・・。

18時10分の快速に乗れる。

会社や学校帰りの人でいっぱい駅周辺。

ゆつくりと、駅構内に向かって歩く。

あーあ・・・

なんだったのかな

この4日間。

緊張したり、ドキドキしたり

ちよつと、のぼせてただけなのかな

ああ・・・

なんか急に疲れが・・・

「きいちゃん！」

！・・・

「きいちゃん！」

！・・・は？私？

バタバタと走る足音が、後ろから近づいてくる。

「きいちゃんっ」

私の左肩を軽く掴んだのは

白衣のままの

松山先生・・・

ドキン

ドキン

「……………」

「ああ、よかった！間に合って」

「は……？あの」

「これ、忘れもの、きいちゃん」

先生は、診察券を差し出した。

「ああ！」

「受付のカウンターに置きっぱなしになっててさ、僕が見つけて持ってきた」

「そうだったんですかつ。すみません……」

「うん。じゃあ、気をつけて帰ってね」

そう言うのと、すぐにクリニックの方へ戻る先生

「あつ、ありがとうございました……」

松山先生が振り向いた

「うん！またね！きいちゃん」

左手を高く挙げて、先生は走って行った

長い足で、颯爽と走る

白衣の裾が、風を切る

それを見ながら

私はすっかり放心状態。

おかげで快速電車も逃しちゃうし。

違う

のぼせてただけじゃない

松山先生に

一目惚れしてた

ねえ、せんちゃん

せんちゃんの言うとおり

私

松山先生が

好きみたいだよ

数学の先生。

週が明けた月曜日の昼休み、職員室の奥にある会議室で、担任の『迫じい』と向かい合って座っていた。

私の成績表を手に、時折、上目づかいで私を見る。

「・・・じゃあ、歯科衛生士の専門学校を受けるんだな？」

「はい・・・」

おおさこ
大迫。通称『迫じい』は、間もなく65歳を迎える担任教師だ。

教える教科は数学で、身長は150cmにも満たない白髪頭。

授業はボソボソと何を説明しているのかもよくわからず、迫じいが担当したクラスの成績はあまりよくない。そのくせ、校則違反の生徒を見つけると、すぐさま職員室へ呼び出し、風紀の先生に引き渡したり、授業中に私語をしている生徒めがけてチョークを投げたりと、生徒からはかなり嫌われている。

進路決定が遅くなった私に、嫌みの一つも言いたげな顔だ。

「試験科目に数学があるが、お前は他の教科に比べて成績があまり良くないな。」

「はい・・・すみません。」

「大学入試のような難しい問題は出ないと思うが、今からしっかり復習せい。」

「はい」

「よし。行っている。」

一礼して、職員室を出ると、廊下でせんちゃんが待っていた。

「せんちゃん、教室戻ろっ」

「何か言ってた？迫じい」

「うん、受けていいって。でも、数学勉強しろって」

「あゝやっぱりね。自分が教えてる教科だから余計に言うんでしょ、

あのジジイ」

「んー。でも、ちょっと頑張らないとマズイしね。今日、駅の本屋さんで参考書買って帰ろうと思う。」

「うん。私も付き合うよ。」

「ありがと」

週末に両親と相談して、歯科衛生士の専門学校へ進むことに決めた。ようやく決心した私に、両親も安堵の表情を見せていた。

自分一人で勉強できるのか、少し心配だけど・・・

「それにしても、よくぞ決心したね！きい」

「うん・・・せんちゃんのおかげ」

あの日、松山先生が診察券を届けてくれた時の笑顔を見て、先生に近づきたいと思った。

少しでもいいから。

同じ職場で働くなんて、そんなに旨いこといくわけないけど、松山先生に一番近い仕事、歯科衛生士だから。

動機は不純だけど、頑張って目指そうと思う。
将来に向けての、一つの目標。

きっかけをくれたのは

松山先生・・・

「でも きい、もう歯医者さん行かなくていいんでしょ？」

「うん」

「松山先生と会えないの、寂しくない？」

「んー・・・」

「せっかく、きいがいいなって思い始めた人なのになさ」
「・・・」

そう。

会いたくても、理由がない。

どこも悪くないのに、クリニックへ行くわけにもいかないし。

先生は、夜遅くまで仕事してるみたいだし。

偶然どこかで・・・なんてこともないだろうし。

「歯医者の前で待ち伏せでもしちゃう？」

「そっそれはダメでしょ。ストーカーみたい」

「だって、そうでもしなきゃ会えないじゃない。忘れられちゃうよ
きいちゃん？」

「ちよつと。やめて」

「なによ、きいちゃんて呼ばれて嬉しかったくせに」

「・・・う、まあ・・・」

「ふふつ。それにあんた頑張らないと、なんか近くにイヤな女もいるじゃない。上原だっけ？」

「うん・・・」

「その女、先生のこと狙ってんじゃないの？あんたに釘刺すくらいだもん」

「ホントに怖かったんだよ。すごく綺麗な人なんだけど、なんかコ
ワかった。」

「あつ」

「え？」

せんちゃんが急に立ち止まる。

「私ら、松山先生がフリーだっていう前提で話進めてるけど、そう
とは限らないよねえ？カッコいい上に歯科医だし・・・」

「あ・・・」

そうだ。

先生にも、彼女くらいいるかもしれないんだ。

彼女ならまだしも、もう結婚とかしてたりして・・・

やっと、素敵な人を見つけたと思ったのに・・・

「きい？」

「……………」

「きい！！意識飛んでる！」

「え？ああ、ごめ……………」

「そういうの、うまく調べられないかなあ。なんなら、私が行って聞いてこようか？」

「いいよ！そんなの！」

「なんでよ？だって重要じゃない？」

「うっ、とにかく、今は入試に向けて、数学よ！数学っ」

「その上原が彼女だったりして」

「んもうつうるさいっ！」

「メガネずれてるわよ。動揺してる証拠じゃない」

「放つといてよっ」

- 放課後 -

せんちゃんと二人で、駅ビルにある書店に入った。

「参考書って言っても…………どれを買ったらいいのやら」

「きいは専門学校の入試だし、少し応用ができる程度でいいんじゃないの？」

沢山並ぶ参考書から何冊か取り、パラパラと見てみる。

ん…………高校で習った数学を全体的に復習できるやつがいいかなあ…………

あとは、応用の問題集を一冊…………

参考書と問題集を一冊ずつ取りレジに向かおうとすると、せんちゃんが腕を掴んだ。

「ちょっと待って。私、ファッション誌買いたいの。」

「ああ、うん。」

立ち読みする人々をぐり抜けて雑誌のある方へ歩く。

せんちゃんはいつもおしゃれで、ファッション誌が大好き。短大は服飾系に進んで、ファッションに関わる仕事がしたいと言っていた。せんちゃんにピッタリだと思う。

雑誌を選ぶせんちゃんの後ろで待っていると突然・・・

トンッ

背後を歩いてきた女性客と肩があたった。

バサバサッと、持っていた参考書と問題集が落ちる。

メガネもずれて、視界がボヤける。

「すみません・・・」

と謝ったのに、ぶつかった女性客は、私を無視してレジの方へ歩いて行ってしまった。

「・・・」

落ちた2冊を拾おうとすると、私より先に、誰かがそれに手を伸ばした。

「大丈夫ですか？」

メガネを戻し、拾ってくれた人の顔を見る。

「はい、ありがとうございます・・・」

見たことある。

「あ、」

ドキンッ

「あっ……」

まっ……松山先生？

目の前に、ブルーのワイシャツにネクタイをした松山先生が、私が買うはずの参考書を持って立っている。

「あれっ、きいちゃん」

「セツ先生……」

『え？先生？？』

雑誌を見ていたせんちゃんが振り向く。

「あ、あの、ありがとうございます」

とりあえず先生の手から、落とした2冊を受け取る。

「ああ、うん。さっきの人、非常識だったね。」

「いえ、あの、私がボーっとしてるから」

「いやあ、きいちゃんは謝ってたのに、無視して行ったじゃない」

「あ……まあ」

私と先生の会話を横でニヤニヤしながら聞いているせんちゃん。

「あ、学校の友達？」

松山先生がそれに気づいて尋ねる。

「はっはい」

『どおもお。私、泉 舞子ですう。きいの親友の』

「あ、はじめまして。僕、きいちゃんの歯科医の松山です。」

『知ってますう。いつもきいが話してるから』

「ちよっせんちゃん」

やばいつ

せんちゃんの目が輝いてるっ

余計なこと言う時の目だあゝっ

「せ、先生は今日は、お仕事じゃないんですか？」
上ずった声で精一杯会話をする。

「あ、今ちようど、僕の患者さんの予約が空いててね。ちょっと休憩。コレ買いに来たんだ」

先生はそう言うと、私とせんちゃんに“歯科医療ジャーナル”という雑誌を向けた。

「そうなんですか・・・」

「きいちゃんは数学の参考書？」

「あ、はい」

『そーなんです。入試科目で数学があるんですけど、この「苦手なえ」

「せんちゃんっ」

言わないでよ！
恥ずかしいっ

「見てあげようか？」

「『え？』」

せんちゃんと二人で、目が丸くなる。

「数学の勉強。良ければ僕が見てあげようか？」

いつもの笑顔で優しく微笑んでいる。

「え、あの」

『本当ですか!?!』

ええっ

「うん。僕、大学時代、数学と物理の家庭教師してたんだ。アルバイトで。高校生に教えてたよ」

「・・・」

『ええっやったじゃない、きい!あの、ぜひ教えてやってください!』

うそぉ・・・

「僕で良ければ」

「あ、でもご迷惑じゃ」

『迷惑なら自分から言ったりしないでしょ?ね?先生』

「せんちゃんっ!」

少し黙ってえゝ

「ハハハッ、うん。あ、でも、平日は仕事が遅いから無理なんだけど、土日でも構わない?」

先生は、私に尋ねている。

「・・・」

『きいつ』

せんちゃんが、左ひじで私を小突く。

「あ、はい、あの・・・はい」

つい、先生を見つめて、顔が熱くなってしまっ。

先生は鼻をスッと鳴らして笑った。

「うん。じゃあ、とりあえず、今度の土曜日、18時半ぐらいにク

リニックにおいでよ。」

「はい・・・」

「あ、なんなら、泉さんもいつしよに？」

『あ、いえ、私は土曜日は予定が』

せんちゃん、ニヤニヤしすぎっ

「そう。じゃ、きいちゃん、待ってるよ。」

「はい・・・」

「またね」

『あ、きをよろしくお願いします』

「あ、ハイ」

先生はそう言くと、レジの方へ歩いて行った。

『きい、やったねっ！』

一連の流れが信じられない。

偶然どこかで・・・って

あるんだ。

本当

びっくりだ。

土曜日。

18時半。

駅前ビルの4階。

私は静かなクリニックの扉の前に立っている。

土曜日の診療は15時までだから、中に患者さんがいる気配はない。待合室の照明は消されているようで、外からは受付のオレンジの照明だけが見える。

時間外のクリニックに入るのなんて初めてで、ドキドキする。

もちろん、ドキドキの理由はそれだけじゃないけど。

「せっかく松山先生が勉強見てくれるって言ってるんだから、きい、少しはおしゃれして行かなきゃダメよ」

昨日の帰り際、せんちゃんに言われて、私なりのおしゃれを試みた。最初は。

でも、ムリだった。

いつもせんちゃんにダサイと言われているだけに、私服を着たらそのセンスを疑われそうでコワイ。

結局、初めに着ていた服を脱いで、制服で来てしまった。

いつもの制服。

いつものメガネ。

いつもの鞆。

いつもの髪型。

いつも通りの私でここへ来た。

ただでさえ、松山先生に勉強を見てもらおうというだけで、集中できるかどうかも定かではないのに、慣れないおしゃれなんてしたらそれこそ気が散って、勉強どころではなくなるに決まっている。

それだけでなく、こんなにドキドキしているのに。

「すっ……はぁ……」

よしっ！

意を決して、クリニックの扉を開けた。
中に入ると、受付には誰もいない。
治療の行われていない診療室も静かで、ドアの向こうは時間が止まっているように見える。

「あの・・・こんにちは」

受付から奥を伺うように、遠慮がちに声を出してみた。
パタンという、ドアの音がして、奥から足音が近づいてくる。

「あつ、きいちゃん」

受付の向こうから、松山先生が顔を出した。
白いシャツに黒のパーカー、スリムなパンツにスニーカー。

180cmはあろうかという長身に、捲られた袖から見える逞しい腕。

いつもの白衣にネクタイとは全く違った姿。
色白な先生に、そのパーカーはよく似合っていた。

「こんにちは・・・」

「時間ピッタリだね」

挨拶をすると、松山先生の後ろからもう一人、男性が顔を出した。

『あ、松山先生このコですか？』
「うん」

松山先生より確実に若い。

松山先生の髪が黒いせいか、オレンジの照明のせいか、その人の髪はやたら茶色く見えた。

『こんにちは』

「あ、こんにちは」

とりあえず挨拶してみる。

『俺、技工の仲村っていいいます。』

「みつ水嶋です・・・」

『じゃあ俺、向こうで作業してますんで』

「ああ、悪いな。」

仲村さんは私に向ってペコツと頭を下げると、奥へ去って行った。

「きいちゃん、中に入っておいでよ。そっちのドアから」

「あ、はいっ」

松山先生に言われ、診療室のドアから中に入る。

「こつち」

先生が手招きする方へ歩く。

奥には、ここで働く人たちのロッカールームや休憩室、技工室と書かれたドアもあった。

「どうぞ」

先生が開けたドアの部屋は、少し広めのミーティングルームになっていた。

長机にパイプ椅子、正面にはホワイトボード。

その横には、人の顎の形をしたものや、大きな歯の模型が置かれている。

「失礼します・・・」

どこへ入っても、歯科特有のにおいがある。

「どうぞ、座ってよ」

「ハイ」

ドアから一番近いパイプ椅子を引いた。

鞆を置いて、参考書を出す。

「今日は、何時くらいまで大丈夫なの？」

先生が正面に立ち、机に手をついたまま聞く。

「あ、特に、門限とかは・・・ないですけど」

「そっか。じゃ、終わったら、一緒にご飯食べない？さっきの仲村
ってやつも一緒に。」

ええーっ

「あ、あのでも」

「あ、ああ、ゴメン。唐突すぎたかな。ハハッ、いや純粹に、今から勉強したら、帰る頃はお腹すくかなと思ってさ。きいちゃんが気が向いたらでいいよ」

「はい・・・ありがとうございます。」

「仲村には、僕が言って残ってもらったんだ。きいちゃんはまだ高校生だし、ここに僕と二人でいるのは、やっぱりいろんな意味で、世間的にまずいかなと。誤解を招くようなことがあったら、きいちゃんが大変な思いをするからね。」

「・・・・」

そこまで、考えてもらってたんだ。

優しすぎるくらい、優しい先生。

私は何も考えず、ここへ来てしまった。

松山先生に会えるとか

勉強してもらえとか

浮足立って

なんだかちょっと

恥ずかしい。

「きいちゃん？」

「あ、すみません」

「じゃ、はじめよっか」

「はい。よろしく願いします。」

集中しなきゃ。

歯科衛生士になるんだから。

松山先生と向かい合って座り、参考書と問題集を開く。

「どういうふうに進めていきたいとか、何か希望ある？」

先生が、参考書をパラパラとめくりながら聞く。

「えっと、一応、問題集を解いて来たので、わからなかったところを教えてもらうようなかんじがいいです・・・」

「うん。わかった。まあ、数学はなるべく問題を沢山解いて、慣れるのが一番いいからね。」

「はい。」

「じゃ、まず、何からいこうか？」

「あ、それじゃあ、昨日わからなかった複素数の問題から・・・」

「うん。どれどれ・・・」

先生に、解けなかった問題のページを見せる。

「 e が複素数の場合、次を解け。 $e + 6E = \dots$ 」

先生が問題を見て、開いたノートにサラサラと解いていく。

すごい・・・

さすが元家庭教師

さすがお医者さん・・・

私の周りにはいない理数系だあ・・・

「うんっ」

先生が問題を解き終えて、私の方にノートを向ける。

「えっと、まずは、複素数に関してなんだけどね、二つの複素数 $a + b \cdot c + d \cdot i$ 、あ、 $a \cdot b \cdot c \cdot d$ は実数ね。これが等しいっていうのは、 $a \parallel c$ かつ、 $b \parallel d$ ってこと・・・」

先生の持つペンシルが、ノートの上で動く。

それを目で追いながら、必死に説明を理解しようとする。

「・・・だから、7 をあえて複素数で表せば、 $7 \parallel 7 + 0 \cdot i$ 、・・・
・ $a \parallel 1$ 、 $b \parallel 0$ 、だから、求める複素数は、 $e \parallel 1 + 0 \cdot i \parallel 1$ 。
複素数として解く問題だけど、実は解は実数。」

実数と言って、アヒル口でニツと笑う先生。

「あー・・・そっか。」

すごくわかりやすい説明に驚いた。

「わかった？」

「はい、すごく」

「うんづ。よし、じゃあ、似たような問題があるから、こっち、解いてみよっか・・・」

「はい」

先生に言われた問題を解いていく。

なんだか変な感じ。

最初は歯医者先生として会ったのに

今は数学の先生。

歯の治療は終わったはずなのにクリニックにいるし

松山先生に見てもらえるし・・・

「ところで きいちゃんさ」

「はい」

「あ、ゴメンね、問題解かしてる途中に」

「いえ・・・」

「どこの学校を受験するの？大学？」

「いえ、専門学校です。」

「へーそうなんだ。どこの？」

「あ・・・」

言ったら、変に思われたりしないかな

「ん？」

「あの」

「あ、言いたくなかった??ごめ・・・」

「い、いいえ、違うんです、そうじゃなくて」

「?」

「歯科・・・衛生士の専門学校なんです」

「ええっ?」

驚きに笑顔が混ざった表情

「そーなんだ!??」

「はい」

「へええ、そうかあ。なんか嬉しいなあ。同じ職種を目指してくれてるなんてさ」

本当に、嬉しそうな顔をしている

「だったらさ、僕が数学教えることになったのって、おもしろい偶然だよね!」

「あ、あーはは、ははっ、そう・・・ですね、ハハ」

「ハハハ・・・」

偶然・・・と言って、いいのだろうか。

確かに

松山先生が担当の歯医者さんだったのは偶然。

書店で松山先生に会ったのも偶然。

数学を教えてもらうことになったのは・・・偶然って言うより、せんちゃんが半ば強引に決めたところあるし、成り行きっていうか。

でも

歯科衛生士を目指そうと思ったのは

松山先生に会えたからで。

やっぱり

先生と出会ったのは偶然なんだから

ここにこうしていることも

先生が言う通り

おもしろい偶然なのかな。

「あの、この問題もお願いします。」
「ん？どれどれ・・・あ、図形の方程式ね。円 $x^2 + y^2 = 25$.
・・・」

松山先生に、いろんな問題の解き方を教えてもらった。

二人とも変に熱中して、気がつけば時計は20時半を回っていた。
コンコンとノック音がして、仲村さんが顔を出した。

『失礼します。こっちどうですかあ？』

「ああ、もうそろそろやめるとこ」

『俺も、キリがいいんでやめました。』

「片付けるから、戸締まりの確認頼む。」

『了解です』

机に広げた参考書を鞆に入れる私に、松山先生が言った。

「きいちゃんどうする？来週も来る？」

「え・・・」

「ん？」

「でも、悪いです。」

「？、なんで？僕は全然構わないよ。入試はいつ？」

「2月です」

「2月か。じゃあ、それまで、お互い都合がつく時にやっつけていこうか」

うそ

これから先生に会えるの？

「いついいんですか・・・？」

「うん。いいよ」

立っている私に、座ったままの先生がほほ笑む。

「・・・よろしくお願いします」

「うん。僕でなければこちらこそ。」

どうしよう

嬉しすぎる

足がふわふわ

浮いてるようなかんじ

外はすっかり暗くなって、駅周辺の飲食店のネオンが光る。
松山先生と仲村さんの後ろについて行くように、駅に向かって歩く。

『じゃあ、2月まで勉強するんですか?』

「うん。その時は、残ってくれる?」

『いいっすよ。俺はいつでも』

「助かる。ねっ、きいちゃん」

松山先生が、私を振り返る。

「あ、はい。ありがとうございますっ」

『いえいえ』

仲村さんも振り返り、首をクイと動かす。

駅の改札の前で、二人に挨拶をする。

「それじゃあ、今日はどうもありがとうございました。」

「ホントにご飯一緒に行かないの?」

「はい。今日は帰ります。また誘ってください。」

『松山先生、残念そうっすね』

仲村さんがニヤニヤしながら先生に言った。

「そりゃあ残念だろ。お前と二人で食べるより、きいちゃんがいた方が楽しいに決まってる」

ドキッ・・

そんなこと・・・言ってもらえるんだ

『今日のところは、俺で我慢してくださいよお』

先生の肩に、仲村さんが腕を掛ける

「じゃあ、やっぱお前の奢りね」

『ええっ?話が違うじゃないっすか?』

「お前と一緒に食べてやるんだから当然だ。じゃあねっ、きいちゃん」

『ちよ、待ってくださいよお』

不満を言う仲村さんを無視して、先生は私に手のひらを向けた。

軽くお辞儀をして、改札をくぐった。

2月の入試まで、都合がつく時に・・・

電車に揺られ、松山先生の言葉が、頭の中でリピートされる。

帰ったら、せんちゃんに電話しよう。

せんちゃん

私

また一歩

前進したよ

先生と約束。

「うそ・・・上がった」

中間テストの数学の答案を手に、思わずそう口走っていた。
ガヤガヤと騒々しい答案返しの教室。

時折、迫じいが「静かにせい!!」と怒鳴っているが、一度騒ぎ始めた女子校の教室は、なかなか静まることはない。

授業中にも関わらず、せんちゃんが私の席へやって来た。

「きい、どうだった？」

「あつ上がった!」

「えっ？」

「上がったよ!せんちゃん!ほらっ!」

せんちゃんに答案を見せる。

「わっ!うそ?88点!?これホントにあんたの答案?」

「うんっ・・・」

「うっそ、信じられない。あんなに数学苦手だったきいが、私より高い点数取るなんて」

「私も・・・信じられない」

松山先生のおかげだあーっ・・・

あれから三度。

松山先生に数学の勉強を見てもらった。

土曜日の夕方。

診療が終わった後のクリニックで。

技工室にはいつも、仲村さんがいてくれる。

松山先生はいつも優しい。

間違っても絶対に怒らないし、わかるまで何度も説明してくれる。

早く・・・松山先生に報告したいなっ・・・

- 休み時間 -

「きい」

「え？」

「なあゝにニヤニヤしてんのお？？」

言ってるせんちゃんもニヤニヤしてる。

「あ、別に。なんでもない。」

ズリ落ちたメガネを押し上げる。

「ふふっすごいじゃない。松山センセと勉強した成果でしょ？」

「うん・・・」

「いいなあゝ。きっと先生も喜んでくれるんじゃない？」

「んー、成績上げることが、一番のお礼になると思ったから」

「うんうん。偉い！」

バシッ つとせんちゃんが肩を叩く。

「うっうん・・・」

痛いよ。

「あ、私ね、実はっ、きいにプレゼントがあるの」

「プレゼント？誕生日まだだよ？」

せんちゃんが自分の席から鞆を持ってくる。

「ふふんっ」

「なーに？」

「こーれっ」

せんちゃんは、鞆からチケットらしきものを2枚取り出した。

「なに？」

「映画の前売り券。あんたにあげる。」

「え？どうして？せんちゃんは？」

「大丈夫。私ももう2枚持つてるから。」

見る限り、邦画のチケットのようだ。

「どうしたの？これ」

「彼氏がね、バイト先の人から貰ったみたいで、4枚あったから、2枚はあんたに。」

「えーっありがとう！」

「うん。センスと行けば？」

「ー・・・は？」

は？

「だから、松山先生誘ってみれば？」

「ー・・・え？」

にこにこしながら、せんちゃんが何を言ってるのかわからない。

「だーかーらあ！松山先生をデートに誘うのよ！」

ピシッ　つと、今度は額を弾いた。

「痛いー・・・そんなことできるわけ・・・」

「なんで？」

「だって私、男の人とデートなんてしたことないし」

「だからいいんじゃない。初々しくて。どーせいつかは誰かとデートするんだから」

「いや、ちよっ、ムリ。デートなんて、絶対無理！」

「無理って、自分で決めつけてるだけじゃない」

「うっ・・・」

そりゃあ、せんちゃんの言う通りだけど

「だ、だって、何て言って誘うの？誘い方もわからないのに」

「あゝ、そうねえ、・・・あ、じゃあさ、松山センセに教わったおかげで成績が上がったから、そのお礼に、とか言ってみたら？」

「お礼にデートって言っの!？」

「だったらデートだって思わなきゃいいじゃない。ただお礼するんだって思えば。」

「・・・お礼かあ・・・」

確かに、お礼はしたい。

「ちなみにこの映画、恋愛モノだからね。もう公開されてるから、早くね。」

「ええっ」

チケットをよく見てみると、大学生の青年が、年の離れたOLの女性と恋に落ちるピュアラブストーリー・・・と書かれている。

いつ・・・いかにもって感じがっ

「明日、センセのそこ行くんでしょ？」

「うん」

「じゃ、明日誘ってみなさい。」

「は、はい・・・」

あー 完全にせんちゃんのを口車に乗せられてるなあ

最近こっいつの多いなあ

せんちゃん強引だしコワイし

でもやっぱり、何かお礼したいのは本当の気持ちだし

お金とか使わず、友達に貰ったものなんだからちょうどいいかもしれない

だけど

何て言って誘ったらいいんだろーっ・・・

10月下旬。

季節は秋へと移り、駅周辺の銀杏が黄色く色付き始めている。
土曜日。

いつもの18時半。

クリニックのあるビルへ制服で向かう。

扉の前で深呼吸。

中を覗くと、受付に松山先生がいるのが見えた。

扉を開けて中に入る。

「こんにちは・・・」

松山先生が、カルテをトントンと揃えながら私を見る。

「おつ、きいちゃん。いらっしやい」

「こんにちは」

いつも、先生は笑顔だ。

「いらつしゃいつてのも変か。店じゃあるまいしね」

「あは」

今日はまだ、白衣にネクタイ姿だ。

「ごめんね。カルテの整理が終わらなくてさ、ミーティングルームでちよつと待っててくれる？」

「あ、はい」

先生に言われるまま、ミーティングルームへ入って、いつもの椅子に座る。

「ハア・・・」

ドキドキするなあ・・・

勉強してる時は、説明を理解するのに必死で、ドキドキなんて忘れてるけど、それ以外はやっぱり緊張する。

鞆から、せんちゃんから貰ったチケットと、数学の答案を取り出す。

先生・・・一緒に行ってくれるかなあ

コンコン

ミーティングルームのドアを誰かがノックした。

「あ、はいっ」

慌ててチケットを鞆に戻す。

ドアが開いて、入って来たのは仲村さんだった。

「ウィッス」

茶色い髪は、初めて会った時より少しだけ伸びている。

「こんにちは」

「松山先生が、コレ持って行けって」

そう言うと、私に缶ジュースを手渡した。

「ミルクティーだけよかった？」

「あ、ハイ。ありがとうございます。」

仲村さんは、他に持っていた缶コーヒー2本を長机に置いて、私の座る椅子の2つ隣に座った。

カコンと缶コーヒーを開ける音が響く。

ズルズルと一口飲むと、仲村さんの方から口を開いた。

「よく続いてんね。勉強」

「え、あ、はい。いつもすみません・・・」

「あ、いや、そういう意味で言ったんじゃないよ。よく頑張ってるなあと思って」

「あ、はい、入試が懸かっているんで」

「松山先生から聞いたけど、歯科衛生士目指してるんだって？」

「はい」

「そつかあ。合格するといいね、学校。」

「はい」

仲村さんは、また缶コーヒーをズルズル飲む。

部屋中にその薫りが漂う。

私も、貰ったミルクティーの缶を開けた。

カコンと音が響く。

一口飲むと、温かいミルクティーが喉を潤す。

「あのさ」

その一言に仲村さんの方を見る。

仲村さんは、目線を缶コーヒーに向けたまま話す。

「水嶋さんて・・・さ」

「・・・はい？」

「あのー・・・なんとなくさ」

「・・・はい」

「松山先生が好きー・・・なんだよね？」

「ー！！！」

えっっ

なにをいきなり!?

仲村さんがこっちを見る。

まずい。

私

絶対

顔赤くなってるっ

「あの、えーと・・・」
「だろ？」

仲村さんの目は、確信を持っている。

「・・・」
「・・・」

だめだあ

嘘はつけない・・・

「あのう・・・そう見えますか？」

「ハハッ、うん。俺にはそう見えたから、ちょっと聞いてみただけ。当たり前だろ？」

「・・・・・・」

コクコクと微妙に頷いてみた。

「そうかあ。いいなー松山先生。モテンなああの人。」

「・・・・・・モテるん・・・ですか？」

やっぱり

「んー、院内でも人気あるしね。」

「そう・・・ですか」

やっぱりかあ・・・

そりゃあそうだろうな

カッコいいし・・・

優しいし・・・

改めて言われちゃうとなんか・・・

ショックだ

俯き気味にミルクティーをすすする。
ズルズルズルズル・・・

「水嶋さんて、18歳？」

「あ、まだ17です。」

「・・・てことは・・・」

仲村さんは右手の指を折っていく。

「松山先生とは、約ひとまわり差か」

「ひとまわり・・・」

「うん。あの人もう29だからね。」

「・・・」

ひとまわりも年の離れた子供なんて、やっぱり相手にしてもらえないかな・・・

「ハアッ」

「あははっ」

「え？」

「すげーため息。」

「あ、すみません」

つい

「あのさ、1コ教えてやるつか？」

「え？」

「あの人彼女いないよ」

仲村さんは、白い歯をむき出してニッと笑った。

「・・・」

「ちよつとは元気出ただろ？」

「あ・・・」

「ガンバレッ！高校生」

そう言っつて、左手で拳をつくつて見せた。

「は、はあ・・・」

ガチャツとドアが開く。

私服に着替えた松山先生が入って来た。

ドキン・・・

「あ、きいちゃん、ごめんね待たせて」

「いいえ・・・」

一瞬、仲村さんと目が合う。

仲村さんは口だけ笑った形にして、席を立った。

『じゃ、俺は仕事に戻りまーす』

「ああ、ありがとうな。」

『はい』

仲村さんはミーティングルームを出て行った。

「仲村に変なコト言われなかった？」

「変なコト??」

図星は突かれましたケド

「うん。あいつ、若い女の子好きだからね。きいちゃんも気をつけて。」

「あ・・・ああ、あは・・・」

松山先生はニコニコしながら、私の向かいに座る。

白いパーカーにジーンズ、首元には青いダンガリーシャツの襟が少し見えている。

先生・・・

彼女・・・いないんだあ・・・

ぼんやり先生を見てしまう。

確かに、仲村さんの言葉で少し元気が出た。

「じゃ、今日は何からやる？」

先生は、仲村さんが置いておいた缶コーヒーを開ける。
カコン

「あ、えつと、その前にこれ・・・」

松山先生に、折りたたんだままの中間テストの答案を渡す。
「ん？」

「この前の中間テストです。」

「ああ！どうだった？」

そう言つて、答案を開く。

「おっ！８８点！なかなかいいじゃない！上がった？」

「はいっ、上がりましたっ」

「そっかあ！ヨカッタヨカッタ」

先生は嬉しそうに答案を見ている。

「この調子で頑張れば、入試も大丈夫だね。」

「はい・・・あの」

ドキン ドキン

「ん？」

勇気を出して

松山先生を、映画に

「あのっ」

「うん？」

先生が、じっと私を見る。

どうしょ

声が上ずってる

ドキン　ドキン

顔が、熱くなってきたっ・・・

「こっ、これっ」

鞆からチケットを取り出し、先生に差し出す。

両手で

先生の反応がコワくて

顔は見れない

「なに？映画のチケット？」

先生がチケットを手に取ったのを合図に、そっと先生を見上げた。

「これ、僕に？」

先生は、優しい表情で聞く。

「この前、私と一緒にいた友達・・・覚えてますか？」

「うん、泉さん・・・だったよね？」

「はい、そのコから・・・2枚貰ったもので・・・その」

ドキン　ドキン

勇気を出して

「何か先生に、お礼が・・・したくて」

「そんな、お礼なんていいのに」

ドキン ドキン

「・・・でも」

どうしよう

断られる・・・？

ドキン ドキン

「じゃあ、一緒に行こうか？」

ドキン・・・

先生は、私を見て微笑んでいる。

「へ？」

「え？だっ・・・て、2枚あるし、きいちゃんと僕とって・・・ここだよね？」

しっ・・・思考回路がうまく回らない・・・

「いつ・・・いいんですかつ？」

「ハハッ、うん。もちろん。僕なんかで良ければ」

「！・・・はい・・・」

メガネが・・・ズリ落ちてくる・・・

「うん」

先生は笑顔で、確認の「うん」を言った。

「あ、そうだった」

先生は、ジーンズのポケットから、セルリアンブルーの携帯電話を取り出した。

「僕の番号とアドレス教えとくね。いつも教えようと思って忘れててさ、きいちゃんが帰ったあとに思い出したりしてたんだよね。」

先生の・・・携帯番号・・・

「あ・・・あ、はい、じゃあ、私も・・・」

制服のポケットから携帯を出す。

「じゃ、言っね。090・・・」

「あ、」

「ん？」

あ、先生の下の名前・・・

「あのう、下の名前・・・」

「ああ、僕の？シンイチ。真に一つて書いて、真一です。」

真一・・・先生

先生の番号とアドレスが、自分の携帯に登録される。

すごい・・・

信じられないっ・・・

「勉強でわからないところとかあったら、いつでも掛けてきていいよ。僕が仕事のなら、メール入れといてくれたら、後で掛け直すし。」

「・・・はいっ、ありがとうございます。」

「ああ、もちろん、それ以外で掛けてきても全然いいけど。」

「はい・・・」

「うん。」

松山先生の「うん」には、本当に優しさが込もってる。

「で、いつにする？コレ」

先生は、映画のチケットを私に向ける。

「あ・・・私は、いつでも」

「じゃあ、明日は？日曜だし。僕も仕事休みだし」

そんなに急に！？

「・・・はい」

「うん。じゃ、決まりだね。」

こんなっ

トントン拍子につ……

「きいちゃん、家どこ？近くまで迎えに行くよ」

うつうそお……

「住吉町です……」

ドキン ドキン

「あ、そうなんだ。僕は東区だから、んー……だったら、車で30分ぐらいかな。」

「いいんですか？」

「いいよ」

「えっと、あのじゃあ、13時ぐらいに……」

「13時ね。了解っ」

ほ、本当に……？

「よ、よろしく願いしますっ」

顔が、熱くてたまらない

「こちらこそ。なんか、デートの約束みたいだね。」

松山先生は

笑顔で私にそう言った

「……………」

もう

ドキドキしすぎて声が出ない

「なんてねっ。じゃ、始めよっか」

「はっはい……………」

「テストで間違った問題から見直していいことと思っただけど……………」

初めて

男性を誘った。

初めての

デートの相手は

目の前にいる

松山先生

せんちゃん

やったよ

松山先生と

デートだよ

今夜はもう

絶対眠れない

先生との時間。

ピンポン♪

午前11時。

軽快に家のインターホンが鳴る。

自分の部屋を出て階段を勢いよく駆け下り、誰かも確認せずに玄関の扉を開ける。

誰なのかはわかっている。

ガチャッ

「おはよっ」

「せんちゃあんっ!」

思わず半泣きでせんちゃんに抱きつく。

「あー、ハイハイ、わかったわかった」

私の背中をポンポンと叩く。

「ごめんね、わざわざ来てもらって」

「いいよっ。昨日の夜電話もらった時は、あまりの急展開にちよつとびっくりしたけど、きい よくやった!」

「もう、ずつと緊張してて眠れなくて・・・」

「松山先生との約束は13時だね?」

「うん、13時に、この先の角のコンビニに迎えに来てくれるって・

・・」

「そう、わかった。おじやましーす」

モスグリーンのジャケットにボウタイブラウス、濃いめのジーンズにブーツ。

今日もおしゃれがキマッてるせんちゃんは、小型のキャリーバッグを引いて玄関に入った。

「きいのお父さんとお母さんは?」

ブーツのジッパーを下ろしながら聞く。

「今日は、二人とももう出掛けてていないの。夜まで帰らないみたい。」

「あらあ、ってことは、きいも松山センスとゆっくりデートできるってことよねっ」

ニヤリと笑うせんちゃん。

「ゆっくりって？約束してるのは映画だけだよ？」

キャリーバッグを持ちながら階段を上る。

「バカねえ。松山先生は大人なんだし、映画だけでバイバイなんて絶対有り得ないわよ」

「え、私、映画以外何も考えてなかった」

「あんたが考えなくても大丈夫よ。先生に任せとけば。食事ぐらい連れてつてくれるでしょ」

「えっ……」

食事……

松山先生と食事……

かつ考えただけでもう……

「きい」

「……ん？」

「あんまり余計なこと考えすぎても緊張するだけだから、リラックスしてしまなきゃ。せつかくのデートなんだし。」

「う……、うん」

「よし。じゃ、服、きいに似合いそうなのいくつか持って来たから、選んで」

「ハイッ」

部屋に入り、ベッドの上に置いたキャリーバッグを開ける。

中にはブラウスやスカート、カーディガンが2〜3着ずつ入れられていた。

「ね、私、自分に何が似合うのかわかんない。やっぱりせんちゃんが選んで？」

「ええーっんー・・・そうねえ。なるべくきいのイメージに合わせ持って来たつもりだけど・・・」

せんちゃんは、控え目なフリルの付いた白いブラウスと黒のスカート、淡いピンクのカーディガンを手に取った。

「じゃあコレ。着てみて」

「うん。」

着ていたスウェットを脱いで、おもむろにせんちゃんの前で着替える。

「んで？何て言って松山センセ誘ったの？」

「何てって・・・せんちゃんにチケット貰ったから、お礼につて渡したら・・・」

「二人で行こうって??」

「うん・・・」

「きゃーんっ羨ましいい〜」

そう言いながら、せんちゃんはベッドに倒れこむ。

「まさかいきなり、明日行こうって言われるなんて思ってなくて、ホント、ビックリしちゃって・・・」

「松山先生もさあ、実は案外、きいのこと好きだったりして」

「そ、そんなわけないよ・・・」

松山先生が、私のことを好きだなんて

そんなまさか

「そうかなあ・・・。だって、数学の勉強見てくれるって、最初に言い出したのも先生の方からじゃない？」

「そうだけど、それは多分、ただの親切心で・・・」

「親切心で。仕事の合い間に高校生の勉強見てやる歯科医なんて、他にいるかな。」

「せんちゃんが強引に言うからでしょ」

「でもそのおかげでデートまで漕ぎつけたんじゃない。感謝してよねっ」

せんちゃんはガバツと起き上がる。

「感謝・・・してます。きつ着替えました。」

「・・・うん、結構いいじゃない。似合ってる。さすが私ね。」

せんちゃんには、本当に脱帽だ。

せんちゃんはキャリーバッグをゴソゴソとあさり、中から茶色の細いベルトと、さらに細い黒のリボンを取り出した。

「そしてこれで、アクセントを付ける・・・」

私の胸元にリボンを結び、ウエストにカーディガンの上からベルトを着けてくれた。

「うんっ、いいわね。すごくいいかんじ。」

上から下まで、流すように見て微笑んだ。

「ホントに？」

「うん。似合ってる。見てみて」

せんちゃんに背中を押され、鏡の前に立つ。

「・・・」

「どお？あんだ、メガネが黒だから、リボンとスカートを合わせてるのよ。」

わあ・・・

これが私・・・

おしゃれをしている自分を見て、特別な気持ちが込み上げてくる。

ドキドキとも違う、

ワクワクに似たような、

弾むような気分・・・

「・・・うん」

「きい、すごくかわいい。」

鏡越しにせんちゃんが言う。

「ありがとう・・・」

「よし。あとは髪型ね。そこ座って！」

「ハイッ」

部屋の中央に置いているミニテーブルに卓上ミラーをセットして、せんちゃんが髪を梳かす。

「シンプルに・・・少し高い位置で、一つに結んでおこうかな」

「ごめんね、せんちゃん。何から何まで・・・」

「いいのよ。最初が肝心。きい一人じゃ、何着て行くのか心配だったしね。今日はすごくかわいいよ。お嬢様みたい」

「えっ・・・へへ。そうかな」

仕度を済ませ、一階のダイニングでせんちゃんとコーヒーを飲む。

「ハア・・・ドキドキする。あと30分で13時・・・」

「ドキドキするのもわかるけど、1番は楽しむことよ。」

「うん」

「あーでも、いーなあ。私、最近そうつ、ドキドキする恋愛ってしてないし」

せんちゃんがポツリと言った。

「え・・・大貴くんとはドキドキしないの？」

「大貴のことは好きだけど、きいみたいな恋愛して付き合い始めたわけじゃないもん。」

せんちゃんの彼氏の大貴くんは、せんちゃんのお兄ちゃんの友達で、私たちとは同じ年。お兄ちゃんの紹介だったらしいけど、大貴くんの方は以前からせんちゃんを知っていて、長い間せんちゃんに片思いしてたらしい。

「大貴の方から付き合ってほしいって言われて、別に断る理由もなかったし。」

「そーなんだ・・・」

彼氏を作るように言っておきながら、自分の彼氏にどこか満足していないせんちゃんを見ると、なんだか少し寂しい。

「それにね、自分から好きになった人と付き合うより、好きになってくれた人と付き合う方が楽なのよね。わがまま聞いてくれるし」

「ふうん・・・」

「だからきいも、松山先生により多く好きになってもらわないとね
っ」

「ハッ・・・ハハ」

結局その話に戻るんだな・・・

「まあ、私の見たところ、松山先生はきいのこと、満更でもないと思うけど。」

「そ、そっかな・・・」

「んんー。だとしたら、先生はかなりのロリコンだけどね」

「あつ、もー、年のことは言わないでよっ。私だって気にしてるのに・・・しかも、ロリコンって言い方・・・」

「なに？」

「なんかちょっとヤダ。先生は誠実な人なんだから。」

「ハイハイ、ごちそうさま。じゃ、私、そろそろ行くね。」

「うん、あ、キャリーバッグはどうする？」

「いい、置いてく。今から大貴と遊びに行くし。」

「そーなんだ！」

「そーよー、ドキドキしないデートですけどねー」

ここまで言われちゃう大貴くんて・・・なんだか不憫だなー

「あ、じゃあ、今度キャリー持ってせんちゃんちに行くね。」

「うん。いつでもいいわよ。」

せんちゃんが玄関でブーツを履く。

「いい？ バッグはブラウンのやつ、ブーツは黒よ？」

「うん、わかった。ありがと、せんちゃん」

「楽しんでおいで」

「うんっ」

せんちゃんを見送ってから部屋に戻ると、携帯電話がピカピカしている。

着信メールの合図だ。

開いてみると、松山先生からだった。

『きいちゃん、こんにちは。道が混んでるから、予定より5分くらい遅れるかも。待っててね。』

先生からの初メール・・・

ドキドキする

でも、嬉しさも込み上げてくる

『わかりました。待っています』

先生にメールを返して家を出る。

外はスツキリとした秋晴れ。

200メートル程先にある、待ち合わせのコンビニに向かって歩く。

初めてのデートに緊張と戸惑い。

でも、心が躍るのがわかる。

松山先生と出会ってから、胸はドキドキ鳴りっぱなし。

人を好きになると、誰でもこういうの、経験するのかな。

いつもその人のことを考えて

早く会いたくなって

好きだから

振り向いてほしいと思うようになる。

松山先生に近づきたい

松山先生のそばにいたい

松山先生に好きになってほしい

人を好きになると

どんどん欲張りになっていく。

コンビニに近づくと、駐車場に3台の車が停まっているのが見えた。
一番遠くにある黒い四駆の輸入車から、人が降りてこっちへ来る。

背が高い

耳に少しかかるくらいの短い黒髪

薄いグレーのカッターシャツにブルーのネクタイ

それに合わせた濃いグレーのベストに黒いパンツ

ジャケットを羽織らない秋らしいスタイルで、ゆつくりとこちらへ歩いてくる。

左の手のひらを私に向ける。

「きいちゃんっ」

優しい笑顔で私を呼ぶ。

「あ、こんにちは。すみません、私の方が遅かったですネ」
「いや、いいんだ。全然大丈夫」

松山先生・・・

素敵だなあ・・・

「きいちゃん・・・」

「はい？」

「なんか、今日は雰囲気違うね。」

「え？」

どうしよう、何かヘンかな

「制服に三つ編みのきいちゃんしか見たことなかったから、一瞬わからなかったよ」

「そ、そうですか・・・」

メガネが落ちるのを押し上げる。

「うん・・・すごく、かわいい」

ドキン・・・

先生を見上げる。

顔が熱くなっていく。

先生は、微笑んでいる。

「あ・・・」

「あ、ああ、じゃ、行こっか」

「・・・ハイ」

「車、乗って」

「ハイ」

何も考えずに、車の左側へ歩く。

「あ・・きいちゃん、あのね」

先生が背後から言う。

「え？」

「助手席はあっち」

先生はニコニコしている。

「えっ？あっ・・」

輸入車つつ

左ハンドルだったあ・・・

「す、すみません」

また、メガネがズリ落ちる。

「ううん」

先生は車の右側に回り、助手席のドアを開ける。

「どうぞっ」

「あ、ありがとうございます・・・」

「足もと、気をつけて」

「ハイ」

車高のある四駆車で、助手席の位置も少し高い。

シートに座ると、先生がゆっくりとドアを閉める。

先生は車の背後から運転席へ回る。

スツキリとした車内。

ゆるやかな音で洋楽が流れている。

初めて乗る、男性の車の助手席。

心臓は常に、トクトクと一定の緊張感を保っている。

ドアが開き、先生が運転席に乗り込む。

「よしっ！じゃあ出発するよ」

エンジンを掛け、シートベルトをする先生。

それにつられて、自分もシートベルトを締める。

先生はシャツの両腕の袖を軽く捲ると、ギアをRに入れる。

左手をハンドルに残し、右腕が私の頭の上をふわりと通過したかと思うと、助手席シートの上に添えた。

シートの間から後ろを見ながら、車を後退させる。

その輪郭は、高い鼻とネクタイの上の喉仏が強調され、耳の下からスツと延びた首筋が浮き上がり、ふとした男性らしさを感じる。

なんでもないことのように、胸は一瞬ドキンと波打つ。

車が走り出す。

車高があるせいか、いつも乗っている自分の家の車よりは、流れる景色が幾分違って見える。

「もらったチケットに書いてあった映画館までは、20分ぐらいだからね」

正面を向いたまま先生が話す。

「あ、ハイ」

「行ったことある？」

「せんちゃんと、何度か」

「そっか。じゃあわかるね」

「ハイ」

「よく行くの？映画」

「そうですね、せんちゃんが映画好きだから」

「そうなんだ。ネットで、このチケットの映画の予告編を観てきたんだけど、恋愛モノなんだね」

「あ・・・、はい、あの、よかったですか？」

「うん？全然大丈夫だよ。映画は特に拘りなく、どんなものでも見るよ」

「そうですか」

多分

松山先生は、私を気遣って話しかけてくれる。

私もそれに応えなきゃ

楽しまなきゃ

松山先生との時間を。

車が信号停車する。

「きいちゃんは、どんなのが好きなの？」
先生が私を見る。

「え、あ、映画ですか？」

「あ、まあ映画もだけど、どんなことするのが好きなのかなって」
「あー、私は・・・そうですね、映画を観るのも好きですけど、本を読むのが一番です。」

「へー読書かあ。なんかきいちゃんらしいね」

きいちゃんらしい・・・

「そーですか？」

「うん。本を読んでそうなイメージはあるよ。最近は何を読んだの？」

再び車が走り出す。

「あ、それが・・・最近の入試の勉強が主で、本は読んでないんです。」

「あつそーか。きいちゃんは受験生だもんね。」

「・・・ハイ」

「じゃあ、今日は息抜きだねっ」

チラリと笑顔を向ける。

「ハイッ」

好きな人とのドライブってこんなに楽しいんだ・・・

助手席に座るって、特別なんだなー・・・

私も何か聞いてみよう

「あの」

「ん？」

「先生は・・・背がすごく高いですけど、どのくらいあるんですか？」

「ああ、183。」

「わ、高いですね」

「んー、でもこれが結構厄介でね、たまにドアのところの壁にぶつきたりとか」

「ハハッ」

「それぐらいならいいんだけど、仕事中に、患者さんの治療してる時に、途中で立ち上がるうとしてライトにぶつきたりね」

「あゝハハッ」

「患者さんもビックリだよ」

「ふふっ、大変なんですね。何かスポーツとかされてたんですか？」

「うん、大学まで野球をね。センターを守ってた。」

「へえ、そうなんですか。」

色白な松山先生から野球ってイメージは湧かなかったけど、背が高いのは納得しちゃう

「センターってわかる？ってというか、野球とか興味ある？」

「あ・・・、外野手・・・？ですよね」

「うん、そう、あ、わかるんだ？」

「あの、父がテレビで見てるのを時々一緒に見たりはしますけど、いまいちルールとかはよくわからないです。」

「ハハッ、そっか。やっぱ女の子だしね。何かきっかけがないと、興味も湧かないよね。」

「スミマセン」

「いやあ、全然。」

「でも、テレビの中継とか見てると、みんな楽しそうに応援してますよね。」

「そうだね。ハマればおもしろいんだけどね・・・あ、そうだ。じゃあさ、来年、専門学校に合格したら、野球観に行こうか？」

「え・・・」

「もし、興味があるなら。今は、シーズンオフだから行けないけど、きいちゃんが高校卒業する頃はオープン戦も始まる時期だし。球場に連れて行ってあげるよ。」

うそ・・・

ホントに・・・

「本当ですか・・・？」

「うんっ」

松山先生と、また一つ、一緒に出かける約束

少しずつ

先生との時間が

確実なものになっていく。

映画館のすぐ近くの立体駐車場に車を止め、映画館に向かって先生と歩く。

先生と並んで。

日曜日とあってか、恋愛モノの映画が上映中だからなのか、映画館は男女二人連れのカップルが多い。

チケットを、窓口で指定席の券と交換して、100人程が座れる小さなスクリーンへ入る。

まだ明るいスクリーンで、指定された座席を探す。

「きいちゃん、何か飲み物要る？」

「あ、はい、じゃあ、レモンティーで」

「うん、わかった。待ってて」

「ハイ」

座席に座ると、深いため息が出た。

「はあー・・・」

松山先生といるとすごく楽しい

でも、緊張してるせいかな・・・

ドキドキしちゃって

息がうまくできてないような・・・

松山先生が飲み物を買って、スクリーンへ戻って来る。

「はい、きいちゃんの」

そう言つて先生は、レモンティーのカップを前の座席のカップスタンドに置いてくれた。

「ありがとうございます、すみません」

「どういたしまして」

スクリーンの照明が静かに落ちる。

車のシートよりも近い距離で、となりに座る先生を感じる。

勉強を教えてもらっている時よりもずっと近い。

こんなに近くで先生を感じたのは、2か月前の歯の治療の日以来。

でも

あの時とは少し状況が違う。

あの時はまだ

担当歯科医と患者だった。

今の私と松山先生の関係はなんだろう。

あの時とは違うけど

何て言つたらいいんだろう。

私と先生は

周りにはどんなふうに

映っているんだろう。

映画の主人公は大学生の青年。

アルバイト先に、お客としてやって来たOLの女性と恋に落ちる。大学の授業に出るのも疎かになるほど、青年は彼女に溺れていく。ある日、彼女は仕事で海外赴任が決まり、青年は突然別れを告げられる。

青年は、彼女と将来の約束をしようとするが、年の差と、青年の未来を考えた彼女は、それを受け入れない。

彼女は青年の前から姿を消す。

青年は彼女への想いを抱いたまま。

報われない、青年の恋。

上映中は、松山先生とは一度も言葉を交わさなかった。

切ない青年の想いが、自分の先生への想いと重なって見えた。

松山先生は、どんな思いでこの映画を観ていたのだろう。

映画が終わっても、感想を口にすることはできなかった。

映画館を出ると、外は薄暗くなっていた。

昼間よりは、気温も少し下がっている。

「日が落ちるのが早くなったね。」

「そうですね。」

「きいちゃん、寒くない？」

「あ、ハイ、大丈夫です。」

「うん。じゃ、行こう」

松山先生は、駐車場とは逆方向の繁華街へ向かって歩き始める。

「あれっ、あの、先生？」

「きいちゃん、今日こそご飯食べに行こう」

振り向きざまに、そのアヒル口で笑ってみせた。

「ハ、ハイッ」

せんちゃんの言った通りだ。

松山先生と・・・食事・・・

嬉しさと

ドキドキで

足取りがまた弾む。

日曜日の、賑やかな夕暮れの繁華街。

休日出勤だったらしい背広の会社員の集団、ファミリーレストランに入っていく楽しそうな家族連れ、これから出勤すると思われる派手目の服を着た女性、腕を組んで歩くカップル。

そんな人たちを眺めながら、松山先生の半歩後ろをついて行く。

10分ほど歩くと、先生はガラス張りのおしゃれな洋食のお店の前で立ち止まった。

高級感溢れるその佇まいは、高校生の私に、入ることを少し躊躇わせる。

「きいちゃん、ココ。予約してあるんだ。」

「あ、そうだったんですか」

お店に入ると、静かなクラシック音楽が聞こえ、甘いブイヨンやソースの薫りが鼻を抜ける。

扉の音を聞いてか、奥から黒服を着た接客の中年男性が出てきた。

「いらつしやいませ、松山様。」

「こんばんは。」

わぁ・・・すごい

松山先生、きつとここの常連さんなんだ・・・

「お待ちしておりました。さあ、どうぞ」

男性は、先生と私を店の奥へ案内する。

「きいちゃん、行こ」

「はい」

接客の男性の後ろを、松山先生とついて行く。

それほど広くはない店内は、淡いオレンジの照明に包まれ、上品にクロスが掛けられたテーブルには、空のウォーターグラスとシルバ―、絵皿と一緒にナプキンが置かれている。

まだ17時を少し回った頃だというのに、客席は随分埋まっている。

高そうなお店・・・

こんなとこ来たことない・・・

一番奥の窓際、二人掛けのテーブルが視界に入った時、甲高い女性の声が、後ろから響いた。

『真一！？』

奥のテーブルを目指していた接客の男性も、

松山先生と私も、

その声と同時に立ち止まり、声の方を振り返る。

通り過ぎたばかりの4人掛けのテーブルに、結婚式でもあったのかと思わせる様にめかし込んだ、大人の女性が4人座り、シルバーを手はこちらを見ている。

その中の一人が、松山先生を呼んだ。

『やっぱり！真一！』

シルバーを置いて立ち上がったのは、

一度会ったことがある、

クリニックの

上原先生・・・。

シンイチ・・・？

この人、松山先生をそう呼んでる。

「ああ、どうも」

素っ気ない態度で、先生はクイと首を動かした。

私はどうしたらいいのかわからず、ただその場に立っていた。

『どうしたの？偶然ね』

上原先生がそう言うと、一緒に食事していた他の女性も話し始めた。

「ホントだ、松山くんだ」

「変わってないね」

「久しぶり」

先生にむかって、軽く手を振っている人もいる。

松山先生は無表情で、それに応えようとはしない。

先生・・・怖い顔してどうしたんだろう・・・

っていうか私は・・・どうすれば？

『真一も食事に来たの?』

「ああ」

見たことない

松山先生のこんな冷たい顔

『あら、あなた・・・』

上原先生が、私に気づいた。

『確か、真一の患者さんだったコよね?』

「あ・・・、こんばんは」

それを聞いたテーブルの女性たちは、小声でヒソヒソ冷やかしを始める。

「えーなになに、患者?」

「松山くん患者に手出してるのお?」

しばらく様子を見届けていた接客の男性が私と目が合い、それを合図に口を開く。

「あのう、松山様」

それを遮るように、上原先生がまた喋る。

『ねえ真一、私たちこれから、大学の仲間と集まるのよ。よかったら一緒にどう?』

「はあ?」

明らかに不快な顔で、松山先生は答える。

「・・・」

私はどうしたらいいんだろう・・・

全然わかんない

『あなた、名前なんだったかしら?』

上原先生が私に聞く。

「あ、水嶋です。」

『ああ、そうそう、水嶋さんっ。よかつたらあなたもどっ?』

ええーっ

「あ、いえ、私は」

「悪いけど、僕たちは遠慮します。」

無感情、無表情で、先生は答える。

『あら、どうしてよ? せっかく偶然会えたっていうのに。これも何かの縁でしょう?』

上原先生は、『ね?』と、テーブルの女性たちに同意を求める。

「松山くんも一緒に食べようよー」

「もう少ししたら、同期の男たちも来るわよ?」

松山先生と同じ大学の人たちなんだ・・・

なんか

嫌だ

この空気。

ここに居たくない

私一人

絶対浮いてる。

『ねー？真一、みんなもこう言ってるし。水嶋さんも。』

知らない大人ばかりの中で

知らない会話の中で

私は浮いてる。

「行こう、きいちゃん」

上原先生を無視するように、先生は言う。

「松山先生」

「うん？」

それでも、私に向ける表情は、さっきの不機嫌な顔とは違う。

「私のことは気にしないでください。」

「え？」

「私、帰ります。」

「いや、きいちゃん、」

ごめんなさい、先生

『あら、帰っちゃうの？』

「はい、失礼します。」

上原先生に頭を下げて、店の出口へ向かう。

「ちよっ、待って、きいちゃんっ」

松山先生のその声に

振り向くことができなかった。

早くこの場を

立ち去りたくて。

店の扉に手を掛けると、背後から声がした。

「大丈夫でございますか？」

振り返ると、黒服の接客の男性だった。

「はい・・・」

涙が 出そうになった

「どうぞ、お気をつけて・・・」

「はい・・・」

店を出ても、外はまだ賑やかなままだった。
行き交う人々の中をゆつくりと歩く。
最寄りの駅目指して。

あー・・・

おなかすいたなあ・・・

胃がキリキリした。

胸がズキズキした。

目もとが熱くて

涙が出た。

恋をするって苦しい

人を好きになるって苦しい

近いと思っていた相手を遠く感じて

相手に手が届かない気がして

突然

泣きたくなる。

映画の中で

あの青年も泣いていた。

手が届かない彼女への

やり場のない想いを胸に

ちょうど

今の私と

同じように。

先生の過去。

深夜1時。

ベッドの中で、開いた携帯電話を片手に、眠れないままぼんやりしていた。

あのあと、家に帰り着いてから携帯電話を見ると、松山先生からの着信とメールがあった。

『きいちゃん、一人で帰らせたりしてごめん。連絡ください。』

短い文章なのに、何度も何度も読み返していた。
メールの返信はまだしていない。

今も、上原先生や他の同級生の人たちと一緒にかもしれない、そう考えると、電話も掛ける気になれなかった。
ベッドに入る前にせんちゃんに電話したら、ひどく叱られた。

「松山先生は、上原の誘いを断ってたんですよ」

「なんで、一人で帰ったりしたの」

「上原の思うツボじゃない」

「松山先生はあんたと食事したかったはず」

「バカなんだから!!」

そう言っつて、せんちゃんは電話を切った。

だいぶ、怒ってた。

多分、せんちゃんが言ってることが正しい。

あの状況に戸惑って、浮いてる自分に耐えられなくて、帰った私が悪いんだ。

松山先生は、私を引き留めようとしてくれていたのに。
でも

あの空気が嫌だった。

上原先生の、あの、どこか見下したような視線も、一緒にいた女性たちの、冷やかな笑い声も。

松山先生に近づいてくる女性は、

私以外にもたくさんいることを、思い知らされた。

- 翌朝 -

玄関で靴を履こうとしていると、ピンポン♪というインターホンが鳴った。

「はい??」

ドアに向かって返事をする。

母親がキッチンから、「あら、どなた??」と声を上げる。

「あ、いいよー、お母さん、私が出るから。」

キッチンに向かって返し、玄関の鍵を開ける。

誰だろう、こんな、朝早く・・・

「はい?」

ドアを開けると、そこには、制服を着た神妙な面持ちのせんちゃん
が立っていた。

「あっ!せんちゃん?」

「・・・おはよ」

「えっ、どうしたの?」

「昨日のこと、早く謝りたくて、学校行く前に寄ってみたの。」

「わざわざ?」

「・・・言い過ぎたと思って」

悲しそうな顔をするせんちゃん。

なんだか、せんちゃんらしくない。

「あ、あの、とにかく学校行こう！お母さん、いつてきまーす！」
そそくさと玄関を閉めて、せんちゃんと駅へ向かう。

無言のせんちゃんに、私から口を開く。

「せんちゃん、何時に家出たの？」

せんちゃんちは、うちから電車で30分も離れている上、うちに寄れば学校まではかなり遠回りをすることになる。

「6時過ぎ。昨日、きいにあんなこと言って電話切っちゃったから、ずっと気になつて」

「そんな、せんちゃんが怒るの当然だよ。せつかくチケットくれたり、服も貸してくれたのに、私が先生とのデート、途中でダメにしただもん。」

「違うの。」

「え？」

「違うのよ。あんたに怒ったんじゃないのよ。」

「え。じゃあ・・・」

「その、上原って女のやり方が頭にきたのよ。せつかくのきいと先生の初デートだったのに邪魔してくれて・・・」

「・・・せんちゃん」

「きいが戸惑うのは当然よ。男とデートするの初めてなのに、そんな状況になつてたなんて・・・」

せんちゃんはやっぱり、私の強い味方だ

「ありがと、せんちゃん」

「・・・なに、お礼なんか言つてんのよ」

「ふふ」

せんちゃんは照れくさそうに、目を逸らした。

「で、松山先生には？」

「ん？・・・まだ、連絡してない」

「そう・・・。でも、先生、きいからの連絡、待ってると思うよ？」

「・・・うん」

「メールでいいから、送ってみたら？」

せんちゃんが優しい口調で言う。

せんちゃんが言うのと、不思議とそれができる気がする。

せんちゃんは私に、元氣と勇氣をくれる。

いつだって私を、支えてくれる。

こんなにいい友達を持った私は、きっと幸せ者だと思う。

「わかったっ！松山先生にメールするっ！」

「！・・・っ、よし！よく言った！きい」

やっと、いつものせんちゃんになった。

それより

「なんて送ったらいいかな？」

「え？ああ、んー、そうねえ」

「！・・・」

「んー・・・今週の土曜は行くの？クリニック」

「あ、まだ行くなって言ってない。いつも、前の週に、先生の都合聞いてから決めてるし」

「じゃあ、それよ。今週も、数学見てもらえま・す・か？・・・っ
て」

言い方がいやらしい

「なんで・・・そんな色っぽく言う必要があるの？」

「だって、あんた全然色気ないじゃない」

「せんちゃんの言う色気って何??なんかやらしいよっ?」

「はあゝ??色気が何かもわかってない。きいはまだまだ、メガネのお子様ね。」

「メガネ関係ないじゃん……。自分だってまだ未成年のくせに。いーの、私は別に。」

「いいのお??お色気たつぷりの上原がライバルなのにいい」
「うっ……」

「ふふんっ。まあ、でも、若さでは、きいの圧勝だから。これだけは上原だって、あんたには勝てないわよ。」

「褒められてるのが、貶されてるのが……」

「いいから早くメール!!」

「あっ、ハイッ」

『先生、昨日はありがとうございました。楽しかったです。今週の土曜日は、勉強できますか?』

ドキドキしながら送信ボタンを押した。

朝8時前のメール。

あまりに早すぎて失礼かなと思ったのに。返事がすぐに送られてきた。

『おはよう、きいちゃん。もちろん。土曜日、クリニックへおいで』

まるで

待っていたとでも言うように。

平日は、学校が終わると真っ先に家に帰って、机に向かった。土曜日まで、なるべくたくさん問題を解いておこうと思った。気がつけば、問題集は3冊目に入っていた。

専門学校の入試に、そこまで強化することもないように思えたが、そうせずにはいられなかった。

たくさん勉強したと思われたい。

頑張っていると思われたい。

先生に褒めてもらいたい。

歯科衛生士になるために努力している自分を、

松山先生に見てもらいたい。

それが

今の自分にできること。

松山先生に近づけるように。

これからもずっと

松山先生のそばにいたいから。

- 土曜日 -

いつも通り制服に着替えて、クリニックに間に合うように家を出た。11月は、17時を過ぎるとすっかり日が落ち、暗くなるのも早い。しかも今日は、あいにくの雨。

駅に着くと、雨のせいなのかダイヤに乱れが出ていて、クリニックのあるビルに着いたのは19時近かった。

少し遅くなっちゃったな・・・

鞆から、この一週間頑張った問題集を取り出した。

頑張った証・・・

うんっ、よしっ

いつも通り、深呼吸。

問題集を手に、クリニックの扉を開けた。

受付には誰もいない。

中に足を一歩進めると、奥から女性の声が響いた。

『今日も来るんでしょう？あの』

ドキッ・・・

上原先生の声だ。

扉を半開きにしたまま、足が止まる。

あのコって・・・私のこと？

「ああ、来ますよ。」

それに応える、素っ気ない松山先生の声。

『じゃあ、私もここに居るわ』

「はあ？」

『だって、院内に女子高生と2人きりなんて良くないじゃない』

ドキン・・・ドキン・・・

「それなら、仲村が技工室にいますんで、ご心配なく。」

『私が知らない間に、真一がこんなことしてたなんてね。どういうつもり？』

「どういうって、なにがですか？」

『女子高生相手に勉強教えたり、デートまでして』

「いけませんか」

『当たり前でしょう？あなたには、歯科医としての立場があるじゃない。いい大人が、高校生相手にこんなことして、恥ずかしいと思わないの？』

「思いませんね。第一、あなたには関係のないことです。とやかく言われたくない。」

ドキン・・・ドキン・・・

冷酷ささえ感じさせる、松山先生のセリフ。

間違いなく、上原先生は、私のことで怒っている。

どうしよう・・・

この会話・・・このまま聞いていいんだろうか

でも・・・足が動かな・・・

「ヨッ」

突然、背後から肩を叩かれ振り返る。

「仲村さん」

缶ジュースを3本持った仲村さんが立っていた。

「どうしたの？入んないの？」

「あっ、いえ、あの」

仲村さんが中へ入っていく。

「あっ！仲村さん、そっちは・・・」

仲村さんを止めようと後を追って奥へ進むと、急に立ち止まった仲村さんの背中にぶつかった。

そしてそれは、ズレたメガネを通して視界に入る。

ズキン・・・

痛みを伴う鼓動が、胸を貫く。

仲村さんも、驚きのあまり、声を失っている。

目を背けたい光景。

なのに

目を逸らせない。

クリニックの奥

仲村さん越しに見えた。

松山先生の背中に

ぴたりと寄り添う

上原先生・・・

白衣と白衣が重なり合う

息が苦しい

松山先生の表情は見えない

『真一、どうしてそんなに冷たいのよ』
「・・・・・・・・」

ズキン・・・ズキン・・・

「離れてくれませんか」
『・・・・・・・・』

「僕とあなたは、今更何の関係もない」
『でもっ・・・私の気持ちには気づいてるんでしょっ？この前レス
トランにいたのも、偶然じゃないのよ。』

ズキン・・・ズキン・・・

『私、真一のデスクのメモを見たの。あの店の予約の……。あの店に、まさか男友達と来るわけない。絶対に……。女が一緒だと思っただ。でもまさか』

「いいかげんにしてくれ！」

ビクッ……

仲村さんも、私と同じように驚いていた。

初めて聞く、松山先生の怒鳴り声。

これ以上、聞いてはいけないような気がした。

「仲村さん、私、今日は帰りますね」

「えっ」

ズキン……ズキン……

「じゃあ……」

「あ、ちよっ……」

バサバサッ

手にしていた問題集を、床に落としてしまった。

ああ……最悪……

『あつ、やだ、仲村くん、いたの？』

焦ったような、上原先生の声。

受付の陰になっている私に、奥の二人は気づいていない。

ズキン・・・ズキン・・・

問題集を捨つのも忘れて、クリニックを出た。

冷たい雨の中を、駅に向かって走る。

傘も、クリニックの入口に忘れた。

二人の光景が

焼き付いて頭から離れない。

上原先生はやっぱり

松山先生が好きなんだ。

顔を濡らしているのは

雨なのか

涙なのか

胸の鼓動が

ひどく痛い。

11月も中旬になると、校庭の銀杏も鮮やかな黄色に変わり、風が吹けば、ハラハラと儚く散った。

教室の窓からそれを眺めながら、散ってゆく木の葉と自分を重ねた。

あの土曜日から、2週が過ぎた。

あれ以来、松山先生との連絡も途絶え、クリニックにも行っていない。

数学の勉強は一人でやった。

わからないところは担任に聞いてみたが、松山先生の教え方とは雲泥の差だった。
なんで迫じいが数学の教師に成り得たのか、聞けば聞くほどわからなくなつた。

期末テストも間近に迫り、勉強に熱中していれば、余計なことは考えなくて済んだ。

松山先生のこと

松山先生を好きな自分

上原先生のこと

これからのこと

「きい、英語のテスト範囲見た？」

「うん、廊下の掲示板に貼ってあったよ。」

校門に向かつてせんちゃんと歩きながら、テスト範囲のメモを渡す。
受け取ったせんちゃんが、門を見て立ち止まる。

「何かあるのかな」

「え？」

門を出ていく他の生徒が、何かをじろじろ見ながら通り過ぎていく。
せんちゃんと手をつないで、ゆっくりと門へ向かう。

門の陰に、腕組みをした若い男性が立っている。

よく見れば、見覚えのある茶髪。

チェックの襟シャツにＴシャツを重ね、白いショルダーバッグを横掛けている。

「仲村さん!？」

『おっ! やつと出てきたなっ』

なんで?

「な、何してるんですか? 目立ってますよっ」

『えっ、そお?』

「きい、誰この人？」

せんちゃんが、仲村さんをジロジロ見ながら聞く。

「あ、歯科技工士の仲村さん」

「あー、いつもクリニックにいてくれる人」

『どうも』

仲村さんはせんちゃんにむかって首をクイと動かした。

「あの、どうかしたんですか？」

『あ、ちよつと話あつてさ』

その瞬間、せんちゃんが私の前に出た。

「なんなんですかあ? おたくの松山先生に言つといてくださいよ!

これ以上きを傷つけるなら」

「せんちゃん!」

「なによ、だつて!」

『・・・・・・』

「いーから、先に行つてて。」

啞然とする仲村さんをよそに、せんちゃんの腕を引っ張り、背中を押す。

「わかつたわよっ・・・・」

一度振り返つたせんちゃんが遠のくの確かめてから、仲村さんに謝った。

「すみません・・・」

「ずいぶん、威勢のいいコだね。」

仲村さんは苦笑いしながら、せんちゃんを見送る。

「私を心配してくれてるんです。」

「いい友達だ。」

「はい・・・あのう、話って」

「ああ、歩きながらでいいよ。どうせ駅まで行くんだろ？」

「はい」

「ん」

せんちゃんから距離を置いて、仲村さんと歩く。

時々、駅方面に歩く他の生徒たちが、ちらちらとこちらを見ているのがわかる。

「なんで、クリニック来ないの？」

「え？」

「もう、2週、来てないだろ？」

「・・・」

「上原と松山先生が話してるの、一緒に見た日以来だよ」

「・・・クリニックへ行く時は・・・前の週に先生と約束するんですけど・・・」

「連絡も取ってないんだろ？」

「・・・」

「きいちゃんが連絡くれなくなっただって、あの人言ってたよ。」

仲村さんにそんなこと言うんだ・・・

「まったく、ガキだよなあ」

「え」

「ガキだっつってんの」

「ガキって・・・」

「ガキだろ？顔も出さなきゃ連絡もよこさない。典型的な、ガキのやること。」

・・・グサツとくるな・・・

「・・・」

「あの人さあ、いつも君のこと待ってんだよ。土曜日。8時ぐらいまでさ」

「・・・え？」

「きいちゃんが来るかもしれないってさ。まったく、毎週引き留められる俺の身にもなってよね??」

先生が、私を待つてる・・・？

「おい、聞いている？」

私の顔の前で、手をひらひらさせている。

「・・・どうして」

「さあねえ。それは自分で確かめたら？」

仲村さんは、まるで私を試すかのように眉を上げた。

「・・・」

「ふう・・・。すねるのは君の勝手だけどさあ、このままでいいわけないことぐらいは、わかるだろ？」

「・・・はい」

「松山先生も、こんなガキの何がいいんだか」

「・・・」

「俺は女の子は好きだけど、ガキはごめんだね。こっぴつのが面倒くさい。」

「だったら・・・」

「んー？」

「だったら、どうして来たんですか？」

面倒なら、どうして

「俺が知ってる限りのこと教えてやるよ。」

仲村さんは、私の前に立った。

「……………」

「君が気にしてる、上原さ、松山先生と付き合ってたんだよ。大学時代。」

ズキン…………

「……………」

「いや、ここは傷つくところじゃないだろ？松山先生はいい歳だし、過去に付き合ってた女ぐらいいて当然。いなかったら、逆にコワイだろ」

「……………はあ」

「しかも、あの二人が大学の時って、君、小学生だし。」

「……………」

うんうんうん…………と、首で頷いた。

また、並んで歩き始める。

「でも、別れたんだよ。もう随分前に。」

「……………」

「その原因っていうのが、上原に他に男が出来て、上原の方から、別れたいって言ったらしい。」

「え……………」

「……………」

「松山先生が…………振られたってことですか…………？」

「そう。いい度胸だよな上原も。あの松山先生振って、他の男に走るんだもんな。」

なんか…………信じられないな…………

でも、上原先生も、男性にはかなり人気ありそうなタイプだし…………

「まあ、俺がクリニックに来る以前の話だからその程度だけど、俺が知る限り、その後、松山先生は、誰とも付き合ってない。」

「……」

仲村さんを見る。

自信満々の表情。

「これは間違いないよ？うちのクリニックが、今の駅前に移転する前からあの人と働いてるけど、少なくとも3年は、誰とも付き合っていない。絶対。」

「はあ」

「人気あるくせに、この人は女に興味ねーのかって思うぐらい、仕事ばっかしてた人なんだ。」

「……」

「でも、水嶋さんがクリニックに来るようになって、あの人、よく君の話をするようになってさ」

先生が……私の話を……

「今までほとんど、あの人の口から女の名前なんて出たことなかったんだよ？飲みに行っても、仕事の話ばっかであ。」

「……どうして、仲村さんは」

「うん？」

「そんなに、松山先生のこと詳しいんですか？」

「え、だってあのクリニックで、あの人と一番仲いい俺だもん。」

「あー」

「あーって、それだけかよ」

「あ」

「ん！？」

「なんで、上原先生のことと呼び捨てなんですか？」

「そこかい……。俺、アイツ嫌いだし」

「どうしてですか？？年上だし、綺麗なのに」

「おとなしそうな顔して、そういうツツコミはすんのな。」

仲村さんが目を細める。

「せんちゃんに鍛えられてますから」

「ああー、あのコか。プライドの高い女も嫌なの。上原は審美歯科が専門で、うちと系列のクリニック掛け持ちしてっから、毎日来るわけじゃないんだけど。たまに来たかと思ったら、偉そうに俺の仕事にケチつけやがって・・・」

「・・・ハハッ」

「・・・なんだ、笑ったじゃん」

「え？」

「ずっと沈んだ顔してたからさ」

「・・・」

「あの日、俺と君が、上原と松山先生が一緒のトコ見たのも、松山先生は知ってるから。」

「え」

「俺が言った。だから、松山先生の方からも、連絡し辛くなってんのかもな。」

「・・・」

駅前の大通りに入る所で、せんちゃんがこっちに向かって手を振っている。

先に帰るという意味だ。

せんちゃんに向かって、私も大きく手を振った。

せんちゃんが見えなくなったところで、仲村さんがまた話した。「連絡して、会いに行けよ。ホントは君だって会いたいんだろ？」

会いたくないと言えば、嘘になる

「・・・はい」

「お？素直だねえ。いつもそうならいいのにねー」

「…………でも」

「ん？」

「今更どのタイミングで行けばいいのか……」

「昨日からさ、学会があつて東京行つてんだよ、あの人。」

「東京」

「うん。でも、金曜には戻るって言つてたし。」

「…………」

「メールしてみろつて」

「…………」

「それで、今度の土曜日、クリニックに来いよ」

「…………」

「あの人、絶対待つてるからさ」

「…………はい」

「うん」

仲村さんの「うん」は、松山先生の「うん」に、少し似てる。

大通りの手前で立ち止まる。

「それと、これ」

仲村さんはショルダーバッグから、あの日、私が落とした問題集を出した。

「あ……すみません」

問題集を受け取る。

「それ、添削済みだよ。」

「え？」

「松山先生が、間違つてるところは全部、解説付けてる。」

「…………そんな、うそ……」

問題集をパラパラとめくる。

赤いボールペンで書かれた

先生の文字

・式1をX軸方向に1、Y軸方向に3平行移動だから・・・

先生の数字

・0 α 2の時、 $g(\alpha)$ の最大値と最小値を求める・・・

くせのある、先生の記号

・・・だから、最小値は0になるんだ。

先生の口調そのままの

・・・ここはあくまで、0でない定数となっているからね。

声が聞こえてきそうな、解説文

「きいちゃんはよく頑張ってるって、言ってたよ。」

「……………」

先生っ…………

ズキンズキンと胸が痛くて

先生の優しさが嬉しくて

泣けてきた。

「自信持てって。あの人と一番仲いい俺が、これだけ協力してやってんだからさ」

仲村さんはそう言って、私の背中をポンポンと叩いた。

その手に

背中を押してもらえた気がした。

仲村さんが言う通り

私がやってることは子供と同じ。

こんなんじゃないかと

ダメなんだ。

松山先生を好きなら

もっと

成長しなきゃだめなんだ。

会いたい

松山先生にすぐ会いたい。

メールをしよう。

返事が来たら

電話をしよう。

そして

松山先生に

会いに行こう。

今度こそ

素直な自分で。

先生の温度。

仲村さんと駅前で別れて、普通電車に乗った。

電車に揺られながら問題集を開いて、松山先生の解説文をひとつひとつ読んだ。

先生は、私の間違いの傾向まで理解していて、私にわかりやすいように、細かい説明も加えてくれていた。

何度読み返しても、胸が締め付けられる。

嬉しさと

せつなさと

松山先生の、親身な想いが伝わって

電車を降りて、夕暮れでオレンジ色になった駅のホームのベンチに座る。

携帯電話を開いて、新規メールを作る。

何て・・・書こうかな

いつもなら、せんちゃんに聞いたりして助けてもらってる。

でも、せんちゃんにはかり頼ってちゃいけない。

自分で考えて、自分の判断で、自分の言葉で、松山先生にメールをしよう。

今、思っていることを、素直な気持ちで。

『松山先生、お久しぶりです。ずっと、連絡せずにすみません。』

今、東京に行かれてるそうですね。

問題集の採点と解説、ありがとうございます。

また、クリニックへ行ってもいいですか？』

送信ボタンを押す指が震えた。

これが精一杯だった。

本当は、「会いたいです」とか、言ってみたい。

でも、さすがにそこまでは書けなかった。

人のいなくなったホームの階段を上る。

なんとなく、足取りが軽くなった気がした。

返事はいつ来るだろう。

学会って言ってたし

忙しいかもしれないな・・・。

夕食を終えて部屋に戻ると、机の上の携帯電話がピカピカ光っている。

部屋の電気を点けるのも忘れて、電話に飛び付く。
開くとそこには、着信メール有り。

先生!?

ドキドキしながら、受信BOXを開く。

『20:10 From:松山先生

きいちゃん、こんばんは。』

松山・・・先生・・・っ

『久しぶりだね。元気にしてるかな。』

！・・・

『今、電話しても、大丈夫?』

えっ!?

うそっ!?

電話??

今、何時!?

慌てて携帯電話を待ち受け画面に戻す。

20:25

15分前!

どうしよう・・・電話

先生、まだ・・・待ってるかな

先生と話したい・・・

電話・・・

電話してみよう・・・!

返事が来たら、電話するって、決めてたんだからっ・・・

松山先生の番号を出し、発信ボタンを・・・

押した。

トゥルルルルル
♪

ドキン・・・

トゥルルルルル
♪

ドキン・・・

暗い部屋で、呼出音が耳元で響く。

トゥルルルルル
♪

緊張で、電話を持つ手が冷たくなる。

トゥルルルルル
♪

先生・・・

トゥルルルルル
♪

先生・・・

トゥルルルルル
♪

松山先生・・・！

トゥルツ・・・カチャ

！・・・！！

『・・・もしもし』

「……先生……」

「……」

『……もしもし？……きいちゃん？』

「……先生……」

『うん、きいちゃん？』

「……はい……」

松山先生の 声だ

『……ハハッ、きいちゃん、久しぶり』

「……はい」

『元気？』

「……はい」

「……どうしよう」

泣きそう

『電話してきてくれたんだね』

「……はい」

『ありがとう』

「……いえ」

『ススッ』

先生が笑う時の、ススッという鼻の音

先生は東京にいるのに、すぐ隣にいるみたいに感じた

「先生……」

『うん？』

「あの……先生は……お元気ですか？」

『うん、元気だよ。きいちゃんは、勉強どう？』

「……す、数学が……」

『うん』

「担任に聞いても……わからなくて……」

まずい

涙声になってきた

『うん』

泣いてるって

「だから先生に……教えてもらいたいところが……あつて」

先生に気づかれる

『そっか。』

「……はいっ……グスッ」

あっ

鼻すすっちゃったよお

『金曜には戻るから』

「……………」

『土曜日、いつもの時間においで?』

「……………はいっ」

『うん。……………スツ……………泣かないで?きいちゃん』

優しい 先生の声

「……………」

ますます 泣けてくる

『大丈夫だよ。僕がちゃんと教えてあげるから。』

……………先生

「……………はい」

『ハハッ、泣いたらせつかくのカワイイ顔が台無しだよ?』

「……………ハハ」

メガネとの間に指を入れて、涙を拭う。

『あ、問題集の解説で、わからないところはなかった?』

『あ、ハイ、すぐわかりやすかったです。』

『そっか。それはよかった。』

「……………ありがとうございます……………先生」

『うん。どういたしましてっ』

「……………」

『あ、じゃあ土曜日にね?』

「……………はい」

『おやすみ。きいちゃん。』

「……………おやすみなさい。」

電話を切っても

携帯電話を手放せず

暗い部屋で座り込んで

耳に残る

先生の声ひとつひとつを

たどっていた

早く・・・

先生に会いたい。

- 翌日 -

「ほらね。これでもう確実よ!」

昼休み、せんちゃんがお弁当のチキンボールをフォークに刺し、私に向けて言った。

「は？・・・くれるの？チキンボール」

「ちがう！松山センセ、きいのことが好きなのよ！」

「またその話か・・・」

「なによ、あんたの方からしてきたんじゃない。」

「いや、一応、報告をと思つて。」

「あの仲村つて人も、先生がきいの話をするようになったつて言つてたんでしょ？」

「！・・・うん」

「先生がきいに連絡してこなかったのも、上原とのことをきいに見られたのがシヨックだったのよ、きつと！」

「！・・・せんちゃん」

「ん？」

「すごい想像力だね」

「想像じゃないわよ。これは推測よっ」

「！・・・同じだよ」

「・・・」

「・・・」

「ゴホン、とにかくねえ。きい、ここはもう思い切つて行くしかないわよ。」

「・・・何を？」

「松山センセに告白すんのよ。」

「ぶふっ」

驚きのあまり、吹き出してしまった。

「ちよつとお、ご飯粒飛んだわよっ」

「ご、ごめ・・・」

「はい、お茶」

せんちゃんに渡されたペットボトルのお茶を飲む。

「ハア・・・」

「んんん、きいにはやっぱ無理かなあ」

「こつ、告白なんて出来るわけない・・・」

「でもー・・・」

「・・・」

「気持ちをちゃんと伝えないと、恋人にはなれないのよ？」

せんちゃんが、真剣に私を見て話す。

「ー・・・」

「誰だって一度は、勇気を出して、告白してるものなのよ。」

「ー・・・うん」

せんちゃんの言うとおり。

本当はもっともっと

勇気を出さなくちゃいけない。

「きい、松山センセと出会ってから、ずいぶん変わったし。」

「変わった？」

「うん。」

「どんなふうによ？」

「恋してるから、可愛くなった。」

うそ・・・

「ホント？本当にそう見える？」

「うん。松山センセが、きいのことかわいって言うのも、絶対に嘘じゃないと思う。」

「ー・・・」

「自信持つて、気持ち伝えなきゃ。」

せんちゃんが、微笑んだ。

「……………」

「まあ、メガネは相変わらずダサいけどね」

「もつとつるさいなっ」

ザクッ

せんちゃんのお弁当に残っていたチキンボールを奪った。

パクリ

「ああーっ!!」

「もぐもぐもぐもぐ」

「ちよっと！なにやってんのよあんたっ！」

「せんちゃんがダサいダサい言うから」

「……あんた、覚えときなさいよ！」

「ふふんだ」

いよいよ、土曜日がやってきた。

松山先生に会える。

実質的には、3週間ぶり……。

なんだか朝から落ち着かなかった。

ソワソワして、何度も時計を見た。

やっぱりもう少し、数学の問題を解いておこうと机に向ってみたが、頭が全く働かなかった。

クリニックのビルには、18時半ちょうどに着いた。

そしてやっぱり、いつもの制服で来た。

メガネで、おさげ。

これが、私らしさ。

素直になるには、自分らしいのが一番だと思った。

深呼吸をして、扉を開けた。

受付の照明は点いていたが、相変わらず誰もいない。

「こんにちはー・・・」

パタンと奥からドア音がして、足音が近づいてくる。

ドキン・・・

「きいちゃん」

グレーのシャツに、黒のネクタイ。

袖を肘まで捲くった長い白衣。

スラリと背の高い松山先生。

柔和な笑顔で、そこに立っている。

今日はまだ、白衣のままなんだ。

ああ・・・

私は心底

この先生に会いたかったんだ。

先生に会えたことが嬉しくて

胸がキュッと締め付けられる。

「……………こんばんは」

「うん……………あ、中においでよ？」

先生は、右手の親指を背後に向けた。

「ハイ」

診療室のドアから中に入る。

先生の後ろ姿を懐かしく感じながら、ミーティングルームに向かう。

「……………あの、今日は、仲村さんは……………」

「ああ、今、駅前の銀行のＡＴＭに行ってるよ。すぐ戻ると思う。」

「そうですか」

「ん？仲村に何か用事？」

「あ、ハイ、あの、この前、問題集を届けてく下さったので、お礼を言おうと思ったんです。」

「ああ、ハハッ、そっか。」

先生は少し笑いながら、ミーティングルームのドアを開け、私を中へ促す。

「どうぞ」

「失礼します」

久しぶりに入った、クリニックのミーティングルーム。

長机も椅子も、ホワイトボードも、特に何も変わっていない。

持っていた鞆を、いつも座る場所に置くと、松山先生が私のすぐ横

に立った。

私の方を向いて。

思わず、先生の顔を見上げる。

本当に、背が高い。

先生は真っ直ぐに、私を見ている。

ドキン・・・

「きいちゃん」

「ー・・・はい」

先生・・・？

「勉強を始める前に、謝つとく。」

「え」

ドキン・・・ドキン・・・

そんなに見つめられると・・・目が・・・逸らせない・・・

「本来なら、大人である僕の方から、きいちゃんに連絡すべきだったのに、結果的に、きいちゃんにさせるようなカタチになってしまつて、本当にごめん。」

「ー・・・いえ、そんな」

あまりに見つめられて、思わず下を向く。

あ・・・、メガネがズリ落ちてきた・・・

「あの日、きいちゃんに変なところを見せてしまったことも、悪かったと思ってる。」

「・・・上原先生との・・・ことだ・・・」

「・・・」

「仲村から・・・聞いた？」

「・・・」

「僕と・・・上原さんのこと・・・」

「・・・」

先生の顔を見られないまま、コクコクと、2回頷いた。

メガネが、さらに、ズリ落ちる・・・

「そっか・・・。」

先生は、ため息混じりに言った。

「・・・」

何を言えばいいのかわからない。

「どうして、メールくれる気になったの？」

私の顔を覗き込むように、先生は尋ねる。

「あ・・・、仲村さんに、松山先生が待ってるって・・・言われて」

「ああ・・・ハハッ」

「す、すねてるのは、ガキのすることだって言われて・・・」

「・・・」

「私っ」

――！！

先生が、私の右腕を掴んで、自分の方へ引き寄せた。
カシャンツと音を立てて、私のメガネは床に落ちる。

視界がぼやける。

クリニックの強烈なおいが鼻を抜ける。

先生のシャツとネクタイが、左の頬に当たる。

目の前に広がる先生の白衣と、その襟元。

先生の力強い腕の感触を、肩と背中に感じる。

先生の鼓動が全身に伝わる。

それは

ドキンドキンと強く波打つ、私の鼓動と重なる。

「……………」

「会いたかった」

先生の声は

今までにないほど近く

今までにないほど低い音で

耳元に囁かれる。

何が・・・起こってるんだろう・・・

「この3週間、きいちゃんに会いたくてたまらなかった」

「あの」

先生？

「会えないことで気づいたんだ」

「・・・」

「僕はきいちゃんに惹かれてる」

「・・・先生

「どうしようもなく・・・惹かれてる」

「・・・せんせ」

どうしよう

私・・・

床に落ちたメガネが、ぼんやりと視界に入る。

「あの私・・・」

メガネを拾おうと、先生から少し離れようとする。

でも

先生はグッと、両腕を掴む。

メガネが 取れない

「あの・・・先生、私、メガネがないと見えな」

「どこなら見える？」

「え？」

見上げても、先生の顔はぼやけてる

「どこまで近づけば・・・見える？」

それでも真っ直ぐに、私を見ているのはわかる

「・・・」

「どこ？」

先生の顔が・・・近づいてくる

ドキン・・・

「・・・」

「きいちゃん」

先生の顔が はっきりとクリアになる

「せん・・・せ」

先生が私の顔に手を添えた

先生の唇が

私の唇に触れた

あたたかい

どこか

心地よい

ドキン ドキンという胸の音が

唇を通して

先生に伝わっていく

閉じられた

先生の瞼

私もゆっくり

目を閉じた

生まれて初めてのキスは

強烈なクリニックのにおいと

先生の温もりに

満ちていた

先生がそつと唇を解放する

先生の吐息を肌で感じる

信じられない気持ちと

あふれそうな喜びと

どうしたらいいのかわからなくて

我に戻る

顔が 熱くなつていく

うつむいている私を

先生は優しく抱きしめた

「…………ごめん」

「…………」

「…………驚いた？」

「…………」

先生の腕の中で、コクコクと頷くことしかできない

「最初にきいちゃんと勉強する時に、二人でいることは世間的にま
ずいとか言っておいて…………結局は一番まずいことになってる…………

」

「…………」

耳元で、先生は続けた。

「きいちゃん…………」

「…………はい」

やっと、小さく声が出た。

「間もなく三十路になるうとしてる僕が…………、高校生のきいちゃんにこんなこと…………本当はしちやいけないんだろうけど」

先生の胸の中も、ドキドキしてるのが聞こえる。

「…………僕のそばにいてくれる？」

ドクツ…………

ああ

好きな人と

気持ちを通じ合う瞬間で

こんななんだ

緊張と不安ばかりの鼓動が

安心と希望の鼓動に変わっていく

右手でキュッと、先生の背中の白衣を掴む

先生の胸で、コクンと頷く

抱きしめる腕に力を込めて

先生が言った

「大切にする」

会えない先生。

「 $-3a^2 - 4ab - 8 < 0$ だから、 $3a^2 + 4ab \cdots$ これが、 a に関わらず常に成り立つ $\cdots a$ に関する二次方程式が解を $\cdots$ 」

「 $\cdots$ だから、方程式の $\cdots (4ab)^2 - 4 \cdots$ 」

今日は、白衣にネクタイ姿のまま、勉強を教える先生。

先生の説明を耳で聞きながら、先生が持つペンシルの先を目で追う。いつもと変わらない、先生との勉強。

ついさっきまで、その腕に抱きしめられていたことが、まだ信じられない。

コンコン♪

ノック音がして、仲村さんが入って来た。

『ういっす』

「あー、お疲れ。遅かったな」

先生がミーティングルームの壁時計を見てから、仲村さんに言った。

『なんか知らないけど、ATM混んでたんすよ。』

「そーか。」

先生は、開いたテキストに目を向けたまま答えた。

『ういっす』

仲村さんは私にも声をかけた。

「こんにちは。」

『久しぶりに来たね。』

「はい、あの、この前は、ありがとうございました。」

『ん？』

「あの、問題集・・・届けてもらって」

『ああ、いいえいいえ』

そう言うと、仲村さんは持っていた缶コーヒーとミルクティーを机の真ん中に置いた。

そしてそのまま、私と先生を交互に見る。

『で。どうなつたんすか？？』

え？

仲村さんはニヤニヤしている。

先生はペンシルを止め、仲村さんを見上げる。

「・・・知りたい？」

無表情で、先生が言う。

『はいっ』

満面の笑みで、仲村さんは答える。

二人の会話を、ただ黙って見ている私。

先生が、そのアヒル口で笑顔を作る。

「付き合っていこうと思う。」

仲村さんが、笑ったまま目を見開いた。

『マジっすか!?!』

「うん。ね、きいちゃん。」

先生が、優しく微笑む。

「・・・へっ?」

『あっはははっ! まだ動揺してんじゃんっ高校生っ!』
仲村さんが指を差して笑う。

「あ・・・、だって」

これが動揺せずにいられますかって・・・

『まあ、はつきり言って俺のおかげだよなあ』
顔が熱くなっていく。

「仲村」

ガタンッ

先生が立ち上がり、仲村さんに詰め寄る。

183cmの松山先生は、仲村さんよりも、頭一つ分背が高い。
仲村さんはニヤニヤしながら後ずさる。

『な、なんすかつ』

「絶っっ対、しゃべるなよ?」

『わーかってますよお』

うわあ・・・松山先生って、こういう一面もあるんだ・・・
すごい威圧感だな・・・

『じゃゝ失礼しまゝす。ご・ゆっくりいゝ』
パタン

仲村さんは、ニヤニヤしたまま出て行った。

ハタと、先生と目が合う。

「あ・・・は、ハハハハハハ・・・」

とりあえず笑ってみる。

松山先生も微笑んでくれる。

先生が、向いの椅子に座り直す。

「きいちゃん」

ペンシルを両手で遊びながら、先生が私を見る。

「・・・はい」

「きいちゃんと付き合っていく以上、どうしてもこれだけはやって
おきたいんだけど・・・」

「はい？」

「きいちゃんのご両親に、きちんとご挨拶したいんだ。」

えっ

「えっ？」

「あ・・・ハハッ、驚くよね、やっぱり」

先生は、うんうんと頷きながら続ける。

「でもね、僕と付き合っっているのは、きいちゃんが同い年ぐらい
の男と付き合うのとは、ちょっと事情が違うから・・・、それは、
わかるよね？」

先生・・・

「・・・はい」

「うん・・・。何も話さずに、年の離れた僕と付き合っていると知
ったら、ご両親も心配なさると思うんだ。」

「・・・」

「きいちゃんを、大切にするっていう意味でも、ご両親にはきちんと、ご挨拶しておきたいと思う。」

私のために、そこまで・・・

「・・・いいかな？」

「はい・・・わかりました。」

「うん」

「あ、」

「ん？」

「・・・ありがとうございます」

「ススツ・・・うん」

鼻をススツと鳴らして笑う。

その優しい笑顔が好き。

「じゃあ、続けよっか」

「あ、ハイ」

「えーとどこまで言っただけな・・・」

この先生のそばにいたい。

いつまでも

ずっと一緒にいたい。

『やったあー！！きい！おめでとーう！！』

電話越しに、せんちゃんが喜びの声を上げた。

「うん・・・、ありがと」

クリニックからの帰り道、最寄駅を出てすぐに、せんちゃんに電話した。

『やっぱりね。松山センス、きいに惚れてたんじゃない』

「あ・・・、そう・・・かな、へへ」

『フツ、なあゝに照れてんのようっ、ム力つく。』

「えっ」

『ははっウソウソ、ホントによかったじゃない、きい』

「うん・・・」

『で、どうだった？』

「なにが？」

『初めてのキス』

「ちよつ、もうっ」

『なによ、どうだったの？』

「ど、どうだったって・・・なんか突然で、よく覚えてなくて・・・」

「

『あー、まあ、そんなもんよ。これから回を重ねてさあ』

「はっ？回を重ねるっ？？」

『そりゃそうでしょ。付き合っっていくんなら』

「ええー・・・っ」

『なに情けない声出してんの。大丈夫よ、相手は大人だから。あんなが心配しなくても』

「うっ・・・」

『それよりよかったね、誕生日』

「え？」

『あんた来月、誕生日じゃない。』

「うん？」

『先生と二人で過ごすのよ！デート！』

「デート？」

『当たり前でしょ！恋人なんだし。ちよつと待ってよ、12月14

日は・・・おっ！今年は土曜日だよ！』

「うそっ？」

『ホント！土曜日はいつも勉強の日でしょ？デートできるチャンスよ』

「ええーっ、そうかなあゝへへ」

『ああーいいなあ、楽しそう。』

「・・・せんちゃんのおかげだよ」

『・・・ふふ、そーね。私のおかげね』

ん？聞いたことあるセリフだ

「・・・ありがとう、せんちゃん」

『ふふん、いいのよ。私も嬉しい。』

「・・・あ、じゃあ、今度、誕生日の相談乗ってくれる？」

『わかった。考えとくね。』

せんちゃんがいたから、松山先生への想いを大事にできた。

せんちゃんが背中を押してくれた。

感謝してるよ、せんちゃん。

本当だよ。

週明けの月曜日、放課後の教室で、早速せんちゃんと誕生日について相談していた。

「センセは、きいの誕生日のこと知ってるのかしらね？」

パックのオレンジジュースを飲みながら、せんちゃんが言った。

「知らないと思う。」

「でもさ、カルテとかに、生年月日って載ってるんじゃないの？」

「カルテって、先生に患者として診てもらったのは9月だよ。」

「あ、そっか。それもそうね。」

「見たとしても、覚えてないんじゃないかな。」

「じゃあ、誕生日ですって言わなきゃね。」

「んー……」

「何？」

「私……、先生にいつも、何かしてもらってばかりなんだよね。」

「それが？ダメなの？」

「ううん、嬉しいけど、今回は、私の方から先生に何かしたいなって思っ」

「は？だってあなたの誕生日なんだよ？」

「そうなんだけど、誕生日はデートの口実で、ギリギリまで内緒にしようかなって」

「それでどうすんの？それじゃプレゼントもらえないじゃない」

「いいの、プレゼントとかはどうでも。ただ、先生と一緒にいらいい……っていうか」

「ふふふうん」

せんちゃんが目を細める。

「……ダメかな」

「いいんじゃない、それも。私ら、社会人と違ってお金があるわけじゃないから、何かしようと思っ」ても、なかなかね。」

「うん。でも、やっぱりご飯くらい食べに行きたいから、私のお小遣いの許容範囲でどこかのお店を予約して……」

ニコニコしながら、せんちゃんが頷いている。

「ん？」

「私に相談するまでもないじゃない。きい、なんだか急に大人になったね。」

「え、そ、そうかな……」

「うん。そういうことなら、お店、いくつか知ってるから紹介しようか？」

「ホントに!？」

「もちろん。誕生日だし、やっぱり洋食が素敵よね・・・」

せんちゃんは、携帯を開いてお店検索を始める。

「ありがと、せんちゃん。」

「いいえ」。あ、ここなんかどう？ 駅から10分のビストロ・アンジエっていう・・・」

せんちゃんに教えてもらったお店に、12月14日の20時に予約を入れた。

リーズナブルなフレンチレストランで、私のお小遣いでもなんとかいけそうだった。

自分でお店の予約をしたのなんて初めてで、ちよつと緊張した。

先生、喜んでくれるかな・・・

駅までの帰り道は、もうすっかり暗くなっていた。

「12月ともなると、暗くなるのが早くて、なんか焦るわよね。」

「うん、しかも最近、朝晩寒くなったよねー」

「今週も、土曜日は先生のところ行くの？」

「ううん、今度の土曜日は忙しいんだって。」

「そうなの？ ってことは、次会えるのは誕生日当日ってこと？」

「うん」

「えー。せつかく付き合うことになったのに、2週間近くも会えないんだー。なんか寂しくない？」

「んー、でも、松山先生は仕事してるし、忙しいから」

「はあ、聞き分けがいいんだから。年離れてるんだから、思いっきり甘えたらいいのに」

「んー・・・へへ、いいのいいの」

それから2週間は、入試に向けて、またひたすら頑張った。
松山先生と付き合うことになっても、やっぱり私は受験生。勉強を疎かにはできないし、先生に、怠けていると思われたくない。
絶対に合格して、いつか先生と一緒に働くんだけ。
好きな人ができる、いろんな目標ができたり、楽しみができる。
恋するって、いいな。

会えなくても、松山先生はメールをくれる。

『きいちゃん、元気かな?』

『寒くなってきたけど、風邪引いてないかな?』

『勉強でわからないことがあったら、いつでも電話しておいで』

当たり前のように送られてくるメールが、ただ嬉しい。

頑張ろうって思える。

「クリニックは帰り道にあるんだから、会えばいいじゃない!」
せんちゃん、なかなか会おうとしない私たちに、ちよつとイライラしている。

「私なら我慢できない。絶対乗り込むのにつ」

「ダメだよ、先生は仕事だし」

「はあ〜?」

「ふふつ、いいのいいの」

12月14日。

私は18歳になった。

初めての、“彼氏”と過ごす誕生日。

昨日の夜は、ワクワクして眠れなかった。

先生から届いた寝る前のメールを、何度も読み返した。

『きいちゃん、明日は久しぶりに会えるね。楽しみにしてるよ。1
8時半に待ってる。』

いつもなら、クリニックには制服で出掛けるけれど、今日はおしゃれをした。

せんちゃんみたいにセンスは良くないけど、私なりの精一杯のおしゃれ。

ブラウスにスカート、カーディガン、グレーのコートを着た。

髪も、下ろしてみた。

先生、どんな顔するかなあ・・・

最寄駅を18時に出発する電車に乗った。

10分ほど経った頃、先生からのメールの着信。

『きいちゃん、今どこ？ごめん、今からクリニックで急なミーティ

ングが入って、今日は一緒に勉強出来そうもないんだ。本当にごめん。また連絡するからね。』

え．．．うそ．．．

今日は中止．．．？

もう、電車に乗っちゃったし．．．

今日は私の．．．

あ．．．、そっか、先生は知らないんだった．．．

どうしよう．．．

どうしたらいいのかわからず、クリニックのあるビルの前へ来てしまった。

クリニックのある階を見上げると、ブラインド越しのミーティングルームの光が見える。

先生、会議中かあ．．．

お店も予約してあるし．．．

待ってみようかな．．．

ビルの入口に立って、待つことにした。

何もない日なら、帰っていたかもしれない。
でも、今日は誕生日。

松山先生に、会いたい。

駅の方に体を向けて、ビルの壁に背中をつけて待つ。

駅前の飲食店のネオンが輝き、お店の窓には楽しそうに食事する人たちが見える。

12月の夜の風は冷たい。
体が徐々に冷えてくる。

寒いなー……

やっぱり……誕生日って……言えбаが良かったかな……

1時間。ミーティングルームの明かりは消えない。

もうすぐ終わるかもと期待を弾ませ、2時間が経つ。
携帯電話で時間を見ようとすると、突然、着信音が鳴った。

知らない番号……

「はい、もしもし」

『あ、もしもし、水嶋様でいらっしゃいますでしょうか？』

あっ！

そうだった、お店の予約のキャンセルしてなかったあ……

「あ、はい、すみません、水嶋です」

『ビストロ・アンジェでございますが・・・』

「はい、本当にすみませんっ、実は・・・」

結局、お店もキャンセル・・・。

はああー・・・

何やってるんだろう私・・・

寒いー・・・

携帯電話で時間を見ると、20時半を回っていた。

ビルを見上げると、ミーティングルームの明かりは消えている。

あれ、終わったのかな・・・

すると、ビルから見覚えのある女性が出てきた。

ピュアホワイトのロングコート、ヒールの高い綺麗な靴。

コートに合わせたおしゃれなマフラー。

うっ、上原先生っ・・・

思わず、顔を背けた。

「あら、あなた・・・」

遅かった。

恐る恐る振り向いてみる。

「あ、やっぱり！真一の患者さん！」

相変わらず“真一”って呼んでるんだ・・・

今は患者じゃないし

「・・・こんばんは」

「どうなさったの？こんなところで。受付はとっくの昔に終わってるけど？」

高飛車な笑顔で話しかけてくる。

嫌だな・・・この人

「いえ・・・別に」

「松山先生にご用かしら？」

「・・・」

「残念だけど、真一ならもう出たわよ？」

「え？」

「急な会議だったんだけど、そのあとみんなで飲みに行こうってことになって。ビルの裏でタクシー拾って」

ビルの裏・・・

「私もこれから向かうところなの。よかったら何か伝えましょうか？」

勝ち誇ったような、上から目線。

「・・・いいえ」

「あらそう。それじゃあ。もう遅いから、気をつけてお帰りになってね。」

「・・・」

上原先生は、ヒールをコツコツ鳴らして、大通りの方へ歩いて行った。

「はあ・・・」

暗くなればなるほど、吐く息が白くなっていく。

先生に、会いたかった。

誕生日だし。

2週間くらい、会ってないし。

誕生日じゃなくてもやっぱり、会いたかった。

素直に言えばよかったな。

何やってんだろ・・・

なんか、ばかみたい・・・

帰ろう・・・

「お？水嶋さん？」

振り返ると、ブルゾンにジーンズを履いた仲村さんが立っていた。

「あ・・・」

「え？なにやってんの、君？」

松山先生以外の人には、よく会うなあ・・・

「あ、こんばんは」

「いや、こんばんはって・・・」

「じゃあ」

お辞儀をして帰ろうとする。

「え、いや、ちょっと、待って」

仲村さんが駆け寄って、私の腕を掴んだ。

「・・・」

「どうしたんだよ？松山先生なら飲みに行つたよ？」

「知ってます。」

「は？」

「上原先生に聞きました。」

「なんだよ、じゃあなんで？今日は勉強の日？松山先生、君がここに
いること知ってたの？」

「いえ・・・」

「はあ？」

「・・・仲村さんは、行かないんですか？飲み・・・」

「行くわけねーじゃん、上原いただろ？」

「あー」

松山先生は、行かなくやいけなかったのかな・・・

付き合い・・・ってやつかな・・・

「なあ、なんでこんなとにいるんだよ？」

「・・・」

仲村さんとはよく、こうして一緒になるのになあ・・・

「・・・今日、なんかあんの？」

「え？」

「いや、私服だからさ。いつもは制服で来るよな？」

「・・・・・・・・」

気づいてくれたんだ

「おっ、おいおい、どうした??」

「・・・・・・・・」

どうしよう

なんでだろう

涙が出てきた

「と、とにかく行こう。ここ寒いし」

仲村さんが、背中を軽く押した。

「・・・・・・・・」

「家はどこだよ？」

「す、住吉町です・・・」

「ああ、住吉なー、わかったわかった。送ってやるから泣くなって
そう言っと、仲村さんは頭をポンポンと擦った。

松山先生に会いたかったのに

なんで

仲村さんなんだろう

この人はなんでいつも

近くにいるんだろう

先生の彼女。

土曜の夜の、いささか混み合った国道を、仲村さんの運転する車に揺られて走っていく。

仲村さんの車は、黒の国産の軽自動車で、松山先生の四駆車に乗ったことがあるせいか、やたら地面が近く感じた。

後部座席はMDやCDのケースが散乱していて、いつもクリニックで着ている作業着が脱ぎ捨ててある。

松山先生の車に乗った時と同じで、静かに洋楽が流れていた。窓の外を眺める私に、仲村さんが話しかける。

「なあ、高校生、腹減ってない？」

「・・・」

「なんか、食いに行く？」

「・・・そうですね」

「そんな暗い顔すんなよ、何食いたい？」

「なんでもいいです」

「なんでもいいって・・・じゃあ、ファミレスにでも寄るか？なんでもあるぞ」

「・・・はい」

仲村さんがこんなに気を遣ってくれているのに、どうしてもそのテンションに合わせられない。

気分が、晴れない。

「で、今日は、本当は松山先生とデートだったわけ？」

「・・・いえ、いつもの、勉強だったんですけど・・・」

「・・・けど？」

「・・・」

「ん？」

「・・・今日、誕生日なんです。」

「はあ!？」

驚いた顔で、仲村さんは一瞬私を見た。

「・・・」

「マジかよ・・・」

「・・・」

「え、じゃあ、なに、あの人、誕生日なのにすっぱかし？」

「あ、いえ違うんです。」

「は？」

「松山先生は、私の誕生日だってこと知らないんです。」

「なんで？」

「・・・いつも、先生にはいろんなことしてもらってるから、今日は自分でお店とか予約して、誕生日を理由に、先生と一緒に過ごしてもらおうと・・・思って」

「はあああ〜？」

呆れたような反応に、ため息が混じっている。

「・・・まさか、今日に限って、会議になっちゃうなんて思ってた」

「あー・・・まあ、今日はちょっと急だったからね。あ、それで、会議終わるの待ってたわけか」

「・・・はい」

苦笑いで答えてみる。

「そっかあー・・・、あの人も飲み会なんか行かなきゃいいのになあ」

「・・・こういうこともあるのに、ちょっと、計画性が足りなかったです。」

「いや、君の思惑を聞いてると、気持ちはわからなくもないけど・・・」

信号停車して、仲村さんはハンドルに顎を寄せ、おもむろに上目になる。

「・・・誕生日かあ・・・。」

「・・・」

Lost and insecure, you found
me・・・♪

停車で車の音が小さくなり、洋楽の音のはっきりと耳に聴こえてくる。

あれ・・・、この曲・・・

松山先生の車でも同じ曲が流れてたような・・・

「・・・この曲・・・」

「ん？」

仲村さんが横目で私を見る。

「これ、なんていう曲ですか？」

「あ、これ？『The FRAY』の、you found me。
知ってるの？」

「あ・・・、確か、松山先生の車でも流れてた気がして・・・」

「おおー。さすがだねえ。これ、あの人のCDだもん。」

「え？」

「借りてんの。」

「あ、そうだったんですか。」

「気に入ったなら貸そうか？」

再び車を走らせながら、ボリュームを上げてくれる。

「でもこれ、先生の・・・」

「うん、だからさ、君から返しといてよ。君に貸したって俺から言
つとくからさ」

「い、いいんですか・・・」

そんなことして

「いいっていいって。君、もうあの人の彼女なんだからさあ。あの人のもんは君のもんだ。」

ええーっ

「それより、どうする？今から先生んとこ連れて行ってやるうか？どこで飲んでるか知ってるし。」

「い、いえそんな、いいんです」

「なんで？だって誕生日だろ？今・・・9時半過ぎだし、まだ間に合うよ」

デジタル時計を確認しながら仲村さんは言う。

「会いたいなら、遠慮せずに会えばいいんだって。」

「・・・」

「何をそんなに迷ってるの？君、彼女じゃん。」

「・・・」

今日は会えないと言われたのに、押しかけて行くなんて

迷惑じゃないだろうか

・
・
・ The early morning, the city .

And I've been . . . for years
and years and . . .
And you never left me no mes
sages

You never sent . . . no letters

You got some . . . nerve taking
all I want . . . ♪

バラードのクライマックスが、私に決断を迫っているように聞こえる。

「せっかくの誕生日を知らなかった挙句、会えなかったってわかったら、松山先生だって残念だと思うけどね」

そう言つて、仲村さんが微笑んだ。

その表情に、勇気をもらえた気がした。

先生に . . . 会いたい。

「 . . . はい。じゃあ . . . 行きます。」

「おっ！よく言つた！よし！任せとけ」

仲村さんは少しスピードを上げて、私の家路とは逆方向にハンドルを切つた。

「あ、でも、近くまでいいです。付き合つてること、他の人たちに知られるとマズイから . . . 」

「わーかつてるわーかつてるって」

Lost and insecure, you found
. . . , you found . . .

Lying on the floor, surround
ed, . . .

Why'd you have to wait?

Where were you? Where . . .

Just a little late, you found
d . . . , you found me . . .

Why'd you have to wait, to f

ound . . . , to found me? . . .

フェードアウトしていくピアノの音に、先生を想う。

先生に、会えるんだ . . .

「あれ？なんでこんなところで止まるんですか？」

仲村さんは、市街地から数分離れたタワーマンシヨンの前に車を止めた。

「到着。松山宅よ。」

「はっ!？」

「あの人の住むマンシヨン。」

ええっ

「ちよっ、なんでですかっ？飲んでるお店の近くに行くんじゃ . . .」

「だって、それだと他のドクターとか助手に見られちゃうかもしれないだろ？」

「だけど . . .」

「いいからいいから。待つてな。電話してきてやる。」

「あつ、ちよつ・・・」

仲村さんはポケットから携帯電話を取り出して、運転席を出た。車の背後で電話を掛けているが、声は届いてこない。

「はあ・・・」

助手席に座ったまま、ため息をつく。

暗い夜空に、無数の部屋の光を放ちながらそびえ立つタワーマンシヨン。

高級感溢れるエントランス。

松山先生つて、やっぱりお金持ちなんだ・・・。

なんか・・・、改めて思うと、すごい人と付き合うことになっちゃったのかも。

仲村さんが運転席に戻ってきた。

「松山先生、今からタクシーで帰って来るってさ。良かったね。」

「・・・ホントですか」

「うん。誕生日で、クリニックの前で君が待ってたって話しいたから。」

「・・・すみません、何から何まで・・・。」

結局また、お世話になってしまった。

「多分、15分ぐらいだと思うよ。」

「はい・・・」

「あ、そうだそうだ」

仲村さんは、後部座席に手を回し、何やらごそそと取り出す。

「えーと・・・あ、はい、これ。」

手渡されたのは、ジャケットに『The FRAY』と書かれたC

Dアルバム。

「あ、本当にいいんですか？」

「うん。でもま、今から本人に聞けばいい話じゃん。」

「あ、そっか」

オーディオからCDディスクを取り出しながら、仲村さんは言う。

「水嶋さんさ、もつとわがままになってもいいんじゃない？」

「え？」

「君はまだ高校生だし、無理して大人のあの人に合わせることはないんだって。」

「・・・」

「そりゃあ好きな人なんだし、その人のためにしてあげたい、その人に合わせていきたいって気持ちはわかるけど、年の差だってあるし、生活スタイルも全く違うわけで・・・」

「・・・」

「つまりさ、無理するべきは、松山先生の方なんだってこと。」

「そんな、無理なんてしてほしくないです。」

「いや、そうじゃなくて、松山先生は大人だから、無理するにめちゃんと限度がわかってるわけよ。」

「限度・・・」

「うん。君と付き合っていくって決めた以上、多少のリスクとかもちゃんと踏まえてのことだろうし、君のわがまま聞くぐらいの余裕は充分あるはずだよ。」

「・・・」

「自分は無理してでも、君には無理してほしくないと思ってると思うよ。」

「・・・」

「だから、もつと会いに行けばいいんだって、な？」

「・・・はい」

仲村さんは本当に、松山先生のことをよくわかってるんだな・・・

「あのう・・・」

「ん？」

「仲村さんは彼女いないんですか？」

素朴な疑問だった、前から。

「彼女いたら、毎週毎週君たち二人に付き合ってもらえると思う？」

「あ・・・」

確かに

「半年ぐらい前に別れてね、最近は一人を楽しんでるってところかな。」

「そうですか」

“年下は好きじゃない”と言ってはいたけど、女の子に対する気遣いとか、女の子の気持ちを理解しているようなところがあって、決してモテないタイプではないと思う。

「どんな人と付き合ってたんですか？」

興味本位で聞いてみる。

「ん？どんなってまあ・・・君よりは大人で美人だったかな」
横目で見ながらにやりと笑う。

多少ムツときたが、いかにも年下を好まない言い草には慣れつつあった。

「そーですか」

「あ、ム力ついた？」

「別に」

からかうように続ける。

「水嶋さんもさ、俺みたいなタイプはダメだろ？松山先生とは正反対だもんねえ」

「べ、別にダメとか・・・」

何て答えたらいいのかわからない。

「ん？だって、水嶋さんから見た俺と松山先生の共通点って言うたら、年上ってことぐらいのもんだろ？」

「はあ・・・」

「ハハツ。はあつて。正直だねえ。」

「・・・」

「・・・でもさ、最近、君と接してる事が多くなって思ったけど、君みたいなタイプの世話をするのは、意外と嫌じゃないなーって」

「え？」

仲村さんは、さっきとは違う雰囲気的笑顔を見せながら話す。

「君と会うまではさ、俺にとって年下なんて、面倒くさい以外のなものでもなかったんだけど、なんとなく、放つとけない衝動に駆られるっていうかね。」

「・・・」

なぜだか、動揺してしまう。

仲村さんの、どことなく優しさを秘めたような、そういう台詞には慣れていない。

「妹ができたみたいなかんじなのかな、俺、一人っ子だし」

そう言つて、ニツと笑った。

「あ、私も一人っ子」

反射的に、微笑み返す。

「おっ！マジ？」

「ハイ」

「共通点、発見だねえ」

「松山先生は・・・やっぱり長男なんですかね」

“真一”だし。

「あの人、三男だよ。」

「えっ!？」

「君、あの人のこと全然知らないねえ」

「うそ、だって、“真一”ですよね？長男っぽい」

「三兄弟の末っ子。兄弟みんな、名前に“一”が付くらしいよ。」

「へえ・・・」

意外な真実。

「しかも、親も兄弟もみんなドクター。お医者さん一家だよ。」

「ええ、すごい・・・」

「医者の間じゃあんまり珍しくもないけど、あの人だけは、歯科医なんだってさ。」

「だけは？」

「うん。父親も兄貴も大学病院で働く外科医。それが嫌で、自分は歯科医になっただって言ってた。」

「へえ・・・」

「まあ、いろいろあるんだよ。しかもその兄貴の一人が・・・」

「・・・いや、なんでもない」

仲村さんは一瞬考えて、言つのを止めた。

「はっ？」

「悪い、なんでもなかった」

「えっ！？ちよつ、気になりますっ」

「いやいや、忘れて」

「ええーっ」

声を上げた瞬間、コンコンと助手席の窓をノックする人影。

振り向くと、黒いコートを着た松山先生が覗いていた。

目が合う。

松山先生が、私に微笑む。

「先生・・・」

ドアを開けて外に出る。

暖かい車内から、冷える外へ出たせいで、急激にメガネが曇る。

「きいちゃん」

優しい笑顔で、私の頭をそつと撫でた。

そのまま私を手前に引き、車内に顔を覗かせた。

「悪かったな、仲村」

「いえいえ」

車内で籠った声が聞こえてくる。

『どうしますか？俺、少し時間潰してきましようか？』

「大丈夫か？」

『いいっすよ。彼女、俺が送りますよ。』

「ああ、じゃあ、30分だけ頼む。」

『了解です』

松山先生が助手席のドアを閉めると、仲村さんの車はゆっくりと走って行った。

車が見えなくなると、先生が私の方を振り向いた。

どうしよう

思わず、俯いてしまう。

慌ててメガネを外して、袖でレンズを拭く。

先生が、ゆっくりと近づいてくる。

「会うのは久しぶりだね、きいちゃん」

メガネを掛けて見上げると、黒いコートの襟の上に、優しい眼差しで私を見下ろす先生の顔。

「・・・先生」

松山先生は、持っていたビジネス鞆を地面に置いた。

微笑みながら、両腕を開いて差出し、“おいで”と合図した。

もう、限界だった。

会いたかった気持ちが一気に込み上げる。

躊躇いもなく、先生の胸に飛び込んだ。

我ながら大胆だと思った。

周りに人がいなかったから良かったものの。

先生は、私の背中に腕を回し、幾分きつめに抱きしめてくれる。

そして耳元で囁く。

「お誕生日おめでとう」

嬉しくて、涙が出る。

先生のコートを汚さないように、少し、顔を離す。

右の頬に、先生の手が触れる。

先生は少し屈んで、俯いた私の顔を掬い上げるように

そっとキスをした。

アルコールの香りが混じる先生の吐息に酔うかのように

静かに目を閉じる。

頭の中には、車内で聴いた y o u f o u n d m e が反復されていった。

タワーマンションのエントランス前。

いつ、誰が来てもおかしくない状況なのに、初めてのキスの時より、少しだけ長く、先生の唇と重なっていた。

先生の、高い鼻が頬に当たる。

先生のアヒルみたいな唇は、温かくて、柔らかい。

このままずっと、時間が止まればいいのに。

先生に促されるままマンションのエントランスに入ると、中はまるでホテルのロビーのような造りになっていて、フロントこそないものの、待合用のソファがいくつも並べてあった。端の方に二人で座る。

先生は膝に腕をついて、前屈みに座る。

少し俯き加減で、先生は言った。

「本当は、部屋まで連れて行きたいんだけど・・・何もないまま帰す自信がないから。」

「・・・え」

ドキン・・・

それっ・・・て・・・

意味を理解すると同時に、みるみる顔が熱くなっていくのがわかる。

「あ、それと」

先生は、ビジネス鞆からミニブーケを取り出した。

「はい、これ」

鞆の中で、少し押しつぶされたような、やや形の悪いブーケ。

「あ・・・ありがとうございます」

「ちよつと・・・潰れちゃったね。仲村から電話もらって、24時間営業のスーパーで買ったんだ。花屋さんはもう、どこも閉まってるね。」

苦笑いを浮かべる先生。

咲いたばかりのピンクの薔薇が、かすみ草と一緒に20cmほどにアレンジしてある。

「・・・言ってくれたら良かったのに・・・誕生日。」

先生は、優しく笑う。

「・・・はい・・・」

こんなことなら、素直に言えば良かったと後悔していた。

「僕のために、レストランを予約してくれてたんだって？」

「・・・はい」

「ススッ・・・是非行きたかったなあ」

「・・・」

「ありがとうね、きいちゃん」

優しい、笑顔。

「いえ、こちらこそ・・・ありがとうございました」

「いや、僕はまだ何もしてないよ。それより、明日、予定あるかな？」

「え？」

「明日、日曜日だし、ちゃんとデートしよう。」

「・・・」

デート・・・

「ご両親にも、ご挨拶に行くよ。」

真っ直ぐに、私を見つめる先生。

「誕生日も、ちゃんと祝おう。」

先生・・・

「・・・はい」

胸がジン・・・ときて、涙声になる。

先生が腕を伸ばし、私の頭を自分の肩に寄せた。

当たり前になった、先生のとなり。

私は、松山先生の彼女なんだ。

「お店、もう一度予約しておいてくれる？」

「・・・はい」

「うん」

翌日、松山先生は、スーツにネクタイ姿で私の家にやって来た。

昨日の夜、事前に両親に先生のことを話した時は、二人ともかなり驚いていた。

（特にお父さんが）

でも、松山先生本人に会って、先生の人柄、立派な歯科医であることを知った両親はえらく喜んで、『娘をよろしくお願いします』なんて言っていた。

これで松山先生は正式に、私の彼になった。
まだ、大っぴらには言えないけど。

すごく、幸せな気分。

これからずっと、先生と一緒にいられる。

これからずっと。

こんな幸せがずっと続くと、思ってた。

先生の空間。

「ええ〜っ！じゃあ、昨日ちゃんとした誕生日デートしたんだ」

吐く息が白くなる朝の通学路で、せんちゃんが手袋に包まれた手を擦り合せながら言った。

「うん」

「いいなあ〜。楽しかった？」

「うん。楽しかった。大きな花束ももらったの。でも、食事代は結局、先生が払ったんだ。なんだか申し訳なくて・・・」

「バカね、きい。そんなの当たり前じゃない。」

ため息混じりにせんちゃんが言う。

「あんたの誕生日だもん。松山先生がもてなして当然。先生の顔を立てる意味もあるのよ。だから、申し訳ないなんて思う必要なし。」

「そ、そうかな」

「そうよ。逆に、松山先生の誕生日の時に、きいが先生のために何かサプライズを準備したらいいんじゃない？」

「あ」

「ん？」

しまった

「私、先生の誕生日、知らない・・・」

「はあ・・・相変わらずマヌケねえ。あんたは先生のこと何にも知らないのね〜。」

「う・・・仲村さんにも同じこと言われた・・・」

「二人でいるときは一体どんな会話をしてんのよ。誕生日祝ってもらったなら、普通は相手の誕生日も聞くでしょうが。」

「は、はは・・・そうだよね。」

私ってば本当に何やってたんだろっ。

先生とのデートってだけで、もう舞い上がったちゃって、何を話してたかもあんまり覚えてない・・・なんて、せんちゃんに言ったらまた怒られそう。

「あ、あー、そうだ、せ、先生がね、クリスマス、先生の家でパーティーやろうかって」

「えっ！？パーティー??」

「うん・・・」

よかった、せんちゃんの顔が輝いてきた。

「私も行ってもいいの!？」

「うん。パーティーって言っても、先生と仲村さんだけど、泉さんも誘ってみたらって、先生が」

「ホントに？」

「うん、大貴くんと一緒においでよ？」

「大貴はクリスマスはバイトなの。だから、何の予定もなくってつまんないな〜って思ってたのよっ」

「そうなの？」

「うんっ！やったー、楽しみ〜」

「よかった、せんちゃんと一緒に。私、まだ、先生のお部屋、入ったことないから・・・」

「あ、そっか。すごい高級マンションなんでしょ？」

「うん。すごいよ。エントランスも広くて、ホテルみたいなの」

「うわあ〜いいなあ。さすが歯科医！お金持ち〜。きい羨ましいー」
バシッ

せんちゃんが腕を叩いた。

痛いよ・・・

松山先生はお医者さんで、お金持ち。

時々、私みたいな高校生が、あんなに素敵な人と付き合ってるって
やっぱり、なんだかちよつと不釣り合いなんじゃないかと、自信喪
失に陥ってしまう。

早く大人になりたいな。

先生と並んで歩いて、恥ずかしくない大人に。

12月24日。終業式。

「年明けに入試を控えた者は追い込み。推薦ですでに合格をもらっ
とるものは、冬休みだからと言って羽目を外しすぎんように。卒業
までは気を抜くなよ。」

迫じいの話と共に、2学期最後のホームルームが終わる。

それと同時に、教室は冬休みに浮かれる生徒の声で溢れ返る。

教室の窓から外を見ると、空には一面の灰色の雲。

日差しがない分、寒さを感じさせる。

「きい　きい　」

リズムミカルな口調でせんちゃんが来る。

「きい、数学の成績どうだった？」

「上がったよっ」

「よかったねえ〜！今日早速、松山センセに報告しなきゃね！」

「うんっ」

せんちゃんが鞆を抱えながら、窓の外を眺める。

「なんか、雪が降りそうだねー。それにしても、パーティーが22時からって、ちょっと遅くない？」

雪・・・降るといいな。

ホワイトクリスマス・・・

「仕方ないよ。先生も仲村さんも仕事だし。でも、昨日、先生からのメールで、20時以降の予約は入ってないから、早めに切り上げて帰ってくるって言ってた。」

「帰ってくる・・・」

せんちゃんが、ニヤニヤしている。

「な、なに？」

「なーんかその会話、夫婦みたいだねっ」

「えっ」

「だってー、家で待ってる奥さんに送るメールみたいじゃん」

「べ、別にそんなんじゃない・・・大体、先生の部屋に入るのも、今日が初めてだし」

「ふふん、嬉しいくせに」

肘で私を小突く。

嬉しい。

嬉しいけども・・・

「うつ・・・嬉しいけど、なんか、朝から緊張しちゃって。」

「大丈夫よ。私が付いてるから。っていうか、現役歯科医師の部屋ってどんなだろーっ！超楽しみ〜」

「やっぱり・・・。目的はソレね、せんちゃん」

「だって、私も今まで何人かの男と付き合っては来たけど、さすがにお医者さんはいなかったし〜。きいだって楽しみでしょっ」

確かに、どんな部屋で暮らしてるんだろっ・・・とか、いろいろ想像してた。

きつと、大人な雰囲気の部屋で、綺麗に片付いてて、家具とかいちいち高級感があって・・・みたいな？

クリスマスのイルミネーションで彩られた駅前を歩き、改札前で立ち止まる。

「じゃあ、私は一旦、自分ちに戻って、きいの家に行けばいいのよね？」

「うん。仲村さんが早めに仕事終わるから、20時過ぎに迎えに来てくれるって。」

「わかった。じゃ、あとでね。」

「うんっ」

改札を抜けて、せんちゃんとは逆方向のホームに上る。

携帯電話を開くと、着信メールあり。

松山先生からだ。

『きいちゃん、今日はなるべく早く帰るようにするからね。仲村と泉さんと、先に始めてていいよ。マンションの鍵は仲村に渡してるから。あとでね。』

携帯を見ながら、思わず微笑んでしまう。

“夫婦みたいだね”というせんちゃん言葉が反復される。

こういうの、傍から見たら、のろけてるとか、バカップルとかいうんだろうな。

でも、のろけてもいい。

バカでもいい。

松山先生と付き合ってる。

すごく楽しい。

楽しすぎて、怖いくらい。

「何分ぐらいかかるんですか？松山センセのマンションまで」
後部座席に座るせんちゃんが、ハンドルを握る仲村さんに聞いた。
「40分ぐらいかなあ。来るまでの道が少し混んでたしね。」
仲村さんは、ルームミラーでせんちゃんを見ながら答える。
「すみません、迎えに来てもらって。」

この車に乗るのは二度目だな・・・なんて思いながら、仲村さんに謝った。

助手席に座る私を横目で一瞬見ると、仲村さんはふっと笑った。

『いや。時間が遅いし、女の子二人で来させるのは危ないって、松山先生のお達しだからさ。』

「うわゝ紳士ゝ。大人の男はやっぱり違うなあー」

せんちゃんが後ろからしゃべる。

『泉さん・・・だっけ、君』

「はい。泉 舞子です。」

『舞子ちゃん。彼氏は？今日はデートとかしなかったの？』

舞子ちゃん・・・？

私を呼ぶ時は“高校生”としか言わないのに・・・

仲村さんも、せんちゃんみたいな力ワイイ子には弱いのかな。

ルームミラーでお互いの顔を見ながら話をする二人の会話を聞きながら、窓の外の景色を見る。

クリスマスモード一色の町が、キラキラと流れていく。

「彼氏はバイトで忙しくて、今日は何の予定もなかったんです。」

『そうなんだ。ちょうどよかったよ。俺さ、いつもこの二人の付き添い役でねゝ。クリスマスも一人見せつけられるのかと思うと、うんざりしてたんだよ・ねゝ』

語尾の“ねゝ”の時だけ私の方を見る。

せんちゃんは楽しそうに後ろで笑っている。

「み、見せつけてるつもりは・・・」

『あれ、自覚なし？やれやれ。恋は盲目とはよく言ったもんだ。君もあの人もね。』

「ゝゝゝ・・・スミマセン」

すっごい責められてる気分・・・

「でも、きいは仲村さんに感謝してるんですよ。松山先生との仲を取り持ってくれたし、きいの気持ちを酌んでくれる、心強い味方っていうか・・・」

せんちゃんがフォローしてくれる。

『おっ？そうなの？？』

「えっ・・・あ、はい・・・感謝してます・・・」
俯き気味に答える。

「それに、きいは男の人と付き合うの、今回が初めてなんです。だから、なにかとサポートしてあげないといけなくて、私も手を焼いてるんですよ」

『ああ。手を焼くつてすぐわかるよ。お互い苦労するね。』

「ホントですよ。あははーっ」

あははーって・・・

ああー・・・

この二人・・・絶対気が合うんだろうな・・・
早く着かないかなー・・・

『大丈夫？』

仲村さんが、左手で私の右肩をポンと叩いた。

「え？」

『酔った？窓開けようか？』

「あ、いえ、大丈夫です・・・」

『そ？もうすぐ着くから』

「はい・・・」

仲村さんて、なんだか掴めない。

憎まれ口を言ったかと思うと、急に氣遣ってくれたり。
優しいのか、いじわるなのか、よくわからない。
この前、私を妹みたいだって言ってたけど・・・
お兄ちゃんて、こんなかんじなのかな。

松山先生の住むマンションに着いた時には、もう21時を回っていた。

前に一度、先生と一緒に入ったことのあるエントランスを抜けて、エレベーターホールへ進む。

エレベーターは全部で3機。

乗り込んだエレベーターの中で、ボタンを見るなりせんちゃんと目を丸くした。

「35階（建て）！！」

『ちなみに松山先生の部屋は27階ね。覚えてね、君。』

27階のボタンを押した仲村さんが、先生から預かって来た鍵の先を私に向けて言った。

「はい・・・」

エレベーターが上昇する。

いよいよ先生の部屋に入るのかと思うと、上昇することにドキドキしていく。

27階のフロアで降りて、仲村さんの後に続く。

静かなフロア、扉の一つ一つにも高級感がある。

「ホントにすごいね、きい。ホテルみたい」

せんちゃんが小声で話す。

「でしょ？私も、最初にエントランスに来た時びっくりしたもん」
2711 と書かれた部屋の前で、仲村さんが止まる。

『到着。松山宅。』

仲村さんが、慣れた手つきでカギを開ける。

『どうぞ、お入りください、お嬢様方』

ドアが開けられると、センサーが反応して、玄関口の照明が点く。

「お・・・おじゃまします・・・」

せんちゃんと二人そろって、中に入る。

仲村さんが後ろに続き、ドアが閉まると、一瞬、部屋のおいが鼻を突いた。

あ・・・

松山先生のおいだ・・・

緊張が、その一瞬で解れる。

「きい、早く入ってよ」

せんちゃんが背中を押す。

「あ、ごめん」

靴を脱いで、部屋に入る。

白いハンドドレスのおしゃれな玄関収納の横を通り、正面に見える
レリーフアートなデザインの扉に向って歩く。

廊下には4つほどの扉があり、寝室やバスルームだと思われる。

一歩一歩進むごとに、オレンジの照明がひとつひとつ照らされてい
く。

「すごい、ライトって全部センサーで点くのお？！」

せんちゃんが、やや興奮気味だ。

正面の扉をそっと開けてリビングに入る。

「「うわあっ・・・」」

せんちゃんと二人、思わず歓喜の声を上げた。

大きなリビングウィンドウから、目の前に広がるきらびやかな夜景。リビングの照明は自動的に点かないようになっていた。

『二人に、是非とも夜景を見せてやってくれって、松山先生が。』
背後から、仲村さんが言った。

「先生が・・・」

素敵・・・

どうしよう

今すごく感動してる・・・

「すごいすごい！きい！松山センセってばもうサイコーじゃない！！」

「うん・・・」

私とせんちゃんのために、先生が・・・

『粹なことするよなああの人。シティ・ビューの部屋に騙されやがつて、ガキどもめっ』

「あははっ、仲村さん、悔しいんですね」
せんちゃんが仲村さんを指さして笑う。

『うるさいね。はい、夜景の時間は終わり終わり。電気点けますよ。もう、俺は腹減ったっつーの。さっさとピザの注文しよう』
仲村さんがリビングの照明を点けた。

広いリビング・ダイニングの奥にはシステムキッチン。

暖か味のあるブラウンのカウチソファ、センスのいいエリプティカルテーブル。

4人掛けのダイニングテーブル、やたらと存在感のあるプラズマテレビ・・・

想像してた通り、すっきりと片付けられている。

ここが、先生が暮らしている場所。

朝起きて、出勤の支度をする。

食事したり、くつろいだり、眠ったり。

先生が、自分の時間を過ごす場所・・・

「うわっ、テレビでかつ」

ソファに跳ねるように座ったせんちゃんが、リモコンでテレビを点ける。

『これ、58インチだろ。あの人、一人でこんなでかいテレビ見てんだよ。マジ腹立つ。あ、ピザ何にする？』

仲村さんが、ピザのチラシを私に見せた。

「クワトロなんかいいんじゃないですか？いろいろ食べれて・・・」

『OK。じゃ、電話するよ。あ、冷蔵庫見てみて。サラダが作れるようにいろいろ買ってあるって言ってたから・・・って、君たちって、料理できるの？』

疑いの目で私たちを交互に見る。

「きいは出来ますよ」

せんちゃんが答える。

「あ、そんなに難しいのは出来ませんが、サラダなら・・・」

『そ？よかった。じゃ、頼むね。』

仲村さんは携帯を開いて廊下へ出た。

システムキッチンにあるシルバーの冷蔵庫を開ける。

さすがに、一人暮らしだからなのか、冷蔵庫は一般的な大きさだった。

中を見て、思わず吹き出してしまった。

レタス、プチトマト、キュウリ、瓶詰めのオリーブとドレッシング、その横には生ハムらしきものが無造作に入れられている。

野菜と飲み物以外、何も入っていない。

部屋の片付き具合からして、野菜は野菜室、生ハムはパーシャルへ分類されていてもよさそうなのに、冷蔵庫の中は意外に大雑把だった。

これだけ・・・？

今日のためだけに買ったような品物。

普段の食事はどうしてるんだろう・・・

とりあえず材料を取り出して手を洗う。

水栓はタッチレス。あらゆるものに高級感がありすぎて、だんだん驚かなくなってきた。

せんちゃんは、クリスマスの歌番組を見ながら、ソファで歌っている。

まな板と包丁を探し出して、サラダを作る。

キッチンから真正面に見えるように取り付けられたリビングの時計を見ると、そろそろ22時になるうかというところだった。

スライディングクローゼットから、大きめのお皿を取り出して、盛りつけにかかるうっていると、廊下の方からガヤガヤしゃべり声が近づいてくる。

リビングの扉が開く。

黒いコートにビジネスバッグを持った、松山先生が入って来た。

「ただいま、きいちゃん」

ドキン・・・

「あ、お、おかえりなさい・・・」

“ただいま”・・・

あ、やばい、メガネがズリ落ちてきそう

「あつ、こんばんはー！おじゃましてますっ」

せんちゃんが、勢いよく挨拶をした。

「ああ、泉さん、こんばんは。遅くなっちゃってごめんね。」

「いいえ。私はテレビ見てましたからっ」

「お腹すいてたでしょ？ごめんね、きいちゃん、料理までさせちゃって」

コートを脱ぎながら、先生が言う。

「いえ、料理だなんて、このくらい・・・」

電話を終えた仲村さんも、リビングに戻ってきた。

『ピザ、30分で届くそうです』

「仲村、先に始めといてって言っただろ？」

『だってこいつら、夜景にキヤーキヤー言ってるんすもん。』

「ああ、どうだった？部屋が暗い方が綺麗に見えるんだ」

「すっごい綺麗でした！ねっ、きい！」

「・・・はい・・・」

先生を、見つめてしまう。

「そっか。喜んでもらえて良かった。」

先生が、優しく微笑んだ。

しーん・・・

ハッと気がつく、仲村さんとせんちゃんが、二人並んでニヤニヤしている。

『なーんか、俺らって、邪魔じゃね??』

「ほんと。いいんですかあ、私たちが一緒でも」

顔が、カーッと熱くなっていくのがわかる。

メガネを手首で押し上げる。

「あ、あ、サラダ、出来ます。せんちゃん、運んで!」

「はいはい」

「あ、じゃあ僕は着替えてくるね。」

先生は、バッグを持ってリビングを出て行った。

なんか・・・恥ずかしい

照れくさい・・・

でも、幸せ

『あつ!高校生!』

「はい??」

仲村さんが、ダイニングテーブルの上に置いたままのコートを取り、私に差し出す。

『これ、邪魔だから持ってって』

「え?」

『出て、右の二つ目のドア』

「え」

え?

それって

『早く』

「ええっ」

『あー、舞子ちゃん、他の皿とかグラスも運ぶからこつち』
コートを押しつけると、無視してせんちゃんと準備を始める。

・・・

コートを持って、リビングを出る。
右の、一つ目の・・・ドア

ドキドキして、手が、震える

コンコン

ドキドキ

かすかに足音がして、ドアが開く。

「あ・・・」

「きいちゃん」

まだ、ネクタイを緩めただけのシャツにズボンのままで、先生が立
っていた。

見上げるほど、近くに。

「あの、コート」

「ああ、ありがとう。」

先生の背後には、スタンド照明だけが点いた、薄暗い寝室が広がっ

ていた。

ドキドキが、速くなる。

先生が笑顔で手を伸ばす。

コートを受け取るのかと思いきや、私の腕を引いた。

「えっ」

びっくりする間もなく、先生は寝室のドアを閉める。

ふわりと、クリニックのおいがする。

あっという間に、先生の腕の中。

先生のネクタイが、頬に触れる。

ドキドキしすぎて、声が出ない

すぐ隣には、仲村さんとせんちゃんがいる

その事実がますます、鼓動を高鳴らせる

「……」

「来てくれてありがとう、きいちゃん」

耳元で、先生が囁く。

「……いえ、こちらこそ、ありがとうございます」

「今日はすごく冷えるけど、寒くなかった？」

「あ……、大丈夫です」

「そう？」

「……あ、あの」

「ん？」

「数学の成績が、上がったんです」

「おっ！ホントに？」

「ハイ」

「きいちゃんが頑張った成果だね。」

「・・・先生の、おかげです」

「それはどういたしまして」

「・・・」

抱きしめられたままの会話は、なかなか続かない。

「ススツ・・・きいちゃん、心臓がドキドキ鳴ってる」

「えっっ」

「ハハッ、これだけくっついてれば、さすがに伝わってくる」

うわ、恥ずかしいーっ・・・

「本当は、ここで二人だけで過ごしたかったけどまだ・・・高校生だから・・・」

「・・・」

先生を見上げる。

優しい、表情。

「でも、年が明けて・・・、卒業したら、僕と二人で過ごしてくれる？」

「・・・はい」

早く、大人になりたい

先生のために、大人になりたい

先生と、二人だけになりたい

そしていつか先生と・・・

ピンポン♪

ハッッ！！

先生と二人、我に返る。

リビングから、バタバタ出てくる仲村さん。

通りすがりに、寝室のドアをドドドドンと叩く。

『はい、お二人さん、時間切れですよー。ピザ来ましたよー』

仲村さんが、玄関のドアを開ける音がする。

松山先生と目が合い、笑顔を向ける。

「始めようかつっ」

「ハイッ」

「うん、あ、着替えなきゃ。」

先生と一緒に過ごした、初めてのクリスマス。

夜中の12時近くになると、雪がちらついていた。

大きなリビングウィンドウから眺める、シティ・ビューのホワイトクリスマス。

どんなツリーよりも、最高に綺麗だった。

来年も、再来年も、松山先生と過ごしたい。

ずっと、先生と、一緒にいたい。

先生の空間。
(後書き)

先生とあの人。

1月。

松山先生と二人で行った神社の初詣の思い出・・・に浸るのも束の間。

短い冬休みも終わり、ひたすら入試に向けて勉強する日々。

せんちゃんはずでに推薦入試で短大の合格が決まり、放課後は毎日、私の一般入試の勉強に付き合ってくれていた。

その日も、放課後の教室での勉強を終えて駅に向かっていった。

駅の入口に差し掛かろうとしたとき、私とせんちゃんの目の前に、高いヒールを履いた女性がツカツカと立ちはだかる。

幸せな気分は、そう長くは続かない。

「こんにちは、水嶋さん。」

・・・上原先生

突然のことにびっくりして、挨拶の言葉が出ない。

せんちゃんが不審な顔をして私を見る。

『きい、誰この人。』

「・・・上原先生。」

『えっ』

せんちゃんも驚いた表情で上原先生を見る。

「ちよっと、話があるの。付き合ってもらえない？」

上原先生のその表情には、断るのを許さぬといった雰囲気がある。

「・・・なんですか？」

「ここじゃなんだし、近くの店に入りましょう。」

「・・・」

『きい、行くの!?!』

「・・・」

「悪いわね。お友達、少しお借りするわ。」

『はあ?』

高飛車なその物言いに、せんちゃんが苛立つ。

「いいの、せんちゃん。先に帰ってて。」

『きい・・・』

「じゃあ、明日ね」

『うん・・・じゃあバイバイ・・・』

心配そうな顔のせんちゃんを見送ってから、上原先生と歩く。

駅の近くにあるコーヒESHOPに案内された。

静かな雰囲気の内店はお客さんも疎らで、一番奥の二人掛けのテーブルに座った。

座ると同時に、メニューとお水が運ばれてくる。

上原先生が、開いたメニューを差し出す。

「何にする?」

「・・・いえ、私は結構です。」

これからどんな会話が待っているのかと思うと、とても、何かを飲みたい気分じゃない。

「そう」

上原先生はメニューを閉じると、そばに立っていたウェイトレスの

女性にコーヒーを注文した。

「ごめんなさいね、待ち伏せみたいな真似して。こうでもしないとあなたと話せる機会なんて作れないと思ったから。」

アップにまとめられた髪から、少し前に落ちてくる横髪を耳に掛けながら言う。

洗練されたメイクと、大人の女性らしい仕草は、第一印象のままだ。

何度見ても、綺麗な人だと思う。

見るたびに、自分の子供っぽさを卑屈に思ってしまう。

「私、大体知ってるの。」

「・・・」

「真一とあなた、付き合ってるんでしょう?」

「・・・」

「なんで知ってるのかは、この際置いておいて」

「・・・」

「・・・私も、真一が好きなの。」

「・・・」

「それはあなたもわかってるんでしょう?」

上原先生は、真っ直ぐに私を見る。

真剣な、上原先生の目。

「・・・はい」

私が答えると、目を逸らしてため息をついた。

しばらく沈黙が流れる。

注文したコーヒーが運ばれてくると、上原先生が一口飲んだ。

「歯科衛生士を、目指してるんですって？」

「・・・はい」

クスツと鼻で笑われる。

「真一と同じ職業を目指すなんて、健気ね。いかにも子供が考えそう」

ズキン・・・

「あなた、自分が真一を幸せに出来ると思ってる？」

「・・・どういう意味ですか？」

「真一と別れてほしいの」

・・・！

「・・・」

なんで

なんでこの人にそんなこと言われなきゃいけないの

「あなたは、真一にとって、迷惑をかけるだけの存在だってわかってる？」

「なにが・・・迷惑なんですかっ？」

声が、震えてきた。

「私ね、あのクリニックの院長の娘なの。」

「・・・」

え・・・？

「クリニックは他にも、分院が五つ。知らなかった？」

「……」

「クリニックの歯科医師が、患者の、しかも高校生に手を出したって表沙汰になったら、クリニックの評判に関わるの。そうになったら、真一だけじゃなく、他のスタッフにも迷惑がかかる。だから、真一だって、あなたとのことを内緒にしようとしたでしょ？」

「……」

……内緒……

それは、私を守るためだと思ってた……けど

「……辛い、今のところ知ってるのは私だけだし、別れてくれるなら、何も問題ないの。」

「……」

「キツイ言い方かもしれないけど、子供のあなたには何もできない。」

「

バカだ

私はなんてバカなんだろう

上原先生の言う通りだ

私は

社会の仕組みを

理解していなかった

『いいかげんにしろよ、てめえ』

突然、横からの大きな声が話を遮った。
技工のユニフォームに黒いダウンジャケットを羽織った仲村さんが、ズボンのポケットに手を入れて立っていた。

私もびつくりしたけど、上原先生も驚いている。

「仲村くん、びつくりした。なんなの」

『そっちこそなんなんだよ。いい大人が、高校生相手に脅迫か？』

「悪いんだけど、邪魔しないでくれる？」

『邪魔してんのはあんたの方だよ』

仲村さんは険しい表情で、声も荒い。

「大事な話をしてるのよ、黙ってて。」

上原先生も苛立っている。

『いや、黙りませんねえ。何にも言えなくなってる高校生がいるのに、黙って見てられっか。大体こんなことしたって、あの人が今更あんたに振り向くわけねーだよ。』

今更・・・

「なにが言いたいの？」

上原先生は、仲村さんを睨みつける。

うわっ、怖い……

『俺、知ってんですよ。あんた、歯科医を目指す松山先生より、外科医を目指してるあの人の兄貴の方に目が眩んで、別れたいって言っただって？』

え……

「……」

上原先生が押し黙る。

松山先生が大学生の時に、上原先生の方から別れたいって言ったって……それって、松山先生のお兄さんの方を好きになったからの……？

『おかげで、兄弟は犬猿の仲だ。金目当てってのがバレバレなんだよ。怖ええよなあ、自分の生活水準のためなら、無力な高校生でも脅迫すんだもんな』

どうしよう……私のためとはいえ、仲村さんの暴露モードが止まらない。

「口を慎みなさいよ仲村くん……これでもあなたの上司よ。あなた一人くらい、簡単にクビに出来るのよ。」

えっ……

仲村さんが、クビ……

『どこまでも汚ねえ女だな。』

「仲村くんこそ、なんでそんなにムキになるの？」
「はあ？」

「クビだって言われても、まだ私に楯突いて」
『・・・・・・』

・・・仲村さん？

「このコのが好きなの？」

！・・・・・・！！

『・・・・・・』

「だから、必死になって守ろうとするんでしょう？」
勝ち誇ったような、上原先生の目線。

「図星ね。モテるわね、水嶋さん」

上原先生はクスツと笑うと、煙草に火を点けた。

仲村さんが・・・私を？

どこを見るわけでもなく、仲村さんの目が動く。

『いい加減なこと言うなよ・・・・。俺をクビにしたきゃそうしろよ。その代り、もうこのコを脅迫するような真似すんなよな。』

そう言うのと、仲村さんは私の手を引っ張った。

『行こう』

「あ、」

引っ張られるままに、鞆を持って席を立った。

振り向き様に上原先生を見る。
足を組み、テーブルに顎肘をついて、やれやれといった具合に煙草を蒸かしていた。

でも

その表情の先が

どこか寂しげに見えた。

仲村さんに腕を引っ張られたまま、ネオン輝く駅前の通りを、人ごみを縫うように足早に歩く。

「あ、あの、」

急にコーヒーストップを出たせいで、メガネが曇ったままで前が見辛い。

「・・・仲村さんっ」

力強く掴まれている腕が痛い。

「仲村さんてばっ!!」

手を振り払うようにして、足を止めた。

ハッと我に返ったように、仲村さんも足を止めて振り向いた。

「あ、ああ、ごめん・・・」

「い、いいえ、あの、違うんです、メガネが曇っちゃって」

慌ててメガネを取り、制服のコートのポケットからメガネ拭きを取り出す。

おもむろにメガネを拭いて掛け直す私を、仲村さんは、黙って見て

いた。

・・・何か、言わなきゃ

気を取り直して、ゆっくりと歩き出す。

「仲村さん、どうしてあの店に・・・」

「ああ、舞子ちゃんからメールが来たんだ。上原が、君を連れてったって」

「せんちゃんが・・・」

ん？

「メルアド交換してたんですか??」

「えっ、あ、うん、ってそこかよ」

「あ、すみません、ちよつと、ビックリして」

「・・・別に、メルアド交換したのはクリスマスだけど、メールが来たのは今日が初めてだよ」

「そう・・・ですか。別にいいですけど」

別に、せんちゃんが仲村さんとメールしようが、私はいいけど・・・

「・・・心配だったから」

仲村さんが、ボソツと言った。

「え？」

「君が上原に連れて行かれたって聞いて、なんかひどいことされるんじゃないかって」

「・・・」

仲村さん・・・

「だから、仕事抜けて来たんだよ。」

“このコのが好きなの？”

上原先生の言葉が脳裏によぎる。

「・・・はい、すみません。ありがとうございました。」
俯き気味に、お礼を言う。

「・・・なんて言われた？上原に」

「・・・」

「話してみろよ」

「・・・松山先生と付き合っていると、クリニックの人たちにも迷惑がかかるって」

「なんだよ、それ」

「・・・上原先生の言う通りかもしれない」

「何言ってるんだよ、さっき聞いてただろ？あの女は、松山先生のことが好きなわけじゃないって。金目当てなんだよ？」

「・・・そうは・・・見えませんでした」

あの、真剣な上原先生の目は、松山先生を本気で想っているように感じた

「それに・・・高校生に手を出した先生がいるって評判になったりしたら、患者さん、来なくなっちゃいますよ。聞こえが悪くて」

私は、なんにもわかってなかった

松山先生は、私を守るために内緒にしてくるんだなんて、思い上がりもいいところだった

「私のせいで、クリニックに迷惑がかかったりしたら・・・申し訳ないです」

「そんなことないよ、誰にもバレなきゃいい話だろ？上原なら、俺がどうにか黙らせて」

「上原先生って、院長先生の娘さんなんですよ」

「そう・・・だけど、最初はそうじゃなかったんだよ。松山先生が就職したクリニックが、後から上原の親父のクリニックと経営統合したんだ。上原が俺らのクリニックに現れるようになったのもここ1～2年のことで・・・」

「・・・そうだったんですか」

「あの女のことだから、親父に頼んで経営統合させたのかもしれないけどな」

「・・・」

私の知らないこと、沢山あるんだ・・・

松山先生と上原先生の過去も、きつともっと複雑なんだ

このままじゃ、仲村さんがクビにされちゃうかもしれない

私のせいで

松山先生も

仲村さんも

クリニックの人みんなが困ることになる

「私が松山先生と付き合うのを止めれば、何にも問題ないって言われました、へへ」

どうにか、笑顔を作る。

「そこまで言ったのかよ、あの女・・・」

これ以上、仲村さんにも、心配かけられない

仕事を抜け出してまで、私なんかのために

駅の改札近くで、足を止める。

「ありがとうございます、本当に。仕事に戻ってください。」

泣きそうになるのを堪えて、笑顔を作り続ける。

「・・・別れようなんて考えてないよな？」

「・・・」

笑顔が、崩れていくのがわかる。

「・・・わかりません」

本当にわからない

「なにがわかんないんだよ、松山先生とちゃんと話し合えよ？一人で勝手に決めるなよ？」

「・・・」

「ちよつと、こっち来い」

仲村さんはまた私の腕を引く。

駅の外の噴水広場に連れて来られ、私をベンチに座らせた。薄暗くて、それほど人目には付かない。

仲村さんも、隣に座る。

泣きたいのを堪えるのが辛い。

「仕事・・・戻らなくていいんですか？」

「んん、今日は残業かなあ」

笑いながら答えてくれる。

「・・・」

「泣きたいのに、我慢してんじゃないの？」

俯く私の顔を覗き込む。

「・・・」

仲村さんはやっぱり、女の子の気持ちがよくわかる人だ

堪えていた涙が出てくる

メガネを外して、涙を拭う

「今から松山先生に会えよ」

「・・・嫌です」

「なんで」

「どんな顔して会えばいいかわかりません」

「・・・辛い時は会わなきゃダメだって。じゃなきゃ、君たちホントにダメになっちゃうよ？」

松山先生・・・

本当はすごく会いたい

会って、この不安から救ってほしい

「いいんです。先生は忙しいし、仲村さんも。」

「……」

もう一度、涙を拭って、メガネを掛け直す。

「ハアッ。ホントにもう大丈夫です。仕事に戻ってください。ここ、寒いし。」

鞆を持って、ベンチを立つ。

「……送ろうか？」

「いえいえ、電車で帰れますから。」

「そっか」

仲村さんも、ベンチを立つ。

「あの、今日のことは、松山先生に言わないでください」
「なんで」

一人で、ちゃんと考えたい

上原先生が言ったことも

これからの、松山先生とのことも

「余計な心配かけたくないんですよ」

通じるかわからない、作り笑いを浮かべる。

「……うん、わかった。君がそう言うなら」

「……すみません」

再び、駅の入口で、挨拶をする。

「ありがとうございました」

「うん。気をつけてね。」

「はい」

改札に向かって歩き始める。

「なあ」

仲村さんが背後から呼び止める。

その声に振り返ると、仲村さんが駆け寄る。

「携帯貸して」

「え？」

「携帯」

「あ、はい」

制服のポケットから携帯を取り出して渡す。

仲村さんは、私の携帯を開いて素早く入力する。
携帯を閉じて、私に返す。

「俺の携帯の番号とメルアド」

「あ・・・」

「今度また何かあったら、自分で連絡してこい」

「あ、はい・・・」

「・・・あの、それとさ、」

「はい？」

「上原が言ったこと、気にすんなよ」

「・・・」

「俺が・・・君のことをどうだとか・・・言ってたこと」

“このコのが好きなの？”

「あ・・・」

「って、別に気にしてねーか」ハハッ

仲村さんは苦笑いを見せて言った。

「……」

「ほ、ほら、俺、年下には興味ないって言っただろ？上原のヤツ、なんか勘違いしてんだよ」

「あゝハハ」

とりあえず、頷きながら笑ってみる。

「入試も近いんだし、あんまり思い詰めるなよ。松山先生は、君のこと大事に思ってるから。」

仲村さんの優しい言葉には、相変わらず慣れない

「側近の俺が言うんだから♪」
バシッと肩を叩かれる。

「側近で……」

「ハハッ、じゃあ、またね。」

「あ、ハイ」

仲村さんは、クリニックの方へ歩いて行った。

黒いダウンジャケットが人ごみに紛れるのを見送ってから、改札に向かって歩き始める。

携帯を開くと、電話帳新規登録画面のままだった。

N a m e : 仲村恵介

K a n a : ナカムラケイスケ

T e l : 090 - * * * * - * * * *

M a i l : * * * * *

仲村さん……恵介っていうんだ

知らなかった

快速電車で揺られながら、松山先生と出会ってからのことを考えていた。

患者としてクリニックへ行って、素敵な先生だっと思った。そのあとすぐ、上原先生にも会ったんだっけ。

私が受付に忘れた診察券を、松山先生が走って追いかけて届けてくれた。

歯科衛生士になろうって決めて、勉強を覚えてもらうようになって・

ここで仲村さんに、初めて会ったんだ。

いつも、私と先生のためにクリニックに残ってくれて・・・

松山先生と初めて映画を観に行った。

レストランで上原先生に会って、クリニックで松山先生と上原先生が一緒のところを見て・・・

仲村さんが、学校まで来て、松山先生が添削した問題集を渡してくれた。

誕生日も、仲村さんがいなかったら、松山先生には会えなかった

クリスマスの先生の部屋でも、一瞬だったけど、二人きりにしてくれた

そして今日

仕事を抜け出して、私を助けに・・・

いつだって、仲村さんは近くで支えてくれてる

でも私は支えてもらってることを、今まで深く考えたことがなかった

“妹ができたみたいなかんじなのかな、俺、一人っ子だし”

“心配だったんだよ”

“今度また何かあったら、自分で連絡してこい”

“入試も近いんだし、あんまり思い詰めるなよ”

“松山先生は、君のこと大事に思ってるから”

いつも支えてくれてる

いつも気にかけてくれてる

いつもそばにいてくれてる

それは“妹みたい”だから

なんだろう

どうしてだろう

胸がドキドキする

私は松山先生が好きなのに

仲村さんのことを考えてる

どうしてだろう

“私は妹なんかじゃない”って

思ってるような気がする

先生の好き。

「それで？」

せんちゃんは冷静に、私の目を真っ直ぐに見て言った。

入試目前の放課後の教室には、居残って勉強している生徒が数人。私とせんちゃんは机を並べて座り、ヒソヒソ小声で話をしていた。

「だからその・・・仲村さん、すごく、心配してくれるっていうか・・・」

話せば叱られるんじゃないかとビクビクしてただけに、意外に驚きもしないせんちゃんの反応に戸惑う。

「気になりだしちゃった？仲村さんのこと」

「っていうより、引っ掛かる・・・っていうか・・・」

「うん・・・」

せんちゃんは、顎肘を付いて優しく微笑んだ。

あの日以来、仲村さんのことが頭から離れなくて、それがどうしてなのか、自分ではもう分析できない。

松山先生が好き。

それは確かな気持ち。

先生がメールくれたり、電話してくれるのが嬉しい。

・・・反面、後ろめたさが見え隠れ。

自分が何を考えてるのか、理解不能・・・。

「きい、混乱してるんだね。自分の気持ちに」

「・・・うん」

「実はクリスマスにね、仲村さんの方からメルアド渡されたのよ。松山先生のこと、きいに何かあったら連絡してくれて。」

「うそ・・・」

「ホント。」

「そう・・・だっただ・・・」

仲村さんが自ら・・・

「でも、ズバリ言っちゃうとね」

「うん」

「それは気の迷い・・・かな」

「気の迷い・・・」

「上原の存在って、きいにとってはすごく嫌なものでしょ？」

「うん」

「上原のことがある度に、そばで支えてくれたのが仲村さんだし、何も知らない松山先生よりかは、やっぱり仲村さんの方が頼れる人のように感じちゃう。」

「・・・」

そうかも・・・

「それは、正直な気持ちで構わないと思うの。」

「・・・」

「でも、松山先生が、今までの上原のことを全部知ってたとしたら、きつと仲村さん以上に、きいのことを守ってくれてたと思わない？」

あ・・・

「・・・」

「あんたは、松山先生にいつも遠慮ばかりして、肝心なことは何にも話してないでしょ？」

「・・・」

「それって、松山先生の立場からしたら、すごく寂しいことだと思うよ。」

そうだ・・・

いつだって私は、松山先生にいいコだって思われていたくて

だから、先生が不愉快になるようなことは聞かないようにしてきた

上原先生を前にすると、あんなに怖い顔になる松山先生を見たら

私なんかが、先生たちの過去に触れていいわけがないって思っ

「私ね・・・せんちゃん」

声が、震える

「うん」

せんちゃんの優しい眼差しに、涙が出そうになる

「ホントは・・・松山先生にいっぱい聞きたい」

「うん」

「先生がどんな大学生だったのかとか・・・上原先生とどんな恋愛・
してたんだろう・・・とか」

「うん」

「どうして・・・歯医者さんになろうって思ったんだろう・・・と
か」

「うん」

そして、先生の口から聞きたい

一番の言葉

「私のこと・・・好き・・・なのかとか」

「え・・・？」

せんちゃんが驚いた表情になる

「私まだ・・・好きって・・・言われたことないの」

「え、じゃあ、どうやって付き合うようになったのよ？」

「話したでしょ・・・」惹かれてる”って言われただけ・・・グスッ

「あ、なあんだあ、もう、ビックリした。ほら、鼻拭いて」

せんちゃんがポケットティッシュを鼻に押し付ける。

「ふええっ」

「ハア・・・。きい、いつも言ってるけど、もっと自信持ちなさいよ！」

「・・・だって」

「だって何よ」

「私、上原先生みたいに美人じゃないし・・・せんちゃんだっていつもダサいダサいって言うじゃん！」

「あんたが上原みたいな美人だったら、松山先生とは絶対に付き合えなかった！」

「は・・・？」

何言ってるのせんちゃん

「松山先生はあんたに惹かれたの。そのまんまのあんたに」

「・・・」

「ダサくて、メガネで、おさげで、純粹なあんたに」

「・・・」

「素直で優しいあんたに」

「・・・そう・・・かな」

「そーよ。私はね、松山先生より仲村さんより、一番長くあんたと一緒にいるんだよ。その私が言ってるんじゃない。信じられない？」

「せんちゃん・・・」

「松山先生は、きいのことが好きよ。口に出さなくても。」

「・・・」

「じゃなきゃ、仕事の合間に勉強見たり出来ないよ？」

「・・・」

「それにねえ、好きだ好きだって軽々しく言わないほうがいいの。特に男はっ！」

「そうなの？」

「そうよ。本当に好きだって思ったときに、一度だけ言ってくれる方が、ずーっと重みがあっていいと思うけどな、私は」

「・・・一度だけ・・・」

「自信持たなきゃ。」

せんちゃん・・・

「うん・・・」

『ちよつとお、きいと舞子！あんたら二人さつきからうるさいのよ！集中できないじゃないっ』

教室で勉強していたクラスメイト、山崎さんからの、突然の苦情。ハツとして、二人で怒鳴り声の方を見る。

「あ、ごめんね、もう帰・・・」

「ああ！？悪かったわねえ、帰ればいいんでしょ、帰ればあー！謝ろうとした私の声を遮るように、せんちゃんがキレた。

『そうよ、勉強する気ないなら帰りなさいよ』

「でもここはみんなの教室でしょ？どう使おうが自由だと思うけど？」

『はあ！？』

ヤバいつ！

ケンカが始まるっ

「せんちゃん、帰ろう、ね？」

机に広げてあった問題集を急いで鞆にしまい込んで、せんちゃんの腕を引っ張る。

「帰るわよ！帰るけど・・・」

「いーからっ！じゃ、じゃあね山崎さん。邪魔してごめんね〜ハハ」

睨みつける山崎さんの前を通って廊下に出る。

「んもう〜、せんちゃんてばあ・・・」

「だって山崎！アイツ、自分が推薦入試で落ちたからって、私のこと僻んでんのよっ。」

「えー」

「推薦で同じ短大受けて、山崎だけ落ちたの。なのにアイツ、私が合格したのが信じられないとか他のみんなに言ってるらしくて。実力の差だっつーの！」

怖い。

せんちゃんも、山崎さんも怖い。

怒らせないようにしよう。

この人たちだけは絶対に。

せんちゃんに話をしてみて、少しだけ整理がついた。

仲村さんを気にしていた自分の気持ち。

上原先生のこと・・・入試が終わったら、松山先生に話そう。

上原先生が言ってたこと・・・

入試の3日前。

松山先生が、最後に勉強の見直しをしようとクリニックに呼んでくれた。

しかも今日は日曜日。

さすがに日曜日に制服で行くのもどうかと思い、頑張っておしゃれして、私服で出かけた。

タートルネックのニットにグレーのスカート、白いコートにブーツ・。。。

私なりの、精一杯・・・。

お昼の1時くらいにおいでと言われ、クリニックのあるビルへ向かう。

街は、間もなくやってくるバレンタインデーにむけて、イルミネーションが輝いている。

バレンタインデーは、合格発表の2日後。

松山先生と一緒に過ごしたいなあ・・・。

バレンタインデーを楽しめるように、絶対に合格しなくちゃ！

クリニックの扉の前で、両手でガッツポーズ。

「よしっ！」

「きいちゃん」

ビクッ

いきなり声を掛けられて振り返ると、優しい笑顔で見下ろすように、松山先生が立っていた。

「せ、せんせえ・・・」

今の見られた？

「ススッ、時間通りだね、きいちゃん」

「はい・・・」

クリニックの鍵を開ける。

黒いコートに身を包んだ先生。コートの裾からは、スラックスの長い足が伸びている。

寒さのせいで、赤みがかった高い鼻にキュンとなる。

「どうぞ」

扉を開けて、私を中に促す。

「ハイ、失礼します・・・」

全てのブラインドが下ろされたクリニックの中は、わずかに漏れてくる外からの光で、ようやく見渡せる程度だった。

薄暗い診療室の奥へ、先生が進む。

「すぐ電気点けるから、ちょっと待ってね」

「はい」

今・・・先生と、二人きりだ・・・

いいのかな・・・

仲村さんも呼んであるって言うてたけど・・・

受付のオレンジの照明が点けられ、辺りがパツと明るくなる。

ハッ

ダメダメ

何を意識してるんだろう

今日は勉強に来たんだから

いつものデートとは違うんだし・・・

「きいちゃん、中においでよ？」

「あ、はい」

いつものミーティングルームへ入る。

エアコンをONにした先生は、コートを脱いで椅子に掛けた。

私もコートを脱ごうとすると、先生がそつと受け取ってくれる。

「あ、スミマセン」

「うん、こっちに一緒に置いておくね」

先生の黒いコートの上に、私の白いコートが重なる。
何でもないことなのに、なぜだか今日はドキドキする。

「あ、仲村さんはー遅いですね．．．」

緊張のあまり、どうでもいいことを口走ってしまつ。

「．．．早く来てほしい？」

「え、いえあの、そうじゃなくって、あの」

先生は、いつも私が座るはずの椅子に座って、私を見上げる。
私の両サイドに、先生の長い足が伸びる。

「あれ、先生？そっちは」

「おいで、きいちゃん」

私の腕をグイと引っ張る。

「わっ」

先生の膝に座らされる。

落ちないように、先生の肩から背中に片腕を回す。

膝は抱えられてないけどこれって、お．．．お姫様抱っこみたい
恥ずかしい．．．

いつもは見上げている先生の顔が、見下ろすような体勢でそこにあ
る。

「せ、先生．．．」

「ん？」

「いいんですか、こんなことしてて．．」

「仲村のこと？」

「はい、もうすぐ来ちゃうんじゃ．．．」

「仲村には2時って言ってるから」

「え？」

「きいちゃんと二人になりたいくて、嘘ついた」
そのアヒル口で、いたずらっぽく笑つ。

どうしよう

ドキドキする

「ここのところずっと忙しくて、きいちゃんとの時間作れなかったから、少しだけ、仲村には遠慮してもらおうかなと」

先生は私のメガネに手を伸ばし、スツと外して長机に置いた。

一瞬だけ、視界がボヤける。

「そう、ですか・・・」

「さつき、扉の前でガッツポーズしてたきいちゃんがすごくかわいくて、抱っこしたくなった」

やっぱり、見られてた

先生に、見つめられる。

思わず、抱きついてしまう。

こういうのって・・・本能・・・なのかな

先生はそつと背中 hands を回すと、いつもよりキツめに抱きしめてくれた。

まだ冷えたままの、お互いの耳が触れあう。

「ごめんね、いつも忙しくて」

「・・・」

無言で、首だけを振る。

「寒かったね、外・・・」

「ハイ・・・真冬ですから・・・」

「ハハッ、そりゃあまあ、そうなんだけど」

「なんで・・・」

「ん？」

「なんで入試は冬なんですかね・・・」

「そうだね。寒いと、余計に厳しさが増すよね」

「寒いのは辛いです」

「うん・・・じゃあ、どうしようもなく辛くなったら、僕のところ
においでよ」

「・・・」

「いつでも」

今のこの事実が、ついさっきまでの悩みなんて吹っ飛ばしてしま
そう。

優しい先生がここに居る事実。

先生に、抱きしめられている事実。

そのやわらかな唇を、重ねられる事実・・・。

私は本当に

この松山先生が好き・・・

好きで好きで

泣きそうなくらい好きで

苦しいくらい好きで・・・

唇をそつと離す

「先生・・・」

「うん？」

「私・・・先生が好きです・・・」

「・・・うん」

言葉にすると、どうして涙が出るんだろう

「大好き・・・」

先生は、優しく笑ってまた抱きしめた

「僕も・・・きいちゃんが好きだよ」

胸に、重みを持って沁みていく

ずっと聞きたかった言葉

松山先生の・・・「好き」

「泣かないで、きいちゃん。」

何を、疑っていたんだろう

何を、グラグラ揺れ動いていたんだろう

いろんな不安が解消されたような気がして、涙が止まらない

「・・・きいちゃん？」

先生が、頭を撫でてくれる。

「きいちゃんは、溜めこんじゃう性格なのかなあ」

「・・・ごめんなさ・・・」

「そんなになるまで我慢しないで、なんでも僕に言ってよ？」

「・・・」

「僕はきいちゃんに、誠心誠意、応えてみせるから」

「・・・」

「怖がらなくていいんだよ？」

「・・・」

「ね？きいちゃん？」

先生が、顔の涙を拭ってくれる。

「・・・はい・・・」

「ススッ・・・泣いてる顔もかわいいけどね」

「うう・・・」

「ハハハツ・・・」

先生は、左の三つ編みを軽く引つ張った。
唇を重ねる。

先生の高い鼻が、頬に当たる。

何度も。

何度も。

先生が、首に手を添えてグツと寄せた。

手の力が強くて少し痛かったけど

初めて

舌が触れあうキスをした。

松山先生に

“男性”を感じた。

「デスクから取ってくるものがあるから、仲村、戸締り確認してきて。」

『ういっす』

松山先生はそう言うと、ミーティングルームを出て行った。

3時間ほど勉強して、仲村さんも一緒に食事に行くことになった。

『大丈夫そうで良かったよ』

「え？」

『上原のことがあつてから、思い詰めてるんじゃないかって心配だったからさ』

仲村さん・・・

『あ、ありがとうございます、いつも・・・』

『ん？』

『いろいろな心配してくれて・・・。メルアドのことも、せんちゃんから聞きました。何かあったら連絡してって言ってたって・・・』

『えっ？舞子ちゃん、そんなこともしゃべったの？？』

『あー、ハイ・・・』

『あいたゝハハハ』

『感謝してます。』

『よせつて、改まって言われると調子狂うだろっ』

『ハハ』

『ほら、松山先生あの人、ちょっと吞気つつうか、鈍感なところあるだろ。だからさ、この、女心にビンカーンな俺が、上手くフォローしてやらないと、君が傷ついちゃうからね』

『ハハハハ、確かに、ビンカーンですね』

『だろ？？だから俺はモテるんだよ』

『モテるんですか？』

『も、モテるよ』

『初耳です』

『あゝ？何言ってるの君？俺はねえ、松山先生ほどじゃないけどモテる・・・』

仲村さんが大きな声で力説していると、いきなりドアがガチャッと開いた。

『仲村、戸締り』

『あ、すみません、すぐやります。』

『フフフッ』

『ほーら、君のせいで怒られたよーお。まったく近頃の高校生は・・・』

仲村さんはぶつぶつ言い残して戸締りに行った。

よかった・・・

仲村さんとも普通に話せて。

「きいちゃん、これ」

松山先生が私の手を取り、手の平に何かを乗せた。

「？」

「1月に、一緒に初詣に行った時に買ったんだ。入試の前に渡そう
と思って」

「あ・・・」

白い合格御守・・・

「試験、頑張つて。いつも通りやれば、合格は間違いないから。
優しく微笑む先生。」

「はい。ありがとうございます。」

「うん」

気持ちはいつも、そばにいてくれる

先生がいれば、怖くない

先生と一緒になら

なんだって

今なら

やれそうな気がする

先生の好き。(後書き)

作者のデルタです。

数少ない読者の皆さま、いつもありがとうございます。

この、My Dentistは、当初の予定ではこんなに長くなるはずじゃなかったんですが、なんだか書いているうちにだらだらと続いてしまいました。

お付き合いくださっている方々、本当にありがとうございます。

次回はきいも入試を迎え、物語は終盤に差しかかっていると思われると思います。(多分)

もうしばらく、お付き合いのほど、よろしく願いします。

すれ違う先生。

受験生の緊張感で充満している試験会場。

受験番号を確認して席に座り、松山先生からもらった御守をポケットから取り出す。

今朝も、先生からメールが来た。

『きいちゃんおはよう。緊張してと思うけど、落ち着いて。苦手な複素数の問題は後回しにして、最後にゆっくり考えること。頑張つてね。』

御守を見つめながら、思わず笑みがこぼれそうになる。

がんばろう。

合格して、先生にもっと近づけるように。

数学の試験中は、先生と勉強した問題が出る度に、先生の声が頭の中で聞こえるかのようなだった。

先生が、一緒に問題を解いてくれているような錯覚。

先生が、すぐそばに付いていてくれるような・・・

手応えは十分だった。

きつと、合格できる・・・

16時。

試験会場を出ると、今にも雪が降りそうなどんよりとした曇り空。寒いのは裏腹に、試験の出来栄を信じるあまり、気持はウキウキしていた。

携帯電話を開くと、また松山先生からメールが来ていた。

『試験終わったら電話して』

松山先生！

え??

まだ4時なのに・・・

仕事じゃないのかな？

でも、先生と話したい！

先生の都合を考えながらも、恐る恐る発信ボタンを押した。
先生、電話に出れるのかな・・・？

トゥルルルル

トゥルルルル

『もしもし?』

え、早っ

「あ、もしもし、」

『きいちゃん』

「はい、あの、今試験終わりました」

『そう。今、どこ?』

「え?まだ、専門学校出たばかりですけど」

『迎えに行くよ』

「えっ?うそ、なんでですか?」

『ん?今日はちょっと仕事の用事で外に出ててね、これからクリニックに戻るんだけど、その前にきいちゃんの顔見れたらと思って』

顔見れたら・・・

うそーっ

やったあゝ

「そ、そうなんですかつ」

嬉しくてメガネがずり落ちる。

『うん。きいちゃん、そこから一番近くの駅わかる？』

「あ、ハイッ！ここまで電車で来ましたから」

『あ、じゃあ、駅の西口のロータリーで待ってるからね』

「ハイッ」

『うん、気をつけて来てね』

「ハイッ」

電話を切って、駅に急ぐ。

今まで先生と何度かデートしたけど、仕事の合間に顔が見たいなんて、こんなの初めてであゝ

先生

先生

松山先生・・・

西口のロータリーに、先生の黒の四駆車を見つける。

ドキドキしながら、車に近づく。

右の助手席の窓を覗くと、先生は書類みたいなものに目を通しながら待っていた。

センスのいい高そうな2ボタンスーツに、落ち着きのあるネクタイ。クリニックで見る白衣姿や、デートの時のカジュアルな着こなしとは違い、いつにも増して大人の男性に見えた。

先生カッコイイ・・・

窓から覗いたまま見惚れている私に、先生が気付いた。
優しい、笑顔。

助手席のドアを開ける。

「先生」

「おかえり、きいちゃん。お疲れ様」

「はい・・・」

おかえり・・・

「寒かったでしょ？早く乗って」

先生は私の鞆を受け取り、後部座席に乗せた。

助手席に座ってドアを閉めると、メガネが一気に真っ白に曇る。

「あ」

慌ててメガネを取り、コートのポケットからメガネ拭きを取り出す。

「どうだった？試験」

「あ、はい、あのう、手応えありました」

メガネを掛け直して先生を見る。

「そう！良かった！難しい問題は出なかった？」

「あ、一問、わからなかったんですけど・・・複素数・・・」

「ハハッ、そっか。でも、他が出来てるなら心配ないと思うよ。」

「はい。」

「うん。お疲れ様、きいちゃん」

先生は、右手で頭をポンポンと撫でた。

顔が、熱くなっていく。

「ススッ、鼻の頭が真っ赤だ。」

頭を撫でた手で、鼻の頭に触れられる。

「あ、は、走ってきたから・・・」

「ふーん・・・そんなに僕に会いたかった？」

アヒル口でにやりと笑う。

「・・・へ？」

「ハハハッ！おもしろいね、きいちゃん。」

か、からかわれてるっ・・・

「先生、ヒドイ・・・」

「ハハハ、ごめん、冗談。じゃあ、行こっか」

「ハイッ」

シートベルトを締める。

「このまま家まで送っていいんだよね？」

「はい、すみません・・・。遠回りになっちゃいますね・・・」

「いや、いいんだよ。僕がそうしたいんだから」

さりげなく言うと、先生はギアをDに入れて車を走らせた。

優しいなあ・・・先生

「そういえば、今日は何のお仕事だったんですか？」

「あ、うん、ちょっとね、院長に用があつて」

「院長先生・・・」

って、確か、上原先生のお父さんだよね・・・

「駅前のうちのクリニックは分院だからね。用事があるときはいち
いち行かなきゃならないんだ」

「そうですか・・・」

「んー。これがまた、スケジュール調整するのが大変だね。僕がい
ない時間は患者さんの予約が入れられないし」

「そうですよね・・・」

どんな用事なんだろう

仕事のことだね、もちろん・・・

上原先生のお父さんっていうのがなんか気になる・・・でも松山先生は、この前上原先生が私に会いに来たこと知らないんだし、松山先生がわざわざ、院長先生は上原先生のお父さんだって教えてくれそうなんかんじゃないし・・・

っていうか、そんなこと教える必要ない・・・のかも。

結局、こうやって余計な考えが増えるし。

でも、もう知ってるし・・・

「・・・きいちゃん？」

「・・・」

「きいちゃん」

「え？」

「大丈夫？試験で疲れたかな」

「あ、いいえいいえ、大丈夫ですよっ」

考えすぎ、考えすぎ

「合格発表は来週だよね？」

「はい、12日です」

「うん。じゃあ、報告待ってるね。」

「ハイッ、先生に、一番に報告に行きますッ」

「ハハハッ、はい。楽しみにしてます。」

笑顔を交わす。

家の近くに着いたときは、17時を回り、辺りは暗くなっていた。

「ありがとうございました。」

「どういたしまして」

「間に合いますか？お仕事・・・今から戻るんですよね？」

「うん、大丈夫だよ」

もうちょっと、先生といたかったな・・・

先生が、後部座席から鞆を取ってくれる。

シートベルトを外して鞆を受け取るうとすると、先生が鞆を離さない。

「？」

先生？

鞆の取ってごと、手を引つ張られる。

先生の顔が、ぐんと近づく。

ドキッ・・・

「きいちゃん、寂しそーな顔してる」

「え」

「またすぐ会えるよ」

そう言いながら、笑顔で先生は私のメガネをスーッと外す。

キスされるっ

「あ、あの、せんせ」

「うん？」

先生の顔が近づいてくる

「ひ、人が、通るかも」

「んー大丈夫大丈夫、もう暗いから」

「でも」

「・・・イヤ？」

「そ、そういうわけじゃ」

先生が頬に手を添えた。

唇が重なる。

先生の吐息が触れる。

舌が絡む。

体の力が抜けていく。

先生の中に堕ちていく。

いつも、これには逆らえない。

「じゃあ、またね、きいちゃん」

「はい・・・」

先生の車を見送る。

寒いのに、顔は熱い。

キスのドキドキが治まらない。

松山先生、最初に会った時の印象とだいぶ変わったかも・・・。
付き合うつて、こういうことなのかな。

たくさん時間を一緒に過ごして、先生の意外な一面を知っていく・
・・・みたいな？

っていうか最近の先生はなんだかすつごく・・・エロいつ！

男の人つて、結局みんな・・・??

せんちゃんの言ってた通りだな。

2月12日。

合格発表。

合格者には当日、自宅に通知が届くようになっていた。
放課後の教室で、ドキドキしながら携帯電話を握る。

「きい、早くかけなよ」

念のため、せんちゃんが付き添ってくれた。

「うん・・・」

「きいのお母さん、ちゃんと家に居てくれてるんでしょ？」

「うん」

「早く」

ドキドキ・・・

「あ、もしもし、お母さん？」

『あ、きい？電話遅かったじゃないのっ』

「え？」

まさか・・・

『合格だってよおっ』

「・・・ホント!？」

やったあーーーー!!!

せんちゃんと目が合い、笑顔を向けてハイタッチした。

『きい、松山先生に早く報告しなさい』

「わ、わかってるよつ。でも、先に担任に言わないと」

『あら、そうなのね。松山先生のところに伺うなら、今日は帰りは遅くなるのかしら?』

「え、あ、えつと、わかんない。じゃあねっ、ありがとう、お母さん」

『はいはい』

電話を切る。

「おめでとーう！きい！よかったねー！！」

せんちゃんが抱きつく。

「うん、ありがとうせんちゃん」

「きい、頑張ったもんねっ」

「うんっ」

「これで、このまま歯科衛生士になって、ゆくゆくは松山センセと一緒に働けるよ」

「えへへ、そうかな・・・」

「絶対できるよ！きいならできるっ」

「・・・ありがとせんちゃん。せんちゃんのおかげだよ」

せんちゃんがゆっくり離れる。

「うん、私より、松山センセだよ。早く報告に行きなよ！」

「うんっ。ありがと、私行ってくる！」

鞆を持って教室を出ようとする。

「あああー、ちょっと待ってきい！」

「え？」

せんちゃんの方を振り返る。

「直接クリニックに行くの??」

「あ・・・そっか、今日は平日だった」

どうしよう

でも、会って直接伝えたいし・・・

「あ、ねえ、仲村さんに電話して、松山センセ呼びだしちゃえば？」

「ん・・・でもいいのかな」

「報告するだけなんだから、5分でいいですって言ってさ。松山センセも喜ぶよきつと！」

「うん・・・あ、せんちゃんも今日デートなんでしょ？」

「イエース バレンタイン当日は大貴がバイトで会えないから、今

日チョコ渡すの。きいは？」

「今から会って、先生に聞いてみるっ」

「よし、行ってこーい！きいー！」

せんちゃんがガッツポーズをした。

「楽しんで来てね、せんちゃん！」

「きいもね！」

この前、せんちゃんと一緒に買いに行ったチョコレート。

松山先生、喜んでくれるかなー・・・
ん？

でも、先生歯医者さんだしなあ・・・

“虫歯になっちゃうよーきいちゃん”とか、笑顔で言われそう。

職員室で担任の迫じいに報告した後、走って校門を抜けた。

とにかく早く

早く

先生に・・・

16時。

クリニックのあるビルの前で、深呼吸をする。

仲村さんに電話してみる。

『もしもし？』

わっ

仲村さん・・・

電話で話すの初めてかも

「あ、あの、水嶋です・・・」
『おおー！君ね。知らない番号だから誰かと思った。どうした？』
「あのう・・・すみません、松山先生って、今忙しいですか？」
『え？松山先生なら、今日はもう帰ったよ？』
「え？だってまだ4時・・・」
『うん、そうなんだけどさ、今日は家で会わなきゃならない人がいるって言うって、事前に患者の予約も取らずに帰った。』
「あ、そう・・・ですか」

先生忙しいんだ・・・
今日が合格発表だって、覚えてるよね？

『家に行ってみるよ』

「え？」

『仕事中だってわかって俺に電話してくるぐらいだから、よっぽど大事な用事なんだろ？』

「あ・・・」

『いいから行けって。』

「はい」

『一人で大丈夫？送ろうか？』

「あ、いえ、大丈夫ですつ。すみません」

『そ？じゃ、気をつけてね』

「はい」

松山先生のマンションまでは地下鉄で二駅。
毎日使っている在来線とは逆方向だ。

ま、いつか・・・
先生に会いたいし、行ってみよう。

合格したことを驚かせたくて、電話もメールもせずにマンションへ向かった。

いつもと違う車両。

いつもと違う暗い窓の外。

先生の家に向かっていているという、ちょっと特別な気分。

早く先生に会いたい・・・

地下鉄の駅から、先生のマンションへはわずか2分。

地下からの階段を上ると、目の前に先生の住むタワーマンションがそびえ立つ。

先生の部屋はクリスマス以来。

一人で来たのは初めてだ。

高校を卒業するまでは・・・と、まだ部屋で二人きりになったことはない。

部屋に入れてもらえなくてもいい。

ただ、会って報告したいだけ。

先生、誰と会ってるのかなあ・・・

お仕事関係かな？

マンションの入口に差ししかろうとしたその時、エントランスから出てきた人物を見て、思わず声を失った。

え・・・

上原・・・先生・・・？

なんで

松山先生のマンションから・・・

足が、止まる。

高級そうな白いコート、ヒールの高いブーツを履いている。
アップにまとめられた髪の下には、カシミヤのマフラー。
制服で立ち竦む私に気づいて、上原先生も驚いている。

『あら、水嶋さん』

「・・・・・・・・」

なんで、この人がいるの？

“今日は家で会わなきゃならない人がいるって”

ズキンズキンと、胸の鼓動が痛くなってくる

家で会うつて・・・上原先生と？

なんで

『今ね、真一の部屋に行ってたのよ。』

「・・・どうしてですか」

なんで

『え？』

「どうして・・・あなたが先生の部屋に行くんですか？」

ズキン・・・ズキン・・・

鼓動が、痛い

『あなた、何も聞いてないの？』

「・・・」

聞いてないって、何が？

『聞いてないみたいね。ふふつ、大人にはいろいろあるのよ。子供には言ってもわからないようなことがね。』

なに・・・それ

その時、エントランスの扉から、大きな封筒を手に、コートを羽織った松山先生が出てきた。

「あ、上原さんまだいた。あのう、この書類の・・・」

上原先生にそう言いかけて、松山先生は私に気づいた。

「きいちゃん・・・」

その表情は、えらく驚いている。

何を言えいいのかわからない

苛立ちのあまり

声が出ない

『真一、私帰るわ。お邪魔でしょうから。また連絡して』
「・・・」

また連絡

またって何

上原先生は、ブーツをコツコツ鳴らして去って行った。
松山先生が近づいてくる。

「きいちゃん・・・」

思わず、一歩後ずさった。

先生は、私の反応に困惑している。

なんで

なんで

上原先生が松山先生の部屋に来てるの

「きいちゃん、あのね」

「・・・ですか？」

「え？」

「なんで、上原先生がいるんですか？・・・？」

涙が出てくる

「それは」

「子供に言えないことって何ですか？」

「え、なに・・・」

どうせ私は大人じゃない

「・・・私はまだ・・・入れてもらったことないのに・・・」
「・・・」

二人きりにもなれない子供

「一人で・・・入ったことないのに」

「きいちゃん」

「っ・・・」

先生が伸ばした手を振り払う。

「どうしてもあの人がつ・・・」

声が、震える

合格したのに。

先生に会って

合格したって言って

おめでとうって

言っただけだったのに

「きいちゃん、ごめん、落ち着いて、聞いてくれるかな」

「・・・」

落ち着けるわけない

「どうしても、上原さんに頼まなきゃならない書類があってね」
先生は、必死で弁解しようとしてる

「・・・」

「クリニックではできないことで」

「・・・ないです」

「え？」

聞きたくない

「聞きたくないですっ・・・」

「きいちゃん」

いつもいつも

上原先生のことばかり

もう

いい加減

聞きたくない

「きいちゃん、頼むから・・・聞いて？」

「・・・」

首を、強く振った。

いつもいつも

上原先生のこと

もう

いい加減

悩むのはうんざり

「・・・ヒドイです」

「ごめん、でも、本当に違つよ、きいちゃんが考えてるようなことは」

「私が考えてることがわかるんですかつ・・・?」

こんなこと言いたいんじゃないのに

「・・・僕は」

「先生、信じられないっ・・・」

腹立たしくて

悔しくて

「もう、いいです・・・」

「きいちゃんっ・・・」

「・・・」

「きいちゃんっ」

先生が掴んだ腕を振り払って、地下鉄の駅まで走った。

今日は、合格発表だったのに。

地下鉄で、いつもの駅まで戻った。
時間を見ようと携帯電話を開くと、着信あり。

17:30 松山先生

17:31 松山先生

17:34 松山先生

17:36 松山先生

17:40 松山先生

17:44 松山先生

17:45 松山先生

17:46 仲村恵介

17:48 松山先生

仲村さん・・・

“ 今度また何かあったら、自分で連絡して来い ”

なんとなく、仲村さんの番号で、発信ボタンを押していた。
トゥルルルル♪

トゥルルルル♪

トゥルルッ

『 もしもーし?? 』

仲村さん

「 」

『 あれ? もしもし?? 』

「……………」

どうしよう、泣きそう

『もしもーし??あれ、電波悪いのか??おーい?高校生??』

「……ハハッ」

『お?なんだよ、聞こえてんじゃん』

「………」

『先生には会えた?』

「……はい」

『そっか、そりゃよかった。無事たどり着いたかなーと思って電話してみたんだ』

「……はい」

『……どうしたんだよ?』

「……え」

『……泣いてんの?』

「泣いてません」

『泣いてんじゃん。今どこだよ?』

「……もう、帰るところです」

その時、駅の構内アナウンスが響いた。

「……まもなく、14番のりばに到着する……」

『駅か』

「………」

『待つてろ。プツ・・ツーツー』

どうしたらいいのかわからない

松山先生が信じられなくて

信じたいのに

本当は信じたいのに

「ここ、寒みーだろっ・・・」

駅前の噴水広場のベンチに座っていると、仲村さんに見つかった。

ユニフォームに黒のダウンを羽織って、息を切らしている。

「・・・」

「めちゃくちゃ探したよ・・・君、駅の中にいないからさ・・・」
膝に手をつけてハアハア言ってる仲村さん。

その優しさがただ、嬉しかった

手に握りしめる携帯電話の着信イルミネーションが、さつきからずつと光りっぱなし。
でも出たくない。

「電話、鳴ってんじゃねーの？」

隣に座った仲村さんがそれに気づく。

「・・・」

「・・・なにがあつた？」

「・・・」

一度泣いた後は、またすぐ簡単に涙が出てくる。

「話してみろって」

「・・・う、上原先生が」

「うん」

「・・・いました」

「はあ？」

「先生のマンションから・・・出て来て・・・偶然会って」

「なんだよそれ、なんで？」

仲村さんも、信じられないような顔をしていた。

「・・・先生は・・・違うって言ってたけど・・・」

「うん・・・」

「私・・・先生の話し聞きたくなくて」

「うん・・・」

携帯電話が光り続ける。

じっとそれを見ていると、仲村さんが携帯電話を取り上げた。

「あっ」

取り上げてすぐに開くと、電源を切ってしまった。

「帰ろう。送ってやるよ。風邪引く。」

そう言うのと、私の腕を強引に引っ張った。

慌てて鞆を取って着いて行く。

仲村さんは、何も言わずに歩いて行く。

噴水広場は寒いからか、相変わらず、駅前なのに人気がない。

「・・・スミマセン、仕事中に何度も、電話したりして」

仲村さんの足が止まる。

「・・・」

「いつも・・・仕事抜け出させてばかりで」

振り向いた仲村さんが、掴んでいた腕をグイと引いた。

「・・・！」

仲村さんの肩に、頬が当たる。

仲村さんの腕が、背中をぎゅっと締める。

仲村さんの温もりが伝わって、体が冷えていたことを実感する。

「なんで君はいつも泣いてんの？」

仲村さんの声が、耳にかかる。

「・・・」

「あの松山先生と一緒に、幸せなんじゃないの？」

仲村さん・・・

「・・・俺じゃダメ？」

「え・・・」

「松山先生じゃなくて・・・俺じゃダメ？」

「・・・」

「なんだっ たんだよ」

「え・・・」

「会いに行くほどの用事って」

「・・・合格・・・したんです」

「・・・そっか」

「・・・」

力を込めて、抱き締められる

「おめでとう」

松山先生を信じたいのに

その時はただ

仲村さんの優しさが

嬉しかった

先生の想い。

仲村さんに抱きしめられたまま、水しぶきを上げる噴水をぼんやりと眺めていた。

寒空の下、噴水の水は、辺りを一層冷たく演出している。

仲村さんのダウンから伝わる熱で、体だけは少しずつ温かくなっていく。

“俺じゃダメ？”

上原先生が言ったことは正しかったみたいで、仲村さんは、私のことを想ってくれていた。

妹みたいな存在だと言っていたから・・・、だから優しくしてくれているのだと・・・。

自分の都合のいいように解釈して、なんて、失礼なことをしていたんだろう。

なんて、わがままだったんだろう。

いつも助けてもらって

いつも甘えてばかりで

いつも、守ってもらってた。

仲村さんが、ゆっくりと離れる。

「とにかく、帰ろう、な？」

「・・・」

ただ頷いて、手を引かれるままに歩いた。

駐車場まで、ずっと無言のままだった。

仲村さんの車に近づくと、助手席に替えのユニフォームが無造作に

置かれていた。

ロックを開けた仲村さんは、それを助手席から後部座席に放り投げ、乗るように促した。

エンジンをかけて、仲村さんも乗り込む。

「ちよつと、ラボに電話入れるから、待ってね。」

「あ、はい・・・」

「もしもし、仲村です、はい、すみません、あのー、一時間ほどで戻るんで・・・」

仕事、抜けたままで本当に大丈夫なのかな・・・
って・・・私のせいなんだけど・・・

仲村さんが電話をしている間、窓の外を見ながら待っていた。

クリニックのビルの近く。

ポケットには、電源を切ったままの携帯電話。

「・・・はい、あ、その患者さんは、6番・・・第一大白歯のクラウンが・・・そうですね、はい」

仕事の会話を聞いていると、自分の置かれている状況と現実が、徐々に鮮明になってくる。

冷静さが、戻ってくる。

松山先生の話聞かずに、電話にも出ずに、仲村さんの車に乗っている。

18:30

車内のデジタル時計を見る。

心配・・・してるかもしれない

お母さん、電源切ってる間に電話掛けたりしたかな・

松山先生・・・

「はい、じゃあ、またあとで」

仲村さんは電話を切ると、シートベルトを締めて車を走らせた。

「あの、すみません、忙しいのに・・・」

とりあえず何か喋らなければと、出た言葉だった。

仲村さんは、一瞬、横目で私を見て、フツと笑った。

「いや、嬉しかったからさ。君から電話もらえて」

「・・・」

なんて答えればいいかわからない

「ハハッ」

「え？」

「困った顔してる」

「・・・」

だって、どうしたらいいか、わからなくて

「悪かったね。」

「え？」

「松山先生のことです辛い時に、俺が妙なこと言ったから混乱してる？」

「あ・・・」

仲村さんは、いつもなんでもお見通し

「ごめん」

「・・・」

「あんなこと言っつもりじゃなくてさ」

「・・・」

「」

「あつ、これ、君の好きな曲でしょ」

「え」

仲村さんは、低くされていたオーディオのボリュームを上げた。

I found God on the corner of
1st Amistad・・・

松山先生が好きな、The FRAYの曲。

松山先生と初めてデートした時、先生の車で流れていた。

誕生日の日、松山先生に会えなかった時、仲村さんの車で聴いた。

松山先生を想わずにいらなくなる

また、涙が出そうになる

俯く私の頭を、仲村さんが左手でポンポンと撫でた。

右手だけでハンドルを持って運転している仲村さん。

いつもは憎まれ口ばかりだけど、本当は優しい。

松山先生とは違った優しさ。

私は、どうしたらいいんだろう

家の近くの角を曲がったところで、仲村さんが突然車を止めた。

「あ、やっぱりねー」

「え？」

仲村さんは前方を指差して、眉を上げた。

「レンジローバー。停まってるよ」

「レンジロ・・・？」

指差した方を見ると、松山先生の車が停まっていた。

「あ・・・」

松山先生・・・

「・・・なんですか、レンジローバーって」

「はっ？」

「は？」

仲村さんはえらく驚いている。

「君、知らないの？」

「何をですか？」

「ハハハハハハ、無知ってコワイねえ」

苦笑いで返される。

「？」

「松山先生の車、あれ、レンジローバーっていうんだよ。超！高級SUV。」

「はあ・・・」

「あれは3代目モデル。君、相当いい車に乗せてもらってるんだよ？」

「はあ・・・」

そんなこと言われても・・・

「カッコイイ輸入車だなあとは、思ってたけど」
肩をすくめて答えると、仲村さんは笑いだした。

「ハハハハッ」

「えーなんですかー」

「なるほどね、まあわかるけどね」

「はい？」

「松山先生は、君のその純粹無垢なところに惹かれたんだろうね、多分。」

「は？」

「今まで松山先生に群がる女って、圧倒的に金目当てが多かったからね。」

「・・・」

「あのルックスで家柄もいいし、そりゃあもうウザいのがわんさか・・・」

「・・・」

「でもさ、松山先生は君を選んだんだよ？」

「・・・」

「その松山先生が、そうそう君を泣かすような真似はしれないと思うんだよな・・・」

仲村さんはハンドルに顎を乗せて、先生の車をボーッと見ながら話す。

「・・・わかってます」

仲村さんは私を見る。

「先生を信じたいって思ってるんです・・・さっきは、上原先生と一緒にのところ見ちゃって、ちよつと、動揺・・・してしまつて」

「うん、わかつてるって。何かっていうと登場しやがって、マジむかつくよな、あの女、ハハッ。」

「ハハッ」

気持ちさが、軽くなつていく

「よし。じゃあ、先生んところ行こう。」

「・・・」

「今は、俺のこととか、俺がさっき言ったことは考えなくていいから、松山先生んとこ戻れ。」

よく、わからない

仲村さんはさつき“俺じゃダメ？”と言ったのに、今は、松山先生のところに戻れと言う

「ホントはさ・・・」

「・・・」

「ホントは、ここに松山先生が来てなかったら、このまま君のこと、さらっちゃおうかなって思ったりもしてたんだけどね」

「・・・」

「でも、あの人はちゃんと君に会いに来てるし、君も、先生に会いたいって思ってるだろ？」

「・・・」

「想い合ってるなら、ちゃんと会って、話さなきゃダメだよ」

「・・・」

「君、ちょっとボーっとしてるとこあるけど、泣いてる顔よりは元気な顔の方がいいし、君を元気にできるのは松山先生だけだと思うしね」

仲村さん・・・

「・・・はい」

「よしっ！まったく、世話が焼けるよな、ガキは。」

仲村さんは微笑んで言った。

「じゃ、行くよ？俺がうまく話作るから、君は黙ってその場にいればいいから」

「え？」

「な」

「あ、はい・・・」

仲村さんは車をゆっくりと走らせ、松山先生の車の後ろに付けた。仲村さんの車に気づいて、松山先生が左の運転席から降りてきた。

うつ・・・

どうしよう・・・

先生の顔が見れない

仲村さんが車を降りて、私もゆっくりとドアを開けた。

松山先生が駆け寄ってくる。

「きいちゃんっ・・・」

黒いボトムスにコート・・・なんとなく、慌てて出てきたような服。私が助手席を降りると、仲村さんが運転席側から口を開いた。

『あー、駅で偶然会ったんっすよ』

「え？」

松山先生は仲村さんを見る。

『俺がATM行こうとしてたら、なんか悲壮な顔して歩いてたんでとりあえず送って来たんすけど』

「あ、そうか・・・」

ただ俯く私に、先生は近付かずとも遠くない位置で、少し困惑気味。

『松山先生』

「ん？」

『何があつたにせよ、あんま泣かさないでやってくださいよ』

え、仲村さん？

「・・・」

松山先生の顔が強張る。

仲村さんは、半ば冗談と思わせつつ、目が、笑ってない。

なんか・・・

この雰囲気は・・・

どうしよう、

どうしたらいいんだろうっ

「わかってる。ちょっと、誤解があっただけだ」

先生は無表情で、仲村さんに返した。

うわっ

先生、お、怒ってるかも

『そうっすか、んじゃ、俺はクリニックに戻りますんで』

「ああ、ありがとうな」

『ういーっす。じゃあな、高校生！』

「あ、ハイ、ありがとうございました・・・」

仲村さんは笑顔を向けると、車に乗り込み去って行った。

その場に残される先生と私。

気まずい・・・

そして寒い

「・・・」

俯いたまま、何を言えいいかわからない。

「きいちゃん？」

先生は恐る恐る、私の右腕に触れた。

そっと見上げると、先生は優しく微笑んでいる。

「よかった・・・心配してたんだ。電話も繋がらなくて、家に伺っ

たら、僕の所に行くって連絡があつたきりだつて言われて」

「あつ、そうだつ、お母さんには何も連絡してない」

「あ、うん、だから、僕と待ち合わせしてて、僕が間違えて家に来たつて言っちゃった」

「え??」

「僕のせいでこんな事になつたし、ご両親に心配かけちゃマズイと思つて、その・・・」

「・・・」

「ごめん・・・」

先生・・・

「・・・私が帰らなかつたら、どうするつもりだったんですか・・・？」

「・・・帰らない・・・つもりだったの・・・？」

少し、悲しげな目

「いえ・・・ごめんなさい」

私、今すぐく、嫌な女の子になつてる

口答えして

聞き分けのない

嫌な女・・・

先生がそつと抱きしめる。

背中に先生の腕、頬には先生の鼓動が伝わる。

「きいちゃんは何も悪くないよ。僕が悪かつたんだから・・・」

「・・・」

「ごめんね、きいちゃん」

「・・・」

先生が、誠心誠意、私に謝る。
先生の腕の中。

さっきまでの怒りも、不安も、悲しさも、
一気に消えていく。

気持ちが・・・落ち着いていく。

意地を張らないで、ちゃんと話を聞かなきゃ・・・

「合格したんだってね」

「・・・はい」

「おめでとう」

「・・・」

「おめでとう、きいちゃん」

先生は、抱きしめる腕に力を込める。

先生の背中に、そっと手を回した。

「ハイ・・・先生のおかげです」

「きいちゃんが頑張ったからだよ」

「でも、先生にたくさん教えてもらったから・・・だから、あの、
ありがとうございました」

「ススッ・・・どういたしまして♪」

あ、いつもの、先生との会話に戻った・・・

先生が笑う時の、ススッっていう鼻の音

「きいちゃん、もう帰る？」

先生は腕時計を見ながら尋ねる。

「え？」

「今、7時（19時）過ぎだけど・・・」

「あ、えーと、遅くなるかも・・・って、言ってます」
「ホント？」

「？、はい、明日も土曜日で休みだし・・・」

「じゃ、一緒に来て」

先生は笑顔で手を引っ張ると、右の助手席のドアを開けた。

「どこに行くんですか？」

「ん？いーからいーから」

先生に背中を押され、助手席に乗り込む。

曇ったメガネを拭きながら、シートベルトを締める先生を見る。

どこに行くのかな？

先生はゆっくりと車を走らせた。

夜の街を先生の車で走る。

今日は、なんだか目まぐるしい。

合格発表で、朝から神経すり減らして、地下鉄で先生のマンションに行ったら上原先生には会っし、仲村さんには“俺じゃダメ？”って言われて、車で送ってもらったら松山先生が来てて、そして今更だけど、レンジローバーなる高級外車で本日二度目のドライブ・・・見慣れた道だけど、一体どこへ？

「ハァ・・・」

「あれっ？きいちゃん、大丈夫？？酔った？」

「え？」

「今、大きなため息ついてたから・・・」

「え、あ、いえっ、大丈夫です、全然っ」

しまった、つい、気を抜いたっ

「ホントに、ごめんね」

正面を見て運転しながら、先生は言った。
その横顔を、黙って見つめる。

「今日、上原さんがいたのはね、書類を届けに来たからなんだ。」
「書類・・・」

「うん。この前、きいちゃんの入試の日、僕、院長に会いに行つて
たつて言つたの覚えてる？」

「あ、はい」

「うん。うちのクリニックは分院でね、実は、上原さんのお父さんが、
総院長なんだ。」

それは知ってます

「・・・」

「あれ？もしかして知ってた？」

「・・・はい」

「そっか・・・。僕ね、あのクリニック辞めるんだ」

え

「えっ？」

「この3月で」

「ええっ？？どつどつしてですか？まさか、私のせいで・・・」

「きいちゃんのせい？？」

はっ

そうだった

それは上原先生が、脅して私に言つたんだつた

「い、いえあの、どうしてですか・・・？」

「開業しようと思っててね。」

「開業？」

「うん。僕ももう30になるし、自分のクリニックを持つにはちょっと若いかもしれないけど、年取って失敗するより、早い方がいいかと思つて」

「はあ・・・」

「ちゃんと決まつてから話すつもりで、仲村もまだ知らないんだ。」
「え・・・」

仲村さんも知らない？

「仲村には、できれば僕を手伝ってもらいたいと思つてるから、全てしつかり決まつてから話そうと思つてて、内密に進めてた話だから、クリニックでは出せない書類だつたっていうか」

「あ・・・」

「でね、もともとは、上原さんが来る予定じゃなかったんだよ」

「え？」

「院長にクリニックを辞める話をした時から、上原さんとの結婚を迫られててね」

「・・・！」

えええーっ??? (声にならない)

「あつ、断わつたよ!? もちろん」

「・・・ (口だけ開いている)」

「きいちゃん・・・？」

「は・・・はい」

「ごめんね、まだ続きがあるんだけど」

「はあ・・・」

今日は・・・衝撃事実はもうカンベンしてほしい・・・

「院長はね、僕と上原さんが大学時代に付き合いがあったのを知ってて、それで、そういうことを言いだしたんだけど、はつきり言って、僕としてはそんなの冗談でも有り得ないし、そもそもあのクリニクでこれ以上続けたくない理由の第一位が上原さんなわけで・・・」

「・・・」

「あ・・・の、それで、院長が、家でそのことを含めてちゃんと話したいって言うから、仕事早退してまで待ってたのに、来たのが上原さん本人で・・・」

そう・・・だったんだ・・・

上原先生本人が来たのが、なんとなく納得できる。

あの人なら、やりそう・・・

「・・・なんか、僕の言ってること、自分でも言い訳がましい気がするしてきた」

「え？」

「ごめんね、きいちゃん。傷・・・ついた・・・？」

「え、あ、いいえ、なんかちよつと、ビックリ・・・しましたけど」

「そうだよね・・・大体、僕が辞めることを早く話しておけば、こんなことにはならなかったかもしれないし」

「はあ・・・あ、あれっ、ここって・・・」

そこには見覚えのあるタワーマンション。

本日二度目。

車は地下駐車場へ滑り込んでいく。

松山先生のマンション??

先生は慣れた手つきで車を駐車スペースに停める。

エンジンが止まると、車内は一気にしん・・・となる。

「さ、着いたよ」

「え、あの」

先生はさっさと運転席を降りると、助手席側に回り、ドアを開けた。

「おいで、きいちゃん」

先生は優しく笑って右手を出す。

その笑顔に釣られ、その手に引つ張られていく。

地下駐車場から直結のエレベーターで、27階へ上っていく。

きつく繋がれた手。

見上げるとそこにある先生の横顔に、ドキドキが増していく。

クリスマス以来の先生の部屋のドア。

鍵を開けて、先生が中へ促す。

「どうぞ」

「あの、でも・・・」

先生としては、私が高校卒業するまではダメなんじゃ・・・

「いいから。入って、きいちゃん」

「・・・はい。お邪魔します」

ライトが照らす玄関に入り、先生が後ろに続く。

扉が閉まり、鍵がかかる音にドキリとする。

靴を脱いで、リビングに続くおしゃれな廊下を遠慮がちに進む。
リビングのドアに手をかけると、先生が優しく腕を引っ張った。

「きいちゃん、そっちじゃなくてこっち」

「え？」

えっ

そっちは寝室・・・

先生は寝室のドアを開けると、私の手を引いたまま中に入れた。スタンドの照明が点けられ、大きなベッドが視界に入る。

コートを脱いで、ネクタイを緩める先生の後姿に、鼓動が高鳴る。動揺を隠したくて、思わず口を開く。

「先生・・・？」

コートをベッドに放り投げると、先生は突然振り向いて、力強く私を引き寄せた。

「・・・」

「きいちゃん」

心臓が、ドキドキする。

先生の胸元に耳が触れ、先生の鼓動も少しだけ早くなっているのが聞こえる。

「・・・ごめん、きいちゃん」

「・・・」

「もしかしたらちょっと、乱暴なことするかも」

「え？」

一瞬にして、ゆるやかにベッドに押し倒される。

メガネをスツと外される。

薄暗い部屋で、視界がボヤける。

顔が熱い。

心臓のドキドキが痛い。

すぐ目の前に、先生の顔。

先生・・・？

先生は、真っ直ぐに私を見つめる。

その目はやっぱり少しだけ、悲しげで・・・

「きいちゃん・・・」

「・・・はい」

「仲村に・・・何か言われた？」

「え？何か・・・って？」

「仲村は・・・、きいちゃんのことを、好きなんだと思う」

「・・・」

先生、気付いて・・・

「っ・・・」

先生が、強く口づけた。

強引に唇を割り、今までにない、深いキス。

舌が絡む。

いつもの優しいキスとは違う。

切羽詰まったような、息苦しいキス。

でも。

不思議と、嫌じゃない。

先生の熱い想いが、唇から伝わる。

ほのかな、クリニックのにおい。

松山先生・・・

そつと、唇が離れる。

それでも、吐息のかかる位置に先生はいて、

その熱を帯びた視線に、二度目のキスをせがみそうな自分がいる。

「ごめん、きいちゃん・・・」

「・・・」

熱いキスに放心状態のまま、先生をじつと見つめる。

「きいちゃんが仲村と一緒にだったことに異常に腹が立って・・・な

んかもうつ、どうにもならなくて・・・」

「・・・先生・・・」

「ハハッ・・・、情けないね・・・この歳で、やきもち・・・なのかな・・・」

「

先生っ・・・

胸が、キュッと締め付けられる。
自分でも、ビクッだったけど。

先生の首に腕を回し、先生の唇に、自ら口づけた。

先生は一瞬固まってたけど、
すぐに優しく抱きしめて、
たくさん、キスをしてくれた。

静かな寝室には、時々響く唇の音
先生の吐息
胸の鼓動・・・

どのくらいの時間が経っただろう
制服のまま抱きしめられて、先生とベッドに横たわっていた。
「んっ、このまま返すのは惜しいなあ・・・」
「あー、ハハ」

そんなふうに言ってもらえるんだ・・・

「きいちゃん」
「はい？」

「ごめんね、本当に・・・」

「先生・・・」

「うん？」

「今日は、謝ってばかり・・・」

「そりゃあ、僕が軽率だったから。上原さんを・・・招き入れたりして」

あ

「あつ」

「え？」

「先生？」

「はいっ」

「それで上原先生は、納得されたんですか・・・？」

「あ、結婚断わったこと？」

「はい・・・」

「っていうか、もう、こういうの口にするのも嫌なんだけどね！。

そもそもなんで、開業するからって院長の娘と結婚って話になるのか理解できないし、それにもう、上原さんにもきっぱり言ったから。」

「え、なんて・・・」

「僕はきいちゃんとの将来を考えてるって」

「・・・」

え

「あ、いやあの、今すぐにどうこうってわけじゃないよ？」

先生が、慌てて私の顔を覗き込む。

「・・・」

「前々から考えてはいたんだけど・・・高校生にこういうことは、さ

すがにまだ重いだろなって思っていたし、その・・・これからきいちゃんは、衛生士を目指して勉強していくわけだけど・・・」

「はい・・・」

「きいちゃんの将来の基盤を、僕が造ってあげられたらって思ってたね」

「基盤？」

「うん。僕が開業しておけば、衛生士の資格を取ったきいちゃんが就職に困ることもないし、これから先もずっときいちゃんと一緒にいたいから、それは僕にとっての基盤でもあるんだ。」

先生・・・

「きいちゃんと一緒に働いたら、きっと毎日楽しいだろうし、なにより、きいちゃんを他のクリニックに渡すなんて考えられないしね。」

私のために・・・そこまで・・・

涙が、溢れる。

「あれっ？きいちゃんっ？」

「ううっ・・・」

「どうしたのっ？ごめんっ、あれ、僕またなんかひどいこと言った？」

「ちが・・・うう・・・」

「きいちゃん・・・」

先生は、優しく涙を拭ってくれる。

「泣かないで？きいちゃん」

「だって・・・嬉しくて・・・」

先生の気持ちが嬉しくて

私はこんなに大事にされてたのに

一瞬でも、先生の気持ちを疑って

別の男性に甘えて

私はホントに

バカだ。

でもやっぱり、引つ掛かる。

上原先生と、松山先生の・・・過去。

気にしても仕方がないけど、この先もずっと、もやもやしたままなのは・・・嫌だ。

「それでも、上原先生は・・・」

「うん？」

「上原先生は、松山先生のことが忘れられないんじゃないですか・・・？」

「・・・」

先生は一呼吸置くと、ベッドの上に起き上がり、私をゆっくりと起こした。

先生がベッドの縁に座るのを見て、私もとなりに座った。

「きいちゃん、僕と上原さんのこと、どんなふうに聞いているの？」

そう尋ねながら、私の顔にそつとメガネを戻してくれる。

「・・・え？」

視界がクリアになる。

「まだ誤解があるような気がする。」

「え、だから、先生と上原先生は、大学生の時に付き合っていて、上原先生が、松山先生のお兄さんを好きになったから、先生と別れることになったって……」

「……」

先生は、腑に落ちない顔をした。

「違うんですか……?」

「いや、まあ、あらずじとしては、概ね間違っではないけど……肝心なところが抜けてるかな……」

「……?」

「上原さんは、僕から兄に乗り換えたんじゃないくて、初めから兄のことだけが好きだったみたいだよ。」

「え?」

「兄っていうのは、次男の方なんだけどね、僕と知り合う前から、どういいうきさつかは知らないけど、一方的に兄のことを知ってたみたいで、僕と付き合ったのは、兄と知り合うための、ただの口実だったんだよ。」

「え、じゃあ」

「僕は利用されただけ。付き合ったって言うても、在学中の3カ月足らずだったし、上原さんの方から別れ話された時は、すでに兄とデキてたみたいだしね。」

「先生は気付かなかったんですか?お兄さんと上原先生がそうなったこと……」

「んー、僕ってちよつと、鈍感なところあるみたいで……ハハ」

苦笑いを浮かべる先生。

それは、仲村さんも言ってた……

「二番目の兄は、女性に関しては来るもの拒まずだね。上原さんともそんなに長くは続かなかったみたいだけど。僕にはそんなこと関

係ないし。」

「だけど・・・今は松山先生を想ってるように見えましたけど・・・」

今日だって、先生の部屋に居たことを自慢げに言ってたし、カフェで煙草を吸ってた時も、なんとなく寂しそうな表情だった・・・

「ススッ・・・きいちゃん、上原さんに何か言われたの？」

先生は、優しく頬に触れた。

「はつきり・・・真一が好きな・・・って、言われたことあります」
「ハッ・・・ハハ」

呆れたように、先生は笑った。

「それ、絶対嘘だよ」

「・・・」

「さつき、白状して行っただから。上原さん」

「白状？」

「うん。“どうせまた、兄さんに近づきたいだけなんだろう。”って聞いたなら、すごい真っ赤な顔して、“ええ、その通りよッ”だってさ、ハハッ」

上原先生の口調を真似しながら、バカにしたように笑った。

あの上原先生が、赤面・・・？

「兄さんのことが忘れられないって、はつきり言ってたし。」

「そうだったんですか・・・ハハ」

「・・・」

先生は膝に肘を突いて、となりに座る私の顔を覗き込む。
微笑んで、じっと見つめられる。

「もう、聞きたいことはない？きいちゃん」

「・・・」

「なんでも聞いてよ、この際」

優しい、眼差し。

「・・・あの」

「うん？」

「・・・辛かったですか？上原先生と、お兄さんのことを知った時・・・」

先生は、上を見ながら一瞬考えた。

「うーん・・・そうだなあ、まあ、純粹に、僕を想ってくれてるんだと信じてた部分があったから、騙されてたってわかった時は辛かったけど、失恋に対する辛さより、女性に対してちよっと人間不信になってね。」

「あー・・・それはそうかもですね・・・」

「まだ若かったしね。付き合ったのも3カ月だったし、そっちのキズは浅かったけど。」

淡々と話す先生の表情から、先生の中では本当に、上原先生は無の存在なんだと伝わってくるようだった。

「それにほら、僕、野球で忙しかったからね。」

「あ、そうでしたね、野球やってたって・・・」

「あつ！そうそう」

先生は何かを思い出したかのように立ち上がると、部屋に置いてあったビジネス鞆を持ってきた。

中から封筒を取り出し、私に差し出す。

「これ」

「？」

封筒を開くと、『プロ野球オープン戦2010・・・』と書かれたチケットが入っていた。

「あ、これって」

「オープン戦のチケット。一緒に観に行こうって約束してたからね。」

去年の秋、先生と初めてデートをした時、野球と一緒に観に行こう

と約束した。

その約束が、もうすぐ果たされる。

嬉しかった。

本当に

嬉しかった。

「あれ？5枚も入ってますよ？？」

「あ、そうなんだよ、仕事関係でチケット予約に強い知り合いに頼んだら、なぜか5枚もくれてね。安くしとく・・・とか言って」

あれー・・・

二人で行くんじゃないんだー・・・
ちよつと残念。

「あ、あの、じゃあ、仲村さんとかも一緒に・・・」

「え、仲村？」

はっ！しまったっ

今、仲村さんの名前出すのはマズかったかもっ・・・

「仲村ねー・・・」

「い、いえあの、せんちゃんとかでもいいならっ。せんちゃんの彼氏とかっ」

「・・・」

先生？

何か考え込んでる・・・？

「いや、いいよ、きいちゃんが良ければ、仲村も一緒に。もちろん泉さんでもいいし。」

ホッ・・・

じゃない。

仲村さんとも、ちゃんと話さなきゃ・・・

・・・おなかすいた

「先生」

「ん？」

「あの・・・おなかすきませんか？」

肩をすくめて尋ねると、先生はハッとしたように腕時計を見た。

「そうだね！ごめん！もう9時（21時）だもんね。どこかで食事して、家に送るよ。」

「すみません・・・」

「いや、僕こそ気付かなくて。ご両親が心配なさるね。」

先生は、慌ててコートを羽織る。

「あ、いいえ、先生と一緒になのはわかってるから、多分大丈夫です。」

「そう？」

「ハイ」

鞆を持って寢室を出ようと私の腕を、先生がそつと引き止める。ドアに身体をそつと押しつけられ、顔を掬い上げるようなキス。触れあう唇に、胸はドキドキ・・・

まだ、息のかかる位置。

「きいちゃん、あさつては・・・デートに誘ってはくれないの？」

「え？あさつて・・・」

あ！

バレンタイン！！

「デート、できるんですか・・・？」

「うん、できるよ。日曜日だから」

「あ、じゃあ・・・」

先生は試すような笑顔で、私の言葉を待っている。
最近ちょっと、こういういじわるが・・・増えた。

「デート・・・してください・・・」

「・・・スッ、もちろん。僕なんかで良ければ。合格祝いも兼ねようね」

アヒル口で、優しく笑う。

凜々しい切れ長の目で見つめる。

キスをするときは、足を開いて身長差をカバーする。

高い鼻が頬にあたる。

いつもクリニックのおいがする。

顔に添えられた手はあたたかい。

唇から伝わる、先生の想い。

私を、好きでいてくれる。

松山先生の全部で

私を抱きしめてくれる。

先生の全部で

受け止めてくれる。

ならば私も応えたい。

先生の

その熱い想いに。

先生

松山先生

私も好き。

先生のことが

大好き。

ずっと一緒。

いつまでも先生と

一緒にいる。

エピソード

「え？昨日もデートしたのに、今日も会ったの？」

「うん。先生が、どうしても一緒に食事をつて。」

バレンタインの翌日の月曜日、放課後の教室で、せんちゃんとココアを飲んでいた。

放課後と言ってもまだ14時。

2月は、本校の入学試験や生徒の大学入試、就職試験などで、授業は月の前半で殆どが終わり、午前中だけの授業や休みが増えてくる。合格して進学先が決まった3年は、ゆつくりと卒業を待つのみ……

「いいなー。昨日も豪華なお店でディナーだったんでしょ？」

「う、うん……まあ」

バレンタイン当日も先生と過ごせるなんて思ってたから、一緒にいられるだけでも嬉しかった。

先生はデートの時はいつも、素敵なお店を予約しておいてくれる。

「私なんかこの前の大貴とのデート、ファーストフードのお持ち帰りだったのよ。もう信じられない。」

せんちゃんは、私が先生とのデートの話をするたびに、大貴くんとデートの不満を愚痴るようになっていた。

「でも大貴くん、バイトしてるんじゃないの？ファーストフードじゃないけど、せめてファミレスとか……」

「大貴はオートバイが欲しくてバイトしてんのよ。だから、デートしても全然お金遣わないし、ホントつまんない。別れようかな、マジで」

「ええっ！？ちょっとせんちゃん？」

「だって、松山センセの話聞いてたら、やっぱり年上って素敵なんだもーんっ」

「あー、ハハ・・・」

「いいなあ、きいは。半年前は、まさかきいが、こんなに素敵な彼氏見つけるなんて思ってもみなかったけどねー。」

「う・・・うん」

私だって、今でも時々信じられなくなる。

「あ、そうだ、あのね、松山先生が、3月のプロ野球のオープン戦のチケットを取ってくれたんだけど、せんちゃんと大貴くんも一緒に行かない？」

「えっ！行く行く！行きたいっ」

せんちゃんの目がキラキラしてきた。

「うん、じゃあ、大貴くんにも伝えてね？」

「えー・・・大貴いっ。それより、松山センセに誰かいい人紹介して欲しいっ」

「なに言ってるのせんちゃんっ。チケットは5枚しかなくて、あと一人は仲村さんに決まってるのっ」

「なーんだ、な・か・む・ら・さ・ん・かあー」

目を細めてつまらなさそうに、あご肘を突いた。

「なんで？せんちゃん、仲村さんと気が合うじゃない。クリスマスの時も意気投合してたし」

「ええー、だって仲村さんはきい狙いだし。」

「えっ」

せんちゃんが流し目で私を見る。

「お・れ・じゃ・ダ・メ??」

「うつ・・・」

・・・そう。

あれ以来、仲村さんとは会っていない。

ちゃんと話さなきゃいけないって・・・思ってるけど。

「きい、モテモテねっ フフッ」

「んもう、笑い事じゃないんだって。せんちゃん、楽しんでるでしょ・・・」

「うんっ。この先どうなるのか、たーのしみっ」

「ー・・・」

仕事を早めに切り上げるからと、20時に駅近くのレストランで待つように先生に言われていた。

気取らないラフなスタイルの洋食店で、高校生の私でも気軽に入る店構えだった。

店に入ると、洋食特有のおいしそうな香りに出迎えられ、ウェイトレスの女性に声を掛けられた。

「いらっしやいませ」

「あっ、あの、松山・・・です」

「はい、4名でご予約の松山様ですね。」

「え？」

「お待ちしておりました。どうぞ？」

「あ・・・」

「ただいま、一名様、いらっしやっております」

「は・・・」

案内されるままに、女性に付いて行く。

4名?????

え？

なんで4名？

誰と誰？？

案内されたテーブルに、見慣れた茶髪の男性。

え、うそ

「・・・仲村さん？」

背後から声を掛けると、仲村さんが振り向いた。

「お？高校生！」

「くんばんは・・・」

「あれ、松山先生は？」

「え？一緒じゃないですよ、ここで待つように言われて来たので」

「あれ？そうなの？」

「はい・・・」

お互いに、何がどうなっているのか分からない。

4人掛けの四角いテーブル。

とりあえず、仲村さんのとなりに座った。

「え？松山先生が来るだろ？」

「はい」

「あと一人誰？」

「・・・？」

誰？

「・・・まあ、いいか。待ってりやそのうち来るだろ。」

「え、仲村さんは、今日はクリニックで先生と一緒にじゃなかったんですか？」

「いや、一緒だったよ。飯喰いに行くけど、お前も来るかって言わ

れてさ。奢りなら何でもいいやって思ってたんだけど」
「そうですか・・・」

・・・あの日以来、仲村さんに会うのは初めて。

たくさん励ましてもらって

たくさん助けてもらった

「・・・あのう」

「ん？」

「この前は、ありがとうございました。」

「ああ、ちゃんと話せた？」

「・・・はい」

「そっか。うまくいったならよかった。またまた俺のおかげじゃん

」

仲村さんはニヤツと笑う。

「・・・」

何をどう言えばいいんだろう

「ハハッ」

「え？」

「そんな困った顔すんなよ」

「あ・・・」

「なに？俺のこと、ちよつとは考えてくれてた？」

「・・・」

仲村さんは緩やかに笑った。

「ごめんな、ホントに」

「え？」

「そんなふうに困らせるつもりじゃなくてさ。この前はつい、君のこと放つとけなくて、こう、君の気持ちも考えずに言っちゃって・

」

「・・・」

「俺はね、松山先生と一緒にいる君を見てるだけで楽しいんだよ」

「・・・」

「君が幸せなら、俺も嬉しいし・・・」

仲村さん・・・

「だから、また前みたいに帰ろうな？」

「え？」

「ほら、君は妹みたいなかんじ？」

「あ・・・」

「またなんか困ったことがあったら、いつでも俺に言って来い」

「・・・」

「助けてやるから」

「・・・」

どうしよう、なんか、泣きそう

「な？」

「・・・ハイ」

「・・・ハハッ、泣くなって」

「・・・」

ありがとう、仲村さん

ありがとう

ごめんなさい・・・

「こちらになります」

背後で、ウェイトレスの女性の声がした。

その直後、コツコツというピンヒールの音。

「は？なんなのこれ」

あまり良くない記憶によみがえる声・・・

振りかえると、今日もばつちりキマツた上原先生が立っている。

「げっ」

仲村さんが、露骨に嫌な顔をする。

「げってなによっ。ご挨拶じゃない、仲村くん」

なんで・・・この人が？

「こんばんは、水嶋さん」

「・・・こんばんは」

上原先生は、着ていたコートを脱ぐとウェイトレスに渡し、私の真向かいの席に座った。

私と仲村さんはお互いに、わけがわからない・・・という顔で目を合わせる。

仲村さんが、無言で「は？」という表情をする。

私はただ、微妙に首を横に振る。

「真一に招かれて来たのよ。文句ある？」

上原先生は、私たち二人に言い放つ。高飛車に。

「すみません、遅くなって・・・」

直後に、ネクタイにスーツ姿の松山先生が現れた。

いつもなら、“先生カッコイイ・・・”と、ときめいた後に、『こ
んばんは』とか『先生』なんて言葉を発するところだが、私も仲
村さんも、状況把握に戸惑っていて、声が出ない。

とりあえず、先生の顔を見る。

この状況を説明できるのは、先生だけ・・・。

「ごめんね、きいちゃん、待った？」

いつもの優しい笑顔。

でも。

待った？とか、そんなことはどうでもいいです・・・
一体どういう・・・

「真一い、私たち二人だけの食事なのかと思ってたのよ？なんなの
これ？」

足を組み、テーブルに顎肘を突いて、上目づかいで松山先生に尋ね
る上原先生。

こっ・・・この人はっ・・・

ムツと来る感情を抑えながら、ふと横を見ると、仲村さんはイライ
ラ全開。

私以上にこの人を嫌っているのだから、無理もない。

手に持っていたコートを椅子の背もたれに掛けると、松山先生が私
のとなりに座った。

「なんで僕が、あなたと二人で食事するんですか？」

私と仲村さんは目が合う。

互いに、えっ??という表情。

事の成り行きを見守るべく、私も仲村さんも、無言・・・

「だって、水嶋さんと仲村くんも一緒だなんて言っただけじゃない。」

「書類、揃いましたので。これで全部です。」

上原先生の苦情を無視して、先生は大きめの茶色い封筒を出した。この前言った、先生がクリニックを辞めるための、手続きの書類のようだった。

上原先生は、しぶしぶ中身を確認する。

「わかったわ。では父に渡しておきます。」

「よろしく願います。」

「よかったら、医師開業のコンサルティングやってる税理士を紹介しましょうか？私の知り合いに何人か」

「結構です。」

松山先生は、最後まで聞かずに遮った。

上原先生は呆気にとられ、仲村さんは、笑いそうなのを堪えている。「その手の知り合いなら、あなたの世話になる必要はありませんから。」

先生は、ビジネス鞆の中を整理しながら答える。

「そ、そうね。外科医の息子だし、お父様でもお兄様でも、人脈はいくらでもありよね。」

上原先生は書類を封筒に入れる。

おなかすいたなあ・・・

仲村さんと二人で、テーブルに置いてあったメニューを開いた。

無言で。

「じゃあ、今日はどうも。」

松山先生は無表情で、上原先生にそう言った。

「・・・？」

「は？」

上原先生は、驚いたように聞き返す。

「え、だから、書類はお渡ししましたし」

「・・・帰れってこと？」

「はい。」

仲村さんは、メニューで顔を隠して震えている。笑いたくてたまらない模様。

「なんでよ！食事するんでしょ？ついでにこの子たち（きい・仲村）も一緒にっ」

「ここで待つててくださいとは言いましたけど、あなたと食事するとは言っていないませんよね。」

「なにそれっ、レストランに呼ばれたら、誰だって食事すると思うでしょっ！」

冷静な松山先生の前で、上原先生の、耳をつんざくようなキンキン声。

「僕は書類をお渡ししたかっただけで、“ついで”はあなたの方です。」

一蹴した。

「なっ・・・」

上原先生は、ヒステリックに怒り心頭。顔が赤い・・・

「ブッ・・・ハハハハハッ」

ついに我慢の限界か、仲村さんは大笑い。

私も釣られて、無言で苦笑い・・・

「なんなのッ、もう、頭に来る！わざわざこの子たちの前で、私をコケにするために呼んだんでしょっ！」

「そんなつもりはありませんけど、そうなったならすみません。」

松山先生は終始、無表情のまま・・・

「信じられないっ。帰るわよ、帰って欲しいんでしょっ」

上原先生は、書類をいそいそとバッグにしまう。

席を立つて、私を上から目線で睨みつけた。

ええーっ（なんで私ー??）

「水嶋さん」

「あ、はい・・・」

「真一はこういう男よ。本当はものすごく意地悪で、全然優しくな
んかないのよっ。」

「え、あの・・・」

松山先生は呆れ顔。

仲村さんは半笑い。

上原先生はバッグを持つと、テーブルを離れた。

「あ、そうそう」

まだ、何か言い足りない様子。

「水嶋さんあなた、彼のお兄様方にお会いしたことある？」

「え、いいえ・・・」

「フフッ、会ったら後悔するわよ。真一なんかより100倍イイ男
だからっ」

「え」

「ごきげんよう」

ご、ごきげんようって・・・

上流家庭だな・・・

上原先生はピンヒールをコツコツと鳴らし、颯爽と立ち去った。

「ハア・・・」

松山先生は脱力したように椅子にもたれ、大きなため息をついた。

『なんだありゃ。フラれたからって、負け惜しみか？何自慢だよ』
仲村さんがバカにしたように言った。

「負け惜しみだろ。きいちゃんに対する。」

先生はそう言うと、笑顔で私の頭を優しく撫でた。

うわーっ……

テレる……

「ごめんね、きいちゃん。おなかすいたよね？」

「はい……」

『すみませーん、注文いいつすか？』

仲村さんがウエイトレスの女性を呼ぶ。

「きいちゃんも仲村も、今日は好きなものたくさん食べて。」

『ういつす』

「……ハイ」

あとで気付いたけど

松山先生は、上原先生との無感情なやり取りを直接見せることで、

私に安心させたかったんだ。

これ以上私が

上原先生のこと、気を揉むことがないように。

『幾らぐらいいきそうなんすか？開業資金』

「トータルで5000万くらいじゃないか。設置するユニットの数にもよるけど」

松山先生はグラスワイン、仲村さんはビールを飲みながら、時折、フリッターやサラダを口に運ぶ。

『ラボは広めをお願いしますね。』

「テナントもいくつか候補はあるけど、人通りがあるに超したことはないしな。ラボの広さは二の次だ。」

『そうっすかー。始められるのって、いつぐらいなんすか？』

「なるべく急ぐけど、早くて9月ぐらいかなあ……。まあ、夏には求人かけるつもりだし、お前もそれぐらいを目処に移ってきてくれれば。技工用機器は、早いうちからお前が選べ。」

『えっ！いいんすか？』

「ああ。使い手を選ぶのが一番だからな」

先生と仲村さんの間で飛び交う、開業に向けての話を聞きながら、その横でもくもくとグラタンを食べる。

お母さんが作るグラタンもいいけど、洋食店のグラタンは格別。

おいしい〜♪

「ススツ・・・おいしい？きいちゃん」

『ホント、うまそうに食うね』

気がつくと、松山先生と仲村さんが、微笑みながら私を見ている。

「あ、ハイ・・・」

おいしいし

幸せです。

『それにしても、さっきの上原、マジ笑ったよなーっ、高校生っ』

「仲村、その話はもういい・・・」

『兄貴の方が100倍イイ男だって言われてたじゃないっすか』

「だからその話は・・・」

松山先生は、肘を突いて頭を抱える。

「お兄さんて、どんな人たちなんですか？」

思い切って、興味本位で尋ねてみる。

「きいちゃんは知らなくていいよー」

先生は笑顔で答える。

『でも、いずれは会わせることになるんじゃないんすか？』

「うるさい仲村」

エピローグ（後書き）

作者のデルタです。

My Dentist - 先生。 - は、本編はこれにて一旦完結になります。

14話目は長かったですね……。文字数もいつもの2倍でした。すみません……。

エピローグでは、上原がきいに、今までのことを謝るような件を考くだりえていたんですが、男二人にこれだけコケにされて、さらに謝るといふのは、やはり上原のプライドが許すはずもないと思い、ここはやはり彼女らしく、捨て台詞でご退場いただくことにしました。

最終話までお付き合いくださり、本当にありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1845g/>

My Dentist - 先生。 -

2010年12月11日15時16分発行